

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム
文書バージョン: 4.2 – 2015-11-12

Business Intelligence プラットフォームユーザガイド



目次

1	ドキュメント履歴.....	7
2	はじめに.....	10
2.1	このドキュメントについて.....	10
	用語.....	10
2.2	Business Intelligence プラットフォームについて.....	12
2.3	ライセンス.....	12
2.4	基本概念.....	13
2.5	主要タスク.....	14
3	セントラル管理コンソール (CMC) の使用.....	15
3.1	セントラル管理コンソールについて.....	15
3.2	CMC へのログオン.....	16
3.3	CMC での移動.....	16
3.4	CMC の基本設定の設定.....	17
	CMC 基本設定のオプション.....	17
	優先表示ロケール.....	18
4	リポジトリへのオブジェクトの追加.....	19
4.1	オブジェクトを管理する.....	19
4.2	オブジェクトの追加.....	19
	CMC でのオブジェクトプロパティ.....	20
	CMC におけるオブジェクトの追加.....	21
	CMS へのオブジェクトの保存.....	22
5	オブジェクトの整理.....	23
5.1	フォルダ.....	23
	フォルダの作成.....	23
	フォルダの削除.....	23
	フォルダのコピー/移動.....	24
	フォルダのアクセス権の指定.....	24
	フォルダレベルでのレポートインスタンスの制限.....	24
	個人用フォルダの表示.....	25
5.2	カテゴリ.....	26
	カテゴリの作成.....	26
	カテゴリの削除.....	26

	カテゴリの移動	27
	カテゴリへのオブジェクトの追加	27
	カテゴリからのオブジェクトの除去または削除	27
	カテゴリのアクセス権の指定	28
	ユーザの個人用カテゴリの表示	28
	カテゴリへの複数のオブジェクトの追加	28
6	コンテンツオブジェクトの使用	29
6.1	一般的なオブジェクトの管理	29
	オブジェクトのコピー	29
	オブジェクトの移動	29
	オブジェクトショートカットの作成	30
	オブジェクトの削除	30
	1 つまたは複数のオブジェクトの検索	31
	新しいハイパーリンクの作成	31
	オブジェクトまたはインスタンスの出力先への送信	31
	オブジェクトのプロパティの編集	34
	関係	34
6.2	レポートオブジェクトの管理	35
	レポートオブジェクトおよびインスタンス	35
	Crystal レポートでのレポートの最新表示オプション	36
	Crystal レポートのレポート表示オプション	37
	デフォルトの Job Server	38
	Crystal レポートでのデータベース設定の変更	39
	Crystal レポートのデフォルトパラメータ値を変更する	40
	Web Intelligence ドキュメントのプロンプトの更新	41
	レポートへのフィルタ適用	41
	Crystal レポートのプリンタとページレイアウトオプションの設定	42
	処理拡張機能	44
	ハイパーリンクを使用したレポートでの作業	45
	Crystal レポートの最初のページのサムネイル画像の表示	47
	Crystal レポートでのアラート表示	48
	Web Intelligence ドキュメントのユニバースの表示	48
6.3	統合環境でのレポートの操作	48
	BW から BI プラットフォームへのレポートの追加	48
	開発コンテンツを BW の本稼動システムに移行する	49
	レポートの表示	50
	BW クエリから生成されたレポートのパーソナライゼーション	51
6.4	プログラムオブジェクトの管理	54

	プログラムオブジェクトとインスタンスの概要	54
	プログラムの処理オプションの設定	55
	実行可能プログラムオブジェクトの設定	57
	Java プログラムの設定	59
	プログラムオブジェクトのユーザアカウントの指定	60
6.5	オブジェクトパッケージ管理	60
	オブジェクトパッケージ	60
	オブジェクトパッケージの作成	61
	オブジェクトパッケージへのコンポーネントオブジェクトの追加	61
	オブジェクトパッケージとオブジェクトの設定	62
	認証およびオブジェクトパッケージ	62
7	オブジェクトのスケジュール	64
7.1	カレンダー	64
	カレンダー形式	64
	カレンダーへのアクセス権	65
	カレンダーの作成	65
	カレンダーの削除	69
7.2	スケジュールプロセスおよびオプション	70
	スケジュールオプションの設定	70
	複数オブジェクトの即時実行	104
	オブジェクトパッケージによるオブジェクトのスケジュール	105
7.3	インスタンスの管理	105
	インスタンス情報の表示	106
	インスタスマネージャでのインスタンスの検索	108
	インスタンスの表示	108
	オブジェクトのインスタンスの管理	109
	インスタンスの一時停止および再開	109
	インスタンスの削除	110
	インスタンスに対する制限の設定	110
7.4	イベントとスケジュール	111
	ファイルベースのイベント	112
	スケジュールベースのイベント	114
	カスタムイベント	115
	イベントのアクセス権	116
8	アラート	117
8.1	コンセプトのアラート	117
	アラートソース	118
	アラートワークフロー	118

	アラートと Crystal レポートアラート通知の相違点	119
	CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索	119
	アラートに必要なアクセス権	120
	購読の不整合の解決	122
	アラートのベストプラクティス	122
8.2	アラートタスク	123
	イベントのアラートの有効化	123
	アラートの購読	123
	アラートの購読解除	124
	他のユーザのアラートの購読の解除	124
	他のユーザのアラートの購読	124
	アラート通知の別のユーザの BI 受信ボックスへの転送	125
	アラートからのユーザの除外	125
	アラートソースのアラート設定の管理	126
9	プロファイルの管理	128
9.1	プロファイルの仕組み	128
	プロファイルと公開のワークフロー	128
	プロファイルの作成	129
9.2	プロファイルターゲットおよびプロファイル値	129
	プロファイルへのグローバルプロファイルターゲットの指定	131
	プロファイル値の指定	131
9.3	プロファイル間の競合の解消	133
	プロファイル値の競合	134
9.4	プロファイルのアクセス権の指定	135
10	公開	136
10.1	公開について	136
	パブリケーションとは	136
	公開に必要なアクセス権	136
	公開の概念	140
	パブリケーション結果: 表示方法	156
11	パブリケーションの使用	158
11.1	パブリケーションの使用	158
	BI ラウンチパッドでのパブリケーションの作成	158
	CMC でのパブリケーションの作成	158
	Enterprise パブリケーションまたは動的受信者	159
	SAP 受信者用のパブリケーション	162
	Live Office 向けパブリケーション	162

パブリケーションのデザイン.....	162
パブリケーションの実行およびパブリッシュされたインスタンスの使用.....	192
パブリケーションパフォーマンス.....	197

1 ドキュメント履歴

表 1:

バージョン	日付	説明
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.1	2013 年 5 月	<ul style="list-style-type: none">● SAP Jam のサポートが追加されました。SAP Jam を統合すると、ソーシャルメディア機能およびコラボレーション機能が BI ラウンチパッドに追加されます。● 追加のコラボレーションアクセス権がユーザおよびグループに追加されました。コラボレーションのフィードパネルには、インスタンスおよび時刻のドロップダウンリストおよびフィードのフォローまたはフォロー解除のためのボタンが含まれています。SAP Jam または SAP StreamWork のテンプレートドキュメントをフォローすると、関連するすべてのインスタンスを自動的にフォローすることになります。インスタンスに関するコメントは特定のインスタンスに対してのみ投稿されます。● ドキュメントおよびインスタンスへの OpenDocument リンクは、タブ上で、またはリンクから開くことができます。OpenDocument リンクからドキュメントまたはインスタンスを表示しているときに、SAP StreamWork のフィードパネルを開いて、ドキュメントフィードをモニタリングしたり、それに返信したりすることができます。● [出力先] ダイアログボックスに [ファイル拡張子を追加する] チェックボックスが追加されました。
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.1 サポートパッケージ 1	2013 年 8 月	<p>このガイドは以下の情報を掲載するため更新されました。</p> <p>BI ラウンチパッドの 1 つのセッションを同時に実行できます。タブ (設定によりウィンドウ) を使用して、複数のオブジェクトとアプリケーションを表示できます。</p>

バージョン	日付	説明
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.1 サポートパッケージ 2	2013 年 11 月	スケジュールされたパブリケーションおよびパブリケーションインスタンスの購読に関する情報が追加されました。
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.1 サポートパッケージ 3	2014 年 3 月	<ul style="list-style-type: none"> • [フォルダリンク] オプションがパブリックフォルダとカテゴリのコンテキストメニューに追加されました。これにより受信者に送信可能なフォルダまたはカテゴリの URL リンクが生成されます。 • BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) から Crystal レポートへのオンラインアクセスの DHTML Web ビューアの使用に関する情報が追加されました。 • 動的受信者および Enterprise 受信者用のパブリケーションのデザインの手順が追加されました。 • BI ラウンチパッドでは、プラットフォームでユーザの属するユーザグループの数に関係なく、1 つのユーザグループに設定された基本設定のみが表示されるという注意喚起が追加されました。
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.1 サポートパッケージ 4	2014 年 5 月	<ul style="list-style-type: none"> • トピック "レポートをより大きな表示領域で開く" がこのガイドから削除されました。 • BEx クエリに基づく Web Intelligence ドキュメントには、SAP Business Warehouse (SAP BW) データソースの必須変数を含めることができます。BEx クエリに基づく Web Intelligence ドキュメントの情報を含めるため、トピック "パラメータ (プロンプト) でオブジェクトをスケジュール" が改訂されました。 • Web Intelligence ドキュメントのコンテキストに関する情報を含めるため、トピック "オブジェクトのスケジュール" が改訂されました。 • SAP Design Studio コンテンツオブジェクトは BI ラウンチパッドと同じウィンドウのタブで開かれます。

バージョン	日付	説明
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.1 サポートパッケージ 5	2014 年 10 月	<ul style="list-style-type: none"> • "インスタンスの出力ファイル形式" の節で、[Web Intelligence ファイル形式] テーブルの [形式] および [特記事項] の列を更新しました。 • "コンテンツプロジェクトの検索" の節に注を追加しました。 • "コンテンツオブジェクト別の検索内容" の節に、"Analysis Office" および "Lumira ドキュメント" を新しいオブジェクトタイプとして追加しました。 • "オブジェクトの参照" の節に、Lumira ドキュメントに関する新しい情報を追加しました。
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2	2015 年 11 月	<ul style="list-style-type: none"> • 「オブジェクトの参照」に、新しい「通知アラートの表示」の節が追加されました。

2 はじめに

2.1 このドキュメントについて

このドキュメントでは、BI プラットフォームでのオブジェクトの操作と管理に関する情報、および、さまざまなタスクをセントラル管理コンソール (CMC) で実行する方法について説明します。手順は、一般的なタスクを対象に説明します。高度なタスクについては、概念および技術に関する詳細情報を記載しています。

デプロイメントの計画、サーバの管理、権限の設定、認証の設定、ユーザおよびグループの管理など、システム管理タスクの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド*を参照してください。

このプラットフォームのインストールの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームインストールガイド*を参照してください。いずれのガイドも SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) にあります。

このドキュメントの対象ユーザー

この情報は、リポジトリ内でコンテンツを管理し、更新されたコンテンツを受信者に配布するコンテンツ管理者およびパワーユーザを対象としています。

2.1.1 用語

BI プラットフォームのドキュメントでは、次の用語が使用されます。

表 2:

用語	定義
アドオン製品	BI プラットフォームで動作する一方、独自のインストールプログラムがある製品で、SAP BusinessObjects Explorer などがあります。
監査データストア (ADS)	監査データを保存するために使用されるデータベースです。
BI プラットフォーム	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの略語です。
バンドルされたデータベース、バンドルされた Web アプリケーションサーバ	BI プラットフォームに同梱されているデータベースまたは Web アプリケーションサーバのことです。
クラスタ (名詞)	1 つの CMS データベースを使用し、同時に動作する 2 つ以上の Central Management Server (CMS) です。

用語	定義
クラスタ化する (動詞)	<p>クラスタを作成することです。</p> <p>たとえば、クラスタを作成するには以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. マシン A に CMS および CMS データベースをインストールします。 2. マシン B に CMS をインストールします。 3. マシン B の CMS がマシン A の CMS データベースを使用するように指定します。
クラスタキー	<p>CMS データベースでキーを解読するのに使用されます。</p> <p>CCM を使用してクラスタキーを変更できますが、パスワードのようにキーをリセットすることはできません。暗号化されたコンテンツが含まれており、紛失しないようにすることが重要です。</p>
CMS	Central Management Server の略語です。
CMS データベース	BI プラットフォームに関する情報を保存するために CMS で使用されるデータベースです。
デプロイメント	1 つ以上のマシンにおいてインストール、設定、実行されている BI プラットフォームソフトウェアのことです。
インストール	インストールプログラムによって 1 つのマシン上に作成される BI プラットフォームファイルのインスタンスです。
マシン	BI プラットフォームソフトウェアがインストールされるコンピュータです。
メジャーリリース	4.0 のような、ソフトウェアのフルリリースです。
移行	<p>BI コンテンツを以前のメジャーリリース (XI 3.1 など) から、アップグレード管理ツールを使用して移行するプロセスです。</p> <p>この用語は、同じメジャーリリースのデプロイメントには適用されません。昇格を参照してください。</p>
マイナーリリース	4.2 のような、ソフトウェアの一部のコンポーネントのリリースです。
ノード	同じマシンで実行され、同じ Server Intelligence Agent (SIA) で管理される BI プラットフォームサーバのグループです。
パッチ	特定のサポートパッケージバージョンの小規模な更新です。
昇格	BI コンテンツを同じメジャーリリース (4.0 から 4.0 など) のデプロイメント間で、プロモーションマネジメントアプリケーションを使用して移行するプロセスです。

用語	定義
サーバ	BI プラットフォームのプロセスの 1 つです。サーバは、1 つ以上のサービスをホストします。
Server Intelligence Agent(SIA)	サーバの停止、起動、起動など、サーバのグループを管理するプロセスです。
サポートパッケージ	マイナーリリースまたはメジャーリリースに対するソフトウェアの更新です。
Web アプリケーションサーバ	動的コンテンツを処理するサーバです。たとえば、4.2 用にバンドルされた Web アプリケーションサーバは Tomcat 8 です。
アップグレード	移行プロセスを完了するために必要な計画、準備、移行、後処理のことです。

2.2 Business Intelligence プラットフォームについて

Business Intelligence (BI) プラットフォームは、柔軟でスケーラブルな情報配布ソリューションです。イントラネットやエクストラネット、インターネット、企業ポータルなどのあらゆる Web アプリケーションを介して、ダッシュボードや対話型レポートなど複数の書式によるエンドユーザへの情報の配布を実現します。

レポートング、データ分析、および情報配信のための統合スイートであるプラットフォームは、エンドユーザの生産性を向上し、管理の労力を減少させるソリューションを提供します。プラットフォームは、週次販売レポートの配布、顧客用に特化したサービスの提供、または企業ポータルの重要情報の統合などのどの目的で使用しても、組織内だけでなくその範囲を越えて利益をもたらします。

2.3 ライセンス

BI プラットフォームの各種ユーザライセンスにより、特定のタスクおよびアプリケーションへのアクセスが許可または制限されます。所有しているライセンスによっては、一部のアプリケーションへのアクセスまたは BI リポジトリにおける一部のタスクの実行が不可能になる場合があります。

プラットフォームでは、以下のタイプのユーザライセンスをサポートしています。

- BI ビューア
- BI アナリスト
- 同時接続ユーザ
- 指定ユーザ

お持ちのライセンスについては、システム管理者に問い合わせてください。

ライセンスの詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

2.4 基本概念

BI ランチパッドの基本概念を一読してください。実行するタスクによっては、該当しない概念もあります。

表 3:

用語	定義
オブジェクト	オブジェクトは、BI プラットフォームまたはその他のソフトウェアで作成され、プラットフォームリポジトリに保存され管理されるドキュメントまたはファイルです。
カテゴリ	カテゴリは、フォルダの代替となる組織的な構成です。オブジェクトの分類に使用します。
スケジュール	スケジュールは、指定した時間に自動的にオブジェクトを実行するプロセスです。スケジュールによって、オブジェクト内の動的コンテンツまたはデータの最新表示、インスタンスの作成、ユーザへのインスタンスの配布、ローカルへの保存が実行されます。
イベント	イベントは、BI プラットフォームシステム内のオカレンスを表すオブジェクトです。イベントは、次の目的に使用できます。 <ul style="list-style-type: none">• スケジュールされたジョブの実行後にアクションをトリガする、スケジュール依存関係として動作する。• アラート通知をトリガする。• プラットフォームのパフォーマンスを監視する。
カレンダー	カレンダーは、スケジュールされたジョブの実行日をカスタマイズしたリストです。
インスタンス	インスタンスは、オブジェクトを実行した時刻以降のデータを含むオブジェクトのスナップショットです。
公開	公開は、パーソナライズした動的コンテンツを大量消費するために一般に公開するプロセスです。
プロファイル	プロファイルは、ユーザおよびグループをパーソナライズした値に関連付けるオブジェクトです。プロファイルは、パーソナライズしたコンテンツを作成し、受信者に配布するために、公開に使用します。
アラート	アラートは、BI プラットフォームでイベントが発生するとユーザおよび管理者に通知するプロセスです。

2.5 主要タスク

表 4:

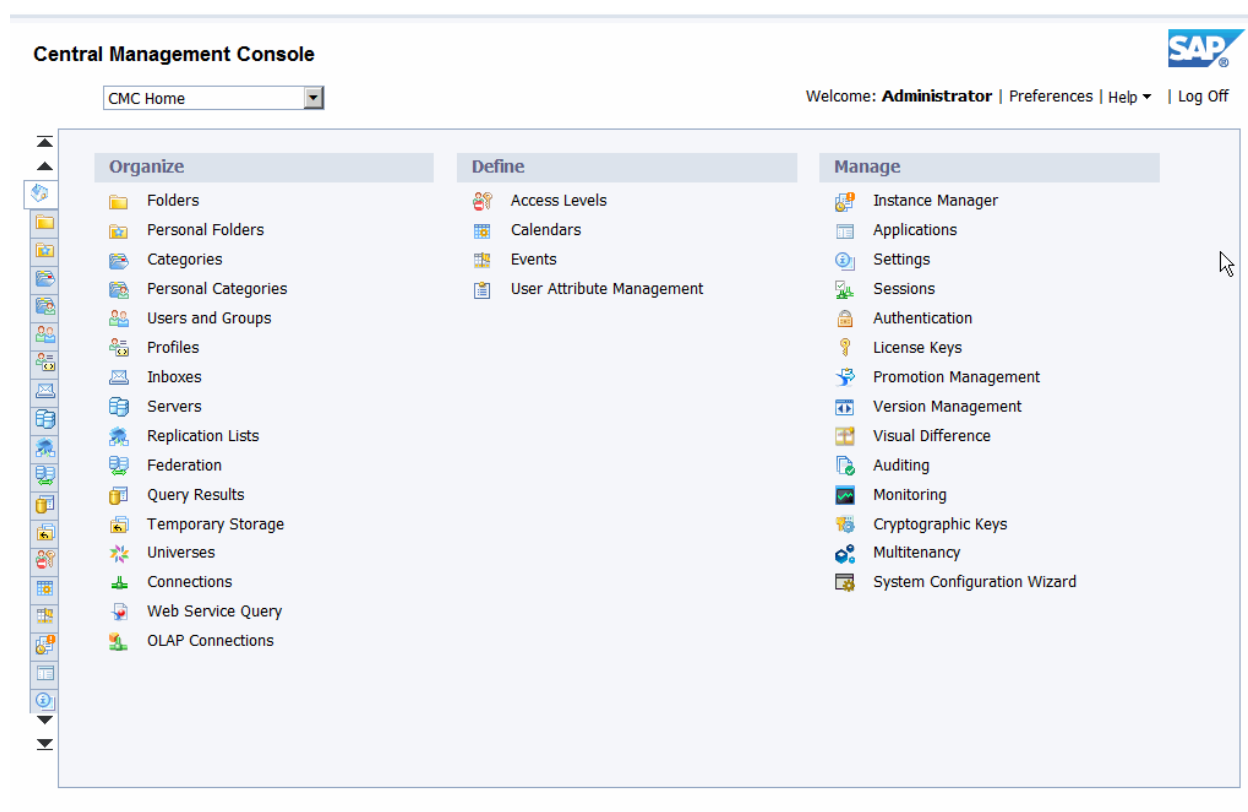
タスク	情報を検索する場所
リポジトリへのオブジェクトの追加	「“オブジェクトの追加”」を参照してください。
オブジェクトが Business Intelligence (BI) リポジトリに追加された後のオブジェクトの変更および管理	オブジェクトの使用方法的詳細については、「“一般的なオブジェクトの管理”」を参照してください。
オブジェクトの整理	オブジェクトの整理に関する情報については、“フォルダ”および“カテゴリ”に関する章を参照してください。
ユーザへのコンテンツ配布	コンテンツは、スケジュール、公開、およびアラートを使用してユーザに配信できます。スケジュールを使用することで、動的コンテンツドキュメントのデータを最新表示し、最新表示されたデータを一定間隔でユーザに配信できます。“スケジューリング”を参照してください。公開を使用することで、動的コンテンツドキュメントのコンテンツを特定のユーザおよびグループ向けにパーソナライズおよび最新表示できます。“公開について”を参照してください。アラートでは、BI プラットフォームでイベントが発生したときに購読者にアラート通知が送信されます。“アラート”を参照してください。

3 セントラル管理コンソール (CMC) の使用

3.1 セントラル管理コンソールについて

セントラル管理コンソール (CMC) は Web ベースのツールで、ユーザ管理、コンテンツ管理、サーバ管理など日常的な大部分の管理タスクを実行するのに使用できます。

Business Intelligence (BI) プラットフォームの有効な認証情報を持つすべてのユーザが、CMC にログオンして基本設定を実行できます。Administrators グループに属していないユーザは、タスクのアクセス権を持っていないと管理タスクを実行できません。



CMC にアクセスする方法は 2 つあります。ブラウザからアクセスするか、または Windows で **プログラム > SAP Business Intelligence > SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 > SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** を選択します。

3.2 CMC へのログイン

ユーザは、セントラル管理コンソール (CMC) の 1 つのセッションのみにログインできます (別のブラウザのタブまたはウィンドウで、複数の CMC セッションを実行することはできません)。

1. ブラウザで、CMC の URL を入力します。

デフォルト URL は、<http://<WebServer>:8080/BOE/CMC/> です。ただし、デプロイメントによっては、カスタム URL が設定されている場合があります。

<WebServer> には Web サーバマシンの名前を指定します。Web サーバ上のデフォルトの仮想ディレクトリを変更した場合は、その URL を入力します。必要に応じて、デフォルトのポート番号を、インストール時に指定した番号に変更します。

2. システムボックスに Central Management Server (CMS) の名前を入力します。
3. 組織の管理者が初めて CMC にアクセスする場合は、ユーザ名として **Administrator** と入力し、インストール中に作成したデフォルトのパスワードを入力します。
初回後は、ユーザ名とパスワードを入力します。

LDAP 認証を使用している場合は、Administrator グループにマップされたアカウントを使用してログインできます。

4. [認証の種類] の一覧で、[Enterprise] を選択します。

Windows AD、LDAP、およびその他の認証方法がリストに表示されます。ただし、これらを使用するには、サードパーティのユーザアカウントとグループが BI プラットフォームにマップされている必要があります。

5. [ログイン] をクリックします。

CMC が起動し、CMC ホームウィンドウが表示されます。

i 注記

ユーザがブラウザを閉じると、ユーザセッションがリリースされます。

今後は、Windows で **スタート > すべてのプログラム > SAP Business Intelligence > SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 > SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** の順に選択して、CMC を起動します。CMC が Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) にホストされている場合は、**スタート > すべてのプログラム > SAP Business Intelligence > SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 > SAP BusinessObjects BI プラットフォーム WACS セントラル管理コンソール** の順に選択します。

3.3 CMC での移動

次の 2 種類の方法でセントラル管理コンソール (CMC) を移動できます。

- ウィンドウの左側にあるアイコンをクリックするか、[整理]、[定義]、または [管理] のリンクをクリックします。
- ウィンドウの左上隅にある [CMC ホーム] リストのオプションを選択します。

選択した移動先に多くの子オブジェクトがある場合、ツリービューにすべての子オブジェクトが表示されない可能性があります。このような場合は、ページ区切りのオブジェクトリストを使用して、子オブジェクトを見つけることができます。

3.4 CMC の基本設定の設定

セントラル管理コンソール (CMC) の [基本設定](#) エリアでは、BI プラットフォームの管理ビューをカスタマイズできます。CMC の基本設定セットは、CMC および BI ラウンチパッド両方でのオブジェクトの動作に影響します。

CMC の基本設定は、デフォルトでは、プラットフォームおよびラウンチパッドに適用されます。ただし、ユーザはラウンチパッドで個人用の基本設定を実行できます。この個人用の基本設定は、BI プラットフォームが新しいソフトウェアバージョンまたはパッチを使用して更新されるまで、CMC の基本設定を上書きします。プラットフォームのあらゆる更新は、すべての基本設定を、CMC のデフォルト設定にリセットします。

ユーザが、BI プラットフォームで 2 つ以上のユーザグループに属している場合、ラウンチパッドには、1 つのグループ用に設定された基本設定のみが表示されます。

1. CMC にログオンして、CMC ウィンドウの右上隅の [基本設定](#) をクリックします。
2. [基本設定](#) ダイアログボックスで、必要に応じて基本設定オプションを設定し、[保存して閉じる](#) をクリックします。

3.4.1 CMC 基本設定のオプション

セントラル管理コンソール (CMC) の [基本設定](#) ダイアログボックスで [CMC 基本設定](#) をクリックすると、以下のオプションが表示されます。

表 5:

CMC 基本設定のオプション	説明
[製品ロケール] リスト	BI プラットフォームのデフォルト言語を選択します。詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームインストールガイドを参照してください。
[優先表示ロケール] リスト	CMC の日付、時刻、および数値のデフォルトの書式設定オプションを選択します。
[1 ページあたりの最大オブジェクト数] ボックス	CMC で 1 つのウィンドウまたはタブに表示するオブジェクトの最大数を入力します。この値は、表示されるオブジェクトの数を制限するもので、オブジェクトの合計数を制限するものではありません。
[タイムゾーン] リスト	プラットフォームをリモートで管理する場合に、タイムゾーンを選択します。プラットフォームは、スケジュールパターンおよびイベントをタイムゾーンと同期します。たとえば、 [東部標準時 (米国およびカナダ)] を選択して、サンフランシスコにあるサーバ上で毎日午前 5:00 にレポートを実行するようにスケジュールすると、サーバによって、レポートが太平洋標準時の午前 2:00 に実行されます。

CMC 基本設定のオプション	説明
[未保存データをプロンプト] リスト	<p>ユーザがデータを保存せずにダイアログボックスをキャンセルしたり、CMC を閉じようとした場合に、確認のプロンプトを表示するかどうかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [オン] を選択すると、プロンプトが有効になります。 • [オフ] を選択すると、プロンプトが無効になります。 • [デフォルト] を選択すると、プロンプトの動作は、C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\tomcat\webapps\BOE\WEB-INF\config\ の下の custom フォルダまたは default フォルダにある CmcApp.properties ファイルの設定によって決まります。

3.4.2 優先表示ロケール

優先表示ロケール (PVL) では、BI ラウンチパッドにおける日付、時間、および数値の書式を設定します。

また、多言語オブジェクトの場合は PVL でオブジェクトの名前および説明を表示する言語も設定します。オブジェクトに翻訳された名前および説明が複数ある場合、表示言語は以下のようにして決定されます。

1. ユーザの PVL に対応する名前および説明が表示されます。BI プラットフォームではデフォルトのフォールバックロケールが使用されることもありますが、これは通常、ユーザの PVL のバリエーションとなります。たとえば、PVL がフランス語 (カナダ) である場合に、オブジェクトにフランス語 (カナダ) に翻訳された名前および説明がないと、フランス語 (フランス) が使用されます。
2. PVL が設定されていない場合、製品のロケールと同じ言語で名前および説明が表示されます。
3. 上記のオプション 1 または 2 に該当しない場合は、オブジェクトのソース言語で名前および説明が表示されます。

4 リポジトリへのオブジェクトの追加

4.1 オブジェクトを管理する

BI プラットフォーム内のすべてのドキュメントとファイル (ハイパーリンク、ショートカット、Crystal レポート、および Web Intelligence ドキュメント) は、オブジェクトと呼ばれます。

プラットフォームではフォルダとカテゴリを使用してオブジェクトを整理します。オブジェクトは 1 つのフォルダに属する必要がありますが、カテゴリに割り当てなくても、複数のカテゴリに割り当ててもかまいません。カテゴリは、パブリック(会社用)カテゴリと個人用カテゴリのどちらでもかまいません。

4.2 オブジェクトの追加

Business Intelligence (BI) 環境にオブジェクトを追加し、権限を持つユーザに対してそれらのオブジェクトを使用可能にする必要があります。

オブジェクトを BI プラットフォームに追加するには、CMC で行う方法、または Central Management Server (CMS) にオブジェクトを保存する方法があります。プラットフォームには、次のようなさまざまな種類のオブジェクトを追加できます。

- SAP Crystal レポート
- Web Intelligence ドキュメント
- Flash オブジェクト
- プログラム
- Microsoft Excel、Word、PowerPoint ファイル
- Adobe PDF ファイル
- テキストファイル
- リッチテキスト形式ファイル

i 注記

ユーザライセンスによっては、オブジェクトを追加するアクセス権限がない場合もあります。お持ちのライセンスの種類については、システム管理者に問い合わせてください。ライセンスの詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

4.2.1 CMC でのオブジェクトプロパティ

CMC にオブジェクトが公開された後に、必要に応じて、タイトル、説明、データベースログオン情報、スケジュール情報、ユーザのアクセス権などそのオブジェクトに関するプロパティを変更できます。

表 6:

オブジェクトタイプ	プロパティ	注
一般オブジェクト	ファイル名	追加するオブジェクトの名前を入力し、 参照 をクリックしてオブジェクトを検索します。
	タイトル	オブジェクトの名前を入力します。
	説明	オブジェクトの説明を入力します。
	キーワード	オブジェクトのキーワードを入力します。
プログラムファイルのみ	既存のプログラムオブジェクトの参照	追加するプログラムの名前を入力し、 参照 をクリックしてオブジェクトを検索します。
	プログラムタイプ	追加するプログラムのタイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none">• 実行ファイル(バイナリ、バッチ、シェルスクリプト)• Java• スクリプト (VBScript、JavaScript)
その他の種類のオブジェクト	MIME	必要に応じて、オブジェクトに対して MIME 拡張子を指定します。

4.2.1.1 オブジェクトプロパティのオプション

表 7:

オブジェクトタイプ	プロパティ	説明
Crystal レポートおよびその他の種類のオブジェクト	ファイル名	追加するオブジェクトの名前を入力し、 参照 をクリックしてオブジェクトを検索します。
	タイトル	オブジェクトの名前を入力します。
	説明	オブジェクトの説明を入力します。
	キーワード	オブジェクトのキーワードを入力します。
Crystal レポートのみ	保存済みデータを保持	レポートの保存済みデータを保持する場合は、このオプションを選択します。

オブジェクトタイプ	プロパティ	説明
	レポートからの説明を使用する	レポートの概要情報を保持する場合は、このオプションを選択します。
プログラムファイルのみ	既存のプログラムオブジェクトの参照	追加するプログラムの名前を入力し、参照をクリックしてオブジェクトを検索します。
	プログラムタイプ	追加するプログラムのタイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> 実行ファイル(バイナリ、バッチ、シェルスクリプト) Java スクリプト(VBScript、JavaScript)
その他の種類のオブジェクト	MIME	必要に応じて、オブジェクトの MIME 拡張子を入力します。

4.2.2 CMC におけるオブジェクトの追加

CMC でオブジェクトを追加するには、管理者権限を持っている必要があります。

1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。
2. オブジェクトを追加するフォルダを見つけて選択します。
3. **管理** > **追加** を選択し、次のうちいずれかのオプションを選択します。

オプション	説明
プログラムファイル	プログラムオブジェクトを追加します。
ローカルドキュメント	その他の種類のオブジェクトを追加します。

ダイアログボックスが表示され、オブジェクトのプロパティを指定できます。

4. オブジェクトのプロパティを指定します。
表示されるプロパティのフィールドは、公開するオブジェクトの種類に応じて変わります。プロパティのフィールドは“CMC でのオブジェクトプロパティ”テーブルにまとめられます。
5. オブジェクトをカテゴリに割り当てるには、リストからカテゴリを選択します。
6. **OK** をクリックします。
ダイアログボックスが閉じると、CMC で最新表示が実行されて、フォルダのオブジェクトおよびその他のコンテンツが表示されます。

4.2.3 CMS へのオブジェクトの保存

SAP Crystal Reports for Enterprise、SAP BusinessObjects Web Intelligence などの BI プラットフォームデザイナーコンポーネントがインストールされている場合は、デザイナーから名前を付けて保存コマンドを使用してプラットフォームにオブジェクトを直接追加することができます。

たとえば、Crystal Reports でレポートを作成した後に、そのレポートを CMS に保存できます。▶ ファイル ▶ 名前を付けて保存 ▶ を選択して、[名前を付けて保存] ダイアログボックスで [Enterprise] をクリックします。プロンプトが表示されたら CMS にログインし、レポートを保存するフォルダを選択して、[保存] をクリックします。

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP ワークスペースをプラットフォームに追加することができます。ただし、定期的なスケジュールで実行されるようにワークスペースを設定することはできません。

5 オブジェクトの整理

5.1 フォルダ

フォルダとは、コンテンツを論理グループに分類できるように他のオブジェクトをグループ化し整理するために使用するオブジェクトです。BI プラットフォーム内の各オブジェクトは、フォルダ内に置く必要があります。

デフォルトでは、フォルダに追加した新しいオブジェクトは、そのフォルダのオブジェクトアクセス権を継承します。フォルダレベルでセキュリティを設定できるため、フォルダを使用して情報へのアクセスを制御できます。

組織内にすでに存在する構造（部署、地域、またはデータベーステーブルなど）でフォルダを設定してから、カテゴリを使用して組織の別のシステムを設定することをお勧めします。

5.1.1 フォルダの作成

新しい最上位（親）フォルダを作成する前に、[すべてのフォルダ] を表示していることを確認します。

フォルダの名前、説明、またはキーワードをすばやく編集するには、フォルダを選択し、**管理** > **プロパティ** の順に選択します。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. フォルダの作成場所に移動します。
サブフォルダを作成する場合、新しいフォルダを配置するターゲットフォルダを見つけます。
3. **管理** > **新規** > **フォルダ** を選択します。
4. **フォルダの作成**ダイアログボックスで、新しいフォルダの名前を入力し、**OK** をクリックします。

新しいフォルダがフォルダとオブジェクトの一覧に表示されます。

オブジェクトをフォルダに追加したり、フォルダのプロパティを編集したりできます。

5.1.2 フォルダの削除

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. 削除するフォルダを見つけて選択します。
複数のフォルダを同時に削除するには、**Ctrl** キーまたは **Shift** キーを押したまま、削除する各フォルダをクリックします。
3. **管理** > **削除** を選択します。
4. 表示される**削除**メッセージボックスで、**OK** をクリックして削除を確認します。

フォルダ、フォルダ内のすべてのサブフォルダ、レポートおよびその他のオブジェクトが BI プラットフォームから削除されます。

5.1.3 フォルダのコピー/移動

フォルダをコピーまたは移動すると、そのフォルダ内のオブジェクトもコピーまたは移動されます。BI プラットフォームでは、フォルダのオブジェクト権限は、フォルダをコピーするか移動するかによって異なる方法で扱われます。

フォルダをコピーした場合、コピーされたフォルダは、元のフォルダのオブジェクトアクセス権を保持しません。代わりに、コピーされたフォルダは、新しい親フォルダのオブジェクトアクセス権を引き継ぎます。たとえば、個人用の [営業] フォルダを [パブリック] フォルダにコピーすると、新しい [営業] フォルダは [パブリック] フォルダのオブジェクトアクセス権を持つことになり、[パブリック] フォルダへのオブジェクトアクセス権を持つすべてのユーザがアクセスできるようになります。

フォルダを移動した場合、そのフォルダに設定されているオブジェクトアクセス権は保持されます。たとえば、個人用の [営業] フォルダをすべてのユーザがアクセスできるフォルダに移動しても、[営業] フォルダは個人用の設定を保持するため、ほとんどのユーザはこのフォルダにアクセスできません。

5.1.3.1 フォルダのコピーまたは移動

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. コピーまたは移動するフォルダを選択します。
フォルダが最上位のフォルダでない場合は、その親フォルダを探して、親フォルダのコンテンツを選択します。複数のフォルダを同時にコピーまたは移動するには、**Ctrl** キーまたは **Shift** キーを押したまま、コピーまたは移動する各フォルダをクリックします。
3. **整理 > コピー先** または **整理 > 移動先** を選択します。
4. **コピー先** ダイアログボックスまたは **移動先** ダイアログボックスで、出力先フォルダを選択します。
5. **[コピー]** または、**[移動]** をクリックします。

選択したフォルダは、新しい場所へコピーまたは移動されます。

5.1.4 フォルダのアクセス権の指定

新しく作成したフォルダのオブジェクトアクセス権を変更することができます。

デフォルトでは、フォルダに追加した新しいオブジェクトは、その親フォルダのオブジェクトアクセス権を継承します。アクセス権の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドのアクセス権の設定に関する情報を参照してください。

5.1.5 フォルダレベルでのレポートインスタンスの制限

制限を設定することで、BI プラットフォームのレポートインスタンスを自動的に削除できます。

フォルダに対して設定した制限は、そのフォルダ内のすべてのオブジェクトに影響します。フォルダレベルでは、次の制限を設定できます。

- オブジェクト、ユーザ、またはユーザグループごとのインスタンス数
 - ユーザまたはグループのインスタンスが保持される日数
1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。
 2. 制限を設定するフォルダを見つけて選択し、**アクション** > **制限** を選択します。
 3. 制限ダイアログボックスで**オブジェクトのインスタンスが N 個より多い場合は、超過インスタンスを削除する**チェックボックスをオンにし、フォルダに格納できるオブジェクトあたりの最大インスタンス数 (この数を超過するとインスタンスが削除される) をボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 4. **更新**をクリックします。
 5. ユーザまたはグループあたりのインスタンス数を制限するには、[**超過インスタンスを削除するユーザ/グループ**] の隣にある [**追加**] をクリックします。
 6. ユーザまたはグループを選択し、[>] をクリックしてユーザまたはグループを [**選択されたユーザ/グループ**] リストに追加し、[**OK**] をクリックします。
 7. 手順 6 で追加したユーザまたはグループごとに、BI プラットフォームに表示する最大インスタンス数を [**ユーザごとのオブジェクトあたりの最大インスタンス数**] ボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 8. ユーザまたはグループあたりのインスタンスの有効期間を制限するには、[**N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ**] の隣にある [**追加**] をクリックします。
 9. ユーザまたはグループを選択し、> をクリックしてユーザまたはグループを **選択されたユーザ/グループ** リストに追加し、**OK** をクリックします。
 10. 手順 9 で追加したユーザまたはグループごとに、BI プラットフォームからインスタンスが削除されるまでの最大有効日数を [**インスタンスの最大保存期間**] ボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 11. **更新**をクリックします。

関連情報

[インスタンスに対する制限の設定 \[110 ページ\]](#)

5.1.6 個人用フォルダの表示

BI プラットフォームでは、各ユーザのフォルダがシステム上に作成されます。

フォルダを表示するには、そのフォルダに対する [表示] アクセス権以上が必要です。

フォルダが CMC に個人用フォルダとして編成され、デフォルトでは、Administrator アカウントと各 Guest アカウントに個人用フォルダが設定されています。CMC にログオンして個人用フォルダのリストを表示すると、自分が [表示] アクセス権以上を持っているフォルダのみが表示されます。

BI ラウンチパッドでは、個人用フォルダはお気に入りフォルダと呼ばれます。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. **[個人用フォルダ]** をクリックします。

フォルダの一覧が表示されます。各フォルダは、システム上のユーザアカウントに対応します。

5.2 カテゴリ

カテゴリを使用してオブジェクトを整理すると、ユーザがオブジェクトをすばやく見つけることができるようになります。カテゴリには、会社用と個人用の 2 つのタイプがあります。

オブジェクトのようにカテゴリにアクセス権を割り当てることができます（つまり、グループやユーザに対してカテゴリへのアクセス権を付与できます）。ただし、カテゴリ内のオブジェクトはそれを格納しているフォルダのアクセス権を継承し、カテゴリのアクセス権は継承しません。たとえば、コンテンツを部署フォルダに整理し、カテゴリを使用して別のファイリングシステムを作成し、コンテンツを組織内のさまざまなロール（マネージャや VP など）に従って分類できます。このように整理されたモデルを使用すると、部署またはジョブロールに基づいてドキュメントのグループにセキュリティを設定できます。

ドキュメントは複数のカテゴリに関連付けることができ、カテゴリ内にサブカテゴリを作成することも可能です。会社用カテゴリは、管理者、またはカテゴリへのアクセス権がある他のユーザによって作成および管理されます。会社用カテゴリは、表示権限のあるグループおよびユーザにのみ表示されます。個人用カテゴリは、個人用ドキュメントを整理するために個々のユーザによって作成および管理されます。すべてのオブジェクトをフォルダに格納しておく必要はありますが、カテゴリの割り当ては任意です。オブジェクトは複数のカテゴリに割り当てることができます。個人用カテゴリは、作成者にのみ表示されます。

5.2.1 カテゴリの作成

1. CMC で、**[カテゴリ]** エリアを選択します。
2. **管理 > 新規 > カテゴリ** を選択します。
3. **カテゴリの作成** ダイアログボックスで、**新しいカテゴリ名の入力** ボックスにカテゴリの名前を入力します。
4. **OK** をクリックします。

カテゴリが BI プラットフォームに追加されます。

5.2.2 カテゴリの削除

カテゴリを削除すると、カテゴリ内のすべてのサブカテゴリも削除されます。ただし、カテゴリ内のレポートおよびその他のオブジェクトは BI プラットフォームから削除されません。

1. CMC で、**[カテゴリ]** エリアを選択します。
2. 削除するカテゴリを選択します。

カテゴリが最上位のカテゴリでない場合は、その親カテゴリを見つけてからサブカテゴリを探します。複数のカテゴリを同時に削除するには、**Ctrl** キーまたは **Shift** キーを押したまま、削除する各カテゴリをクリックします。

3. **管理** > **削除** を選択します。
4. 表示される**削除**メッセージボックスで、**OK** をクリックして削除を確認します。

カテゴリが BI プラットフォームから削除されます。

5.2.3 カテゴリの移動

カテゴリを移動しても、カテゴリに関連付けられているオブジェクトとそのオブジェクトのアクセス権はそのまま維持されます。

たとえば、南米地域のユーザーのみがアクセスできる South American Sales カテゴリと、すべてのユーザーがアクセスできる世界中の売上レポートを含む World Sales カテゴリがあるとします。この地域のカテゴリを World Sales カテゴリに移動します。South American Sales カテゴリは、World Sales カテゴリのサブカテゴリになりますが、アクセス権と関連オブジェクトはそのまま維持されます。

1. CMC で、**[カテゴリ]** エリアを選択します。
2. 移動するカテゴリを選択します。

カテゴリが最上位のカテゴリでない場合は、その親カテゴリを見つけてからサブカテゴリを探します。複数のカテゴリを同時に移動するには、**[Ctrl]** キーまたは **[Shift]** キーを押したまま、移動する各カテゴリをクリックします。

3. **整理** > **移動先** を選択します。
BI プラットフォームに多数のカテゴリがある場合、**タイトルの検索**ボックスにカテゴリ名を入力するか、**前へ**、**次へ**、または **+** (プラス記号) をクリックしてカテゴリリストを参照します。
4. **移動先**ダイアログボックスで、移動先のカテゴリを選択して、**移動** をクリックします。

カテゴリが新しい場所に移動されます。

5.2.4 カテゴリへのオブジェクトの追加

1. CMC で、**[フォルダ]** 領域を選択します。
2. カテゴリに追加するオブジェクトを見つけて選択します。
3. **管理** > **カテゴリ** を選択します。
4. **カテゴリ**ダイアログボックスで、オブジェクトを追加するカテゴリを選択します。
5. **保存して閉じる** をクリックします。

オブジェクトがカテゴリに追加されます。

5.2.5 カテゴリからのオブジェクトの除去または削除

オブジェクトを除去する場合は、カテゴリから除去されますが、BI プラットフォーム内には残ります。オブジェクトを削除する場合は、カテゴリから除去され、同時にプラットフォームからも削除されます。

1. CMC で、**[カテゴリ]** エリアまたは **[個人用カテゴリ]** エリアを選択します。

2. オブジェクトを除去または削除するカテゴリをダブルクリックします。
 3. 除去または削除するオブジェクト (複数可) を選択します。
 4. 次の操作のいずれかを実行します。
 - カテゴリからオブジェクトを除去するが、プラットフォームからは削除しない場合は、**アクション** > **カテゴリから削除** の順に選択します。
 - カテゴリからオブジェクトを除去し、プラットフォームからも削除する場合は、**管理** > **削除** を選択します。
 5. **カテゴリから削除**または**削除**ダイアログボックスで、**OK** をクリックして、除去または削除を確認します。
- オブジェクトが除去または削除されます。

5.2.6 カテゴリのアクセス権の指定

オブジェクトのようにカテゴリにアクセス権を割り当てることができます (つまり、グループやユーザに対してカテゴリへのアクセス権を付与できます)。ただし、カテゴリ内のオブジェクトはそれを格納しているフォルダのアクセス権を継承し、カテゴリのアクセス権は継承しません。

アクセス権の設定の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) にある、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム 管理者ガイドを参照してください。


5.2.7 ユーザの個人用カテゴリの表示

適切なアクセス権がある場合は、ユーザの個人用カテゴリを表示、編集、および削除することができます。

1. CMC で、**[カテゴリ]** エリアを選択します。
2. 個人用カテゴリを表示するユーザアカウントを選択します。

ユーザの個人用カテゴリのリストが表示されます。

5.2.8 カテゴリへの複数のオブジェクトの追加

1. CMC の**カテゴリ**または**個人用カテゴリ**管理エリアを表示します。
2. オブジェクトを追加するカテゴリを見つけて選択します。
3. **アクション** > **カテゴリに追加** を選択します。
4. **カテゴリに追加**ダイアログボックスの**使用できるオブジェクト**で、追加するオブジェクトを見つけ、 をクリックしてオブジェクトを**選択されたオブジェクト**リストに移動します。
5. **OK** をクリックします。

6 コンテンツオブジェクトの使用

6.1 一般的なオブジェクトの管理

BI プラットフォームには、さまざまな種類のオブジェクトを追加できます。

プラットフォームには、次のような種類のオブジェクトを追加できます。

- SAP Crystal Reports
- Web Intelligence ドキュメント
- プログラム
- Microsoft Excel、Word、PowerPoint ファイル
- Adobe PDF ファイル
- RTF ファイル
- テキストファイル
- ハイパーリンク
- オブジェクトパッケージ
- アクション

追加したオブジェクトは、CMC の [\[フォルダ\]](#) 領域で管理します。

6.1.1 オブジェクトのコピー

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. コピーするオブジェクトを見つけて選択します。
3. [整理](#) [コピー先](#) を選択します。
4. [コピー](#) ダイアログボックスの [出力先の選択](#) 領域で、オブジェクトのコピー先のフォルダを探し、[>](#) をクリックして [出力先](#) リストに移動します。
コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。複数のフォルダを同時に選択するには、[Shift](#) または [Ctrl](#) キーを押しながら各フォルダをクリックします。
5. 完了したら、[コピー](#) をクリックします。

選択したオブジェクトはコピー先にコピーされます。

6.1.2 オブジェクトの移動

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。

2. 移動するオブジェクトを見つけて選択します。

3. **整理** > **移動先** を選択します。

4. **移動** ダイアログボックスで、移動先フォルダを選択します。

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。複数のフォルダを同時に選択するには、**Shift** または **Ctrl** キーを押しながら各フォルダをクリックします。

5. **移動** をクリックします。

元のフォルダから移動先のフォルダへオブジェクトが移動します。

6.1.3 オブジェクトショートカットの作成

ショートカットは、あるユーザに、オブジェクトに対するアクセス権を付与し、そのオブジェクトが含まれるフォルダ全体に対するアクセス権は付与しない場合に役立ちます。

ショートカットを作成すると、ショートカットが存在するフォルダにアクセスできるユーザは、そのオブジェクトとレポートインスタンスにアクセスできるようになります。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。

2. ショートカットを作成するフォルダを見つけて選択します。

3. **整理** > **ショートカットの作成** の順に選択します。

4. **ショートカットの作成** ダイアログボックスの**出力先の選択**領域で、ショートカットを作成するフォルダを探し、> をクリックしてそのフォルダを**出力先**リストに移動します。

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

5. [**ショートカットの作成**] をクリックします。

オブジェクトへのショートカットが、指定したフォルダに表示されます。

6.1.4 オブジェクトの削除

1つ以上のオブジェクト、フォルダ（フォルダ内の全オブジェクトおよびインスタンスを含む）、または（オブジェクト自体ではなく）オブジェクトインスタンスを削除できます。

オブジェクトを削除すると、既存のインスタンスとスケジュールされたインスタンスがすべて削除されます。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアに移動します。

2. 削除するオブジェクトを見つけて選択します。

3. **管理** > **削除** を選択します。

4. 確認を求めるメッセージが表示されたら、**OK** をクリックします。

関連情報

[インスタンスの管理 \[105 ページ\]](#)

6.1.5 1つまたは複数のオブジェクトの検索

オブジェクトのタイトルや説明内の特定のテキストを見つけるには、検索を使用します。

検索では、検索の種類に基づいてテキストが検索されます。次の検索の種類から選択します。

- **すべてのフィールドの検索**: オブジェクトに関連付けられているファイル名、キーワード、説明文内を検索します。
- (デフォルト) **タイトルの検索**: ファイル名内を検索します。
- **キーワードの検索**: オブジェクトに関連付けられているキーワード内を検索します。
- **説明の検索**: オブジェクトに関連付けられている説明内を検索します。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。

検索ボックスは、**フォルダ**管理エリアの右上隅にあります。検索の種類は、デフォルトで**タイトルの検索**に設定されています。

2. ファイル名以外のものでも検索するには、**タイトルの検索**をクリックして、別の検索の種類を選択します。
3. **検索**ボックスに検索するテキストを入力して、**検索**をクリックします。

検索が完了すると、検索基準に一致した結果の一覧が表示されます。

6.1.6 新しいハイパーリンクの作成

1. CMC の**フォルダ**または**個人用フォルダ**管理エリアを表示します。
2. ハイパーリンクを作成するフォルダに移動します。
3. **管理** > **新規** > **ハイパーリンク** を選択します。
4. **ハイパーリンク**ダイアログボックスに、ハイパーリンクのタイトル、説明、およびキーワードを入力します。
5. ナビゲーションペインで **[URL]** をクリックします。
6. **URL** ボックスに URL を入力して **OK** をクリックします。

6.1.7 オブジェクトまたはインスタンスの出力先への送信

オブジェクトまたはインスタンスのコピーかショートカットのどちらかを出力先に送信できます。ステータスが成功または失敗のインスタンスのみを送信できます。ステータスが定期または待機のインスタンスはスケジュールされていますが、まだデータが格納されていません。

すべてのタイプのオブジェクトがすべての出力先に送信できるわけではありません。

整理 > **送信** を使用すると、既存のオブジェクトまたはオブジェクトのインスタンスを別の出力先に送信できます。**[送信]** コマンドでは、既存のオブジェクトまたはインスタンスのみ処理できます。この機能では、システムでのオブジェクトの実行や新しいインスタンスの作成、レポートインスタンスのデータの最新表示は実行できません。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. 送信するオブジェクトを見つけて選択します。
 - オブジェクトを送信するには、オブジェクトを選択し、**整理** > **送信** をクリックして出力先を選択します。

- インスタンスを送信するには、オブジェクトを選択して、**アクション** > **履歴** を選択して、**履歴**ダイアログボックスでインスタンスを選択し、**送信**をクリックして、出力先を選択します。

Interactive Analysis ドキュメントは、BI 受信ボックスか、情報プラットフォームサービス 内で設定された電子メールの出力先のみに送信することができます。複数のオブジェクトを同時に選択するには、**Shift** または **Ctrl** キーを押しながら各オブジェクトをクリックします。

3. Adaptive Job Server のデフォルト設定を使用するか、独自の設定を使用して出力先オプションを設定します。

次の出力先オプションを設定できます。

- オブジェクトを受信する必要のあるユーザとユーザグループ (BI 受信ボックスまたは電子メールの出力先に送信する場合)
- オブジェクトのコピーまたはそのオブジェクトにリンクするショートカットを送信するかどうか
- 送信するオブジェクトの名前
- オブジェクトを送信した後にインスタンスをクリーンアップするかどうか
- 出力先の種類に固有の設定 (ファイルの場所のディレクトリまたは FTP サーバのホスト名と接続ポートなど)

4. **送信**をクリックします。

6.1.7.1 出力先

オブジェクトおよびパブリケーションは、以下の出力先にスケジュール、送信、および公開することができます。

表 8:

出力先の場所	説明
BI 受信ボックス	オブジェクトをユーザの BI ラウンチパッドの BI 受信ボックスに送信する場合に選択します。Web Intelligence ドキュメントは、 BI 受信ボックス または 電子メール (BI プラットフォームで設定されている出力先) に送信する必要があります。
電子メール	オブジェクトをユーザの電子メールアドレスに送信する場合に選択します。Web Intelligence ドキュメントは、 BI 受信ボックス または 電子メール (プラットフォームで設定されている出力先) に送信する必要があります。
FTP の場所へ	オブジェクトを FTP サーバに送信する場合に選択します。
ファイルの場所	オブジェクトをローカルディスクに送信する場合に選択します。
SAP StreamWork (利用可能な場合)	オブジェクトを SAP StreamWork のコラボレーションのアクティビティに送信する場合に選択します。SAP StreamWork の各種機能は、BI プラットフォームでコラボレーションが設定されて有効化されている場合に使用できます。

6.1.7.2 オブジェクトタイプ別の出力先

多くの出力先はほとんどのオブジェクトタイプで使用可能ですが、例外があります。受信者がオブジェクトを開くには、BIプラットフォームへのアクセス権を持っていることが必要な場合があります。

表 9:

オブジェクトタイプ	アンマネージドディスク	FTP	電子メール(SMTP)		BI 受信ボックス		SAP StreamWork
			ファイル	リンク	ファイル	リンク	
Crystal レポート	○	○	○	○	○	○	○
オブジェクト パッケージ	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	○	○	○
プログラム	○	○	○	○	○	○	○
Web Intelligence ドキュメント	○	○	○	○	○	○	○
SAP BusinessObjects Analysis edition for OLAP ワークスペース	該当なし	該当なし	該当なし	○	○	○	該当なし
Excel ファイル	○	○	○	○	○	○	○
Word ファイル	○	○	○	○	○	○	○
PDF ファイル	○	○	○	○	○	○	○
テキストファイル	○	○	○	○	○	○	○
RTF ファイル	○	○	○	○	○	○	○
PowerPoint ファイル	○	○	○	○	○	○	○
Hyperlink	該当なし	該当なし	該当なし	○	○	○	該当なし

関連情報

[Job Server の出力先の有効化または無効化 \[93 ページ\]](#)

6.1.8 オブジェクトのプロパティの編集

オブジェクトのオブジェクト名プロパティ、キーワードプロパティ、および説明プロパティを変更できます。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. プロパティを変更するオブジェクトを見つけて選択します。
3. **管理** > **プロパティ** の順に選択します。
4. **プロパティ** ダイアログボックスで、必要に応じてプロパティを編集します。
5. **保存して閉じる** をクリックします。

6.1.9 関係

BI プラットフォームでは、オブジェクトはさまざまな方法で互いに関係しています。たとえば、フォルダはその子サブフォルダと関係し、接続はそれを使用するユニバースと関係し、レポートやドキュメントはユニバースと関係します。

プラットフォーム内のオブジェクトの関係を変更することは、それによってオブジェクトへのリンクが壊れる可能性があるため、難しい場合があります。どのオブジェクト同士が直接関係しているかを知るには、CMC の次の領域で関係クエリを実行します。

- [フォルダ](#)
- [個人用フォルダ](#)
- [カテゴリ](#)
- [個人用カテゴリ](#)
- [ユーザとグループ](#)
- [プロファイル](#)
- [ユニバース](#)
- [アクセスレベル](#)
- [サーバ](#)
- [レプリケーション一覧](#)

関係クエリの実行後、[\[クエリの結果\]](#) ダイアログボックスが開き、クエリの結果が表示されます。[\[クエリの結果\]](#) ダイアログボックスから、その結果オブジェクトに対して基本的なオブジェクト管理タスクを実行できます。



例

関係クエリ

この例では、ある会社のデータベースを別の場所にある新しいデータベースと交換するとします。管理者は、オブジェクトのコンテンツに影響を与えずに、オブジェクトの編集やデータベース接続の削除を行うために、どのオブジェクトが現在の接続に依存しているかを知る必要があります。管理者はある接続について関係クエリを実行し、その接続を使用するユニバースのリストを入手します。これで、すべてのユニバースを更新できます。その後、会社は、接続に依存するすべてのオブジェクトを削除することを決定したとします。この場合、管理者は、最初のクエリ結果によって返された各ユニバースに対して関係クエリを実行して、それらのユニバースを使用しているオブジェクトを特定することができます。

6.1.9.1 オブジェクトの関係のチェック

1. 関係クエリを実行するオブジェクトを見つけて選択します。
2. **管理** > **ツール** > **関係のチェック** を選択します。
クエリの結果領域に、クエリの結果が表示されます。
3. 元のクエリに戻るには、ツリーパネルでそのオブジェクトの名前を選択します。

必要な場合は、さらに結果オブジェクトの関係をチェックするために、オブジェクトを選択して **管理** > **ツール** > **関係のチェック** を選択します。

6.2 レポート オブジェクトの管理

レポートオブジェクトの管理には、処理拡張機能の適用、アラート通知の指定、データベース情報の変更、パラメータの更新、フィルタの使用、ハイパーリンクを使ったレポートの処理などが含まれます。

この節では、レポートオブジェクトおよびレポートインスタンスについて、それらをセントラル管理コンソール (CMC) で管理する方法について説明します。例外の注記がある場合を除き、この節の説明のほとんどは Web Intelligence ドキュメントオブジェクトにも当てはまります。

6.2.1 レポートオブジェクトおよびインスタンス

レポートオブジェクトは SAP Crystal Reports で作成され、Web Intelligence ドキュメントオブジェクトは BI プラットフォームで作成されます。

どちらのタイプのオブジェクトにも、レポート情報 (データベースフィールドなど) が含まれるほか、保存データが含まれる場合もあります。レポートオブジェクトおよび Web Intelligence ドキュメントオブジェクトは、全ユーザまたは特定のユーザグループに属するユーザが使用できるように設定できます。

表 10:

インスタンスタイプ	説明
スケジュールされたインスタンス	<p>オブジェクトは、CMC、BI ラウンチパッド、またはカスタム Web アプリケーションでスケジュールすることができます。オブジェクトをスケジュールすると、プラットフォームによって、オブジェクトのスケジュールされたインスタンスが作成されます。このインスタンスにはオブジェクトとスケジュールの情報が含まれますが、データは含まれません。スケジュールされたインスタンスは、オブジェクトの [履歴] ウィンドウに表示されます。このインスタンスのステータスは、[定期] または [待機] になります。</p> <p>レポートオブジェクトは通常、特徴の異なるインスタンスを複数作成できるように設計されています。たとえば、パラメータを持つレポートオブジェクトを実行する場合、1つの部署のレポートデータを含むインスタンスをスケジュールし、さらに別の部署のデータを含む別のインスタンスをスケジュールすることができます（インスタンスがどちらも同一のレポートオブジェクトから生成された場合でも実行可能です）。</p>
オブジェクトインスタンス	<p>指定した時刻になると、プラットフォームによってオブジェクトが実行されて、データを含むオブジェクトインスタンスが作成されます。インスタンスはオブジェクトの [履歴] ウィンドウに表示され、ステータスは [成功] または [失敗] です。</p>

オブジェクトのデフォルト設定を編集すると、変更はそのオブジェクトのデフォルト値に影響しますが、スケジュールされたインスタンスまたはオブジェクトインスタンスには影響しません。次に CMC またはラウンチパッドなどのアプリケーションでこのオブジェクトをスケジュールするときには、新しいデフォルト値が表示されます。そのときに、必要に応じてスケジュールされたインスタンスのデフォルト値を変更することができます。

プラットフォームでは、SAP Crystal Reports のバージョン 6 から 2011 で作成したレポートを使用できます。一度プラットフォームに追加したレポートの保存、処理、表示は、バージョン 2011 形式で行われます。ただし、プラットフォームで作成したレポートは SAP Crystal Reports for Enterprise 形式のままです。

関連情報

[スケジュールプロセスおよびオプション \[70 ページ\]](#)

6.2.2 Crystal レポートでのレポートの最新表示オプション

最新表示オプションでは、BI プラットフォームで Crystal レポートを最新表示するときに更新するレポートオブジェクトの設定項目を決定します。

レポートオブジェクトを最新表示すると、プラットフォームでは、CMC のレポートオブジェクトと Input File Repository Server の元の .rpt ファイルが比較されます。

- 元のレポートの .rpt ファイルとレポートオブジェクト間でレポート要素が異なる場合、プラットフォームは、.rpt ファイルと同じになるようにレポートオブジェクトの要素を削除または追加して、CMC で行った変更を上書きします。
- 元のレポートの .rpt ファイルとレポートオブジェクト間でレポート要素が同じである場合は、最新表示オプションを使用して、元の .rpt ファイル値で更新するレポートオブジェクト要素を決定することができます。

プロンプトが元の .rpt ファイルとレポートオブジェクトの両方にあり、[現在およびデフォルトのパラメータ値](#)チェックボックスが選択されている場合、プラットフォームはレポートオブジェクトのプロンプトのデフォルト値を更新して、CMC で行った変更を上書きします。たとえば、元のレポートの .rpt ファイルにプロンプトがある場合、レポートを最新表示すると、選択しているレポートの最新表示オプションに関係なく、そのプロンプトがレポートオブジェクトに追加されます。

レポートを最新表示したときに、レポート要素に加えた変更を保持するには、該当するチェックボックスをオフに設定します。レポートを最新表示したときに、レポートオブジェクト内のプロンプトの現在の値またはデフォルト値のいずれかを保存するには、[\[現在およびデフォルトのパラメータ値\]](#) チェックボックスをオフにします。レポートオブジェクトのリポジトリオブジェクトを Input File Repository Server の元の .rpt ファイルに対して最新表示しないようにするには、[\[レポートの最新表示時にオブジェクトリポジトリを使用\]](#) チェックボックスをオフにします。

6.2.2.1 レポートの最新表示オプションの選択

Crystal レポートでのみ最新表示オプションを選択することができます。

➡ ヒント

[\[レポートを最新表示\]](#) をクリックして、レポートをすぐに最新表示できます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. レポートを選択してから、[▶ アクション ▶ 最新表示オプション](#) を選択します。
3. [\[最新表示オプション\]](#) ダイアログボックスで、ソース .rpt ファイルから最新表示するレポート要素を選択します。
4. [更新](#) をクリックします。

6.2.3 Crystal レポートのレポート表示オプション

レポート表示オプションを使用して、最適なデータ取得回数で最新情報を求めるニーズと、システム全体のパフォーマンスを適正化するニーズとの間のバランスをとることができます。

データ共有を使用すると、同じレポートオブジェクトにアクセスする複数のユーザが、レポートを表示したり、最新表示したりするときに同じデータを使用することができます。データ共有により、データベースの呼び出しの数を減らすことができます。これにより、同じレポートにアクセスするユーザに対してレポートインスタンスを作成するのに必要な時間を削減し、システムパフォーマンス全体を向上させます。

データ共有オプションはレポート単位またはサーバ単位で設定できます。

- レポート表示に使用するサーバを指定する場合は、サーバ単位のオプションを設定して、レポートのグループに対してデータ共有を標準化し、これらの設定を集中管理します。
- 一部のレポートでデータが共有されないようにする場合は、レポート単位のオプションを設定して、レポートの最新表示時にデータベースアクセスを許可するかどうかをレポートごとに決定することができます。たとえば、レポートごとにデータ共有間隔を設定できます。

データの共有は、すべての組織またはレポートにとって、必ずしも有益であるとは限りません。データ共有の効果を最大限に活用するには、一定期間データを再利用させることが必要です。つまり、ユーザによっては、オンデマンドでレポートを表示したり、レポートインスタンスを最新表示するときに、古いデータが表示されることになります。

BI プラットフォームのデフォルトのレポート表示オプションでも、データの最新性と信頼性は確保できます。デフォルトでは、レポートをプラットフォームに追加すると、レポートは、レポート共有用にサーバ単位オプションを使用するように設定されます。これにより、ユーザは、レポートを最新表示すると最新の情報が表示され、表示される最も古いデータの経過時間が 0 分であることが保証されます。レポート単位オプションを設定する場合、デフォルトの設定で、データの共有やビューアを最新表示してデータベースから最新データを取得することができ、表示されるデータは 5 分以内のものになります。

レポートデータの共有を無効にすることと、[クライアントに提供する最も古いオンデマンドデータ] オプションを 0 分に設定することは同じではありません。負荷ボリュームが高い場合、プラットフォームは同じレポートインスタンスに対して同時に複数の要求を受けることがあります。このような場合、データ共有の間隔を 0 分に設定して、[クライアント間でレポートデータを共有するオプション](#)を選択すると、BI プラットフォームはユーザのリクエスト間でデータを共有します。複数のユーザにデータを共有させないことが重要な場合は（たとえば、レポートがユーザごとにパーソナライズされたユーザ関数ライブラリ (UFL) を使用している場合）、そのレポートのデータ共有を無効にする必要があります。

6.2.3.1 Crystal レポートのレポート表示オプションの選択

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. 表示オプションを設定するレポートを見つけて選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [サーバグループの表示](#) をクリックします。
5. [表示データの最新表示] で [レポート独自の表示設定を使用する](#) を選択して、レポートのオプションを選択します。
6. [保存して閉じる](#) をクリックします。

6.2.4 デフォルトの Job Server

BI プラットフォームでレポートオブジェクトの実行や、インスタンスのスケジュールおよび処理に使用するデフォルトの Job Server を指定します。

レポートオブジェクトと Web Intelligence ドキュメントでは、ユーザがレポートや Web Intelligence ドキュメントを表示または変更する際にプラットフォームが使用するデフォルトのサーバを指定できます。レポートオブジェクトを特定の Job Server またはサーバグループで処理すると、システムの負荷を分散させることができます。次のいずれかのオプションを使用して、デフォルトの Job Server を指定します。

- 利用可能リソースが最も多いサーバを使用する場合は、[最初に見つかった利用可能なサーバを使用する](#)を選択します。Central Management Server (CMS) は、各 Job Server の最大負荷の割合をチェックし、最も負荷の低いサーバを表示します。すべての Job Server が同じ負荷の割合を示した場合、CMS はランダムに Job Server を選択します。
- [選択したグループに所属するサーバを優先して使用する](#)を選択して、リストからサーバグループを選択します。プラットフォームは、選択したサーバグループのサーバでオブジェクトの処理を試みます。選択したグループに使用できるサーバがない場合、オブジェクトは次に利用可能なサーバで処理されます。選択したグループに使用できるサーバがない場合、プラットフォームは利用可能な任意のサーバを使用します。

- 選択したサーバグループのサーバのみを使用する場合は、[選択したグループに所属するサーバだけを使用する](#)を選択します。グループのサーバが使用できない場合、オブジェクトは処理されません。

オブジェクトのタイプに応じて、プラットフォームは次の Job Server を使用して、オブジェクトを処理します。

- Crystal レポートは、Adaptive Job Server、Crystal Reports 2011 Server または Crystal Reports Processing Server (レポートの作成に使用されたデザイナーによる)、および Crystal Reports Cache Server で実行されます。
- Web Intelligence ドキュメントは、Web Intelligence Processing Server で実行されます。ユーザがグループを選択できるようにするため、サーバグループを作成する必要があります。

サーバが受け付けるジョブの最大数を設定できます。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

6.2.4.1 オブジェクトの処理用デフォルトサーバの選択

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアにジャンプします。
2. デフォルトサーバを指定するレポートオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
 - レポートオブジェクトをスケジュールするためにデフォルトサーバを指定するには、ナビゲーション一覧で [サーバグループのスケジュール](#) を選択します。
 - オブジェクト表示時にオブジェクトを処理するデフォルトサーバを指定するには、オブジェクトが Crystal レポートの場合は [サーバグループの表示](#) を選択し、オブジェクトが Web Intelligence ドキュメントの場合は [Web Intelligence 処理設定](#) を選択します。
5. [保存して閉じる](#) をクリックします。

6.2.5 Crystal レポートでのデータベース設定の変更

データベースの種類の選択、デフォルトデータベースログオン情報の設定、データソースまたは Crystal レポートオブジェクトとそのインスタンスのデータソースの表示、およびレポートインスタンス表示時の必要に応じたユーザへのログオン名とパスワードの入力要求を行うことができます。

データベース設定を変更するレポートオブジェクトを複数選択した場合、同じデータソースに接続しているレポートオブジェクトのみが更新されます。サポートされるデータベースとドライバの詳細については、SAP Service Marketplace でサポートされているプラットフォームドキュメントを参照してください。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. データベース設定を変更するレポートオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [データベース設定](#) をクリックします。
5. 次の操作のいずれかを実行します。
 - [レポートのオリジナルのデータベースログオン情報を使用する](#) を選択して、オリジナルのレポートデータベースのユーザ名とパスワードを入力します。

- [ここで指定するカスタムのデータベースログオン情報を使用する](#)を選択して、事前定義されたデータベースドライバまたはカスタムデータベースドライバのサーバ名 (ODBC データソースの DSN)、データベース名、ユーザ名、およびパスワードを入力します。データベースのデフォルトのテーブルプレフィックスを変更した場合は、カスタムテーブルプレフィックスを指定します。

6. 次の操作のいずれかを実行します。

- レポートの最新表示時にユーザにパスワードを求めるには、[ユーザにデータベースログオン入力を要求する](#)を選択します。
ユーザが初めてレポートを最新表示するときに、BI プラットフォームによってメッセージが表示されます。ユーザが再度レポートを最新表示するときは、メッセージは表示されません。このオプションはスケジュールされたインスタンスには影響しません。
- データベースへのログオンにユーザのログオン情報とパスワードを使用するには、[コンテキストをデータベースログオンに使用する](#)を選択します。
エンドツーエンドシングルサインオンまたはデータベースに対するシングルサインオン用に BI プラットフォームを設定する必要があります。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイド*を参照してください。
- レポートを Job Server で実行したときに使用したのと同じデータベースログオン情報を使用するには、[レポート実行時と同じデータベースログオン情報を使用する](#)を選択します。
- ユーザアカウントに指定されているデータベース認証情報を使用するには、[ユーザのデータベース認証をデータベースログオンに使用する](#)を選択します。

7. [保存して閉じる](#)をクリックします。

6.2.6 Crystal レポートのデフォルトパラメータ値を変更する

Crystal レポートにパラメータが含まれる場合は、各パラメータのデフォルト値を設定できます。デフォルト値は、レポートインスタンス生成時に使用されます。

既定値を含むパラメータフィールドを使用すると、ユーザは BI プラットフォームに表示するデータを表示および指定できます。BI ラウンチパッドなどの BI プラットフォームアプリケーションを使用すると、ユーザはデフォルト値を使用してレポートを開くか、別の値を選択できます。デフォルト値を指定しなかった場合、ユーザはレポートをスケジュールする際に値の入力を求められます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. デフォルトのプロンプト値を更新するレポートオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [プロンプト](#) をクリックします。
このオプションは、レポートオブジェクトにパラメータが含まれる場合にのみ利用できます。パラメータが含まれない場合は、このオプションは利用できないため、この手順をスキップします。
5. [\[デフォルト値\]](#) 列で、パラメータのデフォルト値を入力するか選択します。
デフォルト値を変更するためのオプションが表示されます。パラメータ値のタイプに応じて、ボックスに値を入力するか、リストで値を選択することができます。
6. [\[値のクリア\]](#) ボタンをクリックして、パラメータに設定されている現在の値をクリアします。
7. BI プラットフォームアプリケーションでレポートインスタンスを表示する前にユーザにプロンプトを表示するには、[\[表示時にプロンプトを表示\]](#) チェックボックスをオンにします。

8. [保存して閉じる](#)をクリックします。

6.2.7 Web Intelligence ドキュメントのプロンプトの更新

レポートにパラメータが含まれる場合は、各パラメータのデフォルトのプロンプト値を設定できます。デフォルト値は、レポートインスタンス生成時に使用されます。

既定値を含むプロンプトフィールドを使用すると、表示するデータを指定できます。BI ラウンチパッドなどの BI プラットフォームアプリケーションでは、ユーザはあらかじめ設定されたデフォルト値を使用するか、別の値を選択して、レポートを使用できます。デフォルト値を指定しなかった場合、ユーザはレポートをスケジュールする際に値の入力を求められます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアを表示します。
2. プロンプトを更新する Web Intelligence ドキュメントを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [デフォルト設定](#) ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の [プロンプト](#) をクリックします。
このオプションは、Web Intelligence ドキュメントオブジェクトにプロンプトが含まれる場合にのみ表示されます。プロンプトが含まれない場合は、このオプションは利用できません。
5. [変更](#) をクリックします。
6. プロンプトを選択して、プロンプト値を入力します。
使用可能な値が表示されていない場合は、[値の最新表示](#) ボタンをクリックします。
7. 変更するプロンプト値それぞれについて、手順 5 と 6 を繰り返します。
8. [適用](#) をクリックし、[保存して閉じる](#) をクリックします。

関連情報

[Crystal レポートのデフォルトパラメータ値を変更する \[40 ページ\]](#)

6.2.8 レポートへのフィルタ適用

選択式は、必要な情報のみが表示されるよう結果を絞り込むという点で、[\[パラメータ\]](#) フィールドに似ています。レポートのデフォルトの選択式を設定できます。

ユーザは、レポートを表示または最新表示するときに選択式の値の入力を求められることはありません。ユーザは、BI ラウンチパッドなどの Web ベースのクライアントアプリケーションでレポートをスケジュールするときに、レポートに適用する選択式を修正することもできます。デフォルトで、Web ベースのクライアントアプリケーションは、セントラル管理コンソール (CMC) で定義されている式を使用します。選択式の詳細については、*SAP Crystal Reports for Enterprise ユーザガイド* を参照してください。

処理拡張機能を作成している場合は、選択式の変更に加えて、レポートに適用する拡張機能を選択できます。処理拡張機能と共にフィルタを使用する場合は、処理拡張機能で処理されたデータのサブセットが返されます。選択式と処理拡張機能は、レポートに適用するフィルタとして機能します。

選択式と処理拡張機能は、Web Intelligenceドキュメント、.rptx形式の SAP Crystal レポート、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。

6.2.8.1 フィルタの使用

一部の種類のレポートのみに対してフィルタリングできます。これらは、Web Intelligenceドキュメント、.rptx形式の SAP Crystal レポート、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートで使用できません。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. フィルタを追加するレポートオブジェクトを選択します。
3. **管理 > デフォルト設定**を選択します。
4. **デフォルト設定**ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の**フィルタ**をクリックします。
5. 選択式を更新または新しく追加するために、次の操作のいずれかを実行します。
 - **[レコードの選択]** ボックスで、レポートのスケジュール時に使用するレコード数を制限する 1 つまたは複数のレコード選択式を作成または編集する。
 - **[グループの選択]** ボックスで、レポートのスケジュール時に使用するグループ数を制限する 1 つまたは複数のグループ選択式を作成または編集する。
6. **保存して閉じる**をクリックします。

6.2.9 Crystal レポートのプリンタとページレイアウトオプションの設定

Crystal レポートのページレイアウトおよびプリンタを選択することができます。

オプションで、レポートのスケジュール時またはレポートを実行するたびに、Crystal レポートインスタンスを印刷できます。レポートインスタンスは、常に Crystal レポート形式で印刷されます。

レポートインスタンスをいかなる形式で表示、またはスケジュールする場合でも、ページの向き、ページサイズなど、ページレイアウト条件を最初に指定することができます。レポートインスタンスのページレイアウトは、レポート全体の表示スタイルを決定し、インスタンスの印刷方法に影響します。レポート全体の表示スタイルは、レポートを表示するデバイスのプロパティ (フォントメトリクス、ビューアやプリンタのその他レイアウト設定) によっても影響されます。

プリンタを選択するには、Crystal Reports Job Server が、プリンタへのアクセス権を持つアカウントによって実行されている必要があります。レポートインスタンスは、Crystal Reports Job Server のデフォルトプリンタまたは別のプリンタで、通常の印刷オプションを選択して印刷することができます。

6.2.9.1 Crystal レポートのプリンタの選択

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. プリンタを割り当てるレポートオブジェクトを選択します。
3. **管理 > デフォルト設定**を選択します。

4. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の印刷設定をクリックします。
5. [印刷設定] で、[スケジュール時に Crystal レポートを印刷する] チェックボックスをオンにします。
Crystal レポートは、SAP Crystal Reports 形式でプリンタに送信されます。この形式は、レポートをスケジュールしたときに選択したページレイアウトに影響を与えません。
6. 部数ボックスに、印刷する部数を入力します。
7. ページ範囲で、すべてを選択してすべてのレポートページを印刷するか、ページを選択して、印刷する最初のページと最後のページをボックスに入力します。
8. [部単位で印刷するオプションを設定] リストで、次の操作のいずれかを実行します。
 - レポートを部単位で印刷する場合は [部単位で印刷] を選択します。
 - レポートを部単位で印刷しない場合は [ページ単位で印刷] を選択します。
 - プリンタのデフォルトの部単位印刷設定を使用する場合は [プリンタのデフォルト値を使用] を選択します。
9. [ページの拡大縮小] リストで、次の操作のいずれかを実行します。
 - 印刷するページに合わせてレポートページを拡大する場合は [拡大して合わせる] を選択します。
 - 印刷するページに合わせてレポートページを縮小する場合は [縮小のみで合わせる] を選択します。
 - レポートの縮小拡大をしない場合は [縮小拡大しない] を選択します。
10. 印刷するページでレポートを中央揃えにする場合は [ページの中央揃え] チェックボックスをオンにします。
11. 横方向のページを印刷する 1 ページに合わせる場合は [横方向のページを 1 ページに合わせる] チェックボックスをオンにします。
12. [ページレイアウトの指定] で、次の操作のいずれかを実行します。
 - Crystal Reports Job Server のデフォルトのプリンタに印刷する場合は、[通常使用するプリンタ] を選択します。
 - プリンタの指定を選択して、ボックスにプリンタのパスと名前を入力します。
Job Server が Windows にある場合は、\\<PrintServer>\<PrinterName> と入力します。
<PrintServer> はプリンタサーバの名前で、<PrinterName> はプリンタの名前です。
Job Server が Unix にある場合は、Unix プリンタが表示されている (非表示になっていない) ことを確認して、lp - d <PrinterName> などの通常使用している印刷コマンドを入力します。
13. 保存して閉じるをクリックします。

6.2.9.2 Crystal レポートおよび PDF オブジェクトのページレイアウトオプションの選択

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアにジャンプします。
2. ページレイアウトを設定するレポートオブジェクトを選択します。
3. ► 管理 ► デフォルト設定 ◀ を選択します。
4. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の印刷設定をクリックします。
5. デフォルトの印刷モードを選択するために、[印刷設定] で次の操作のいずれかを実行します。
 - Web ビューアからレポートを印刷するときに PDF 印刷設定を使用する場合は、[常に PDF に印刷する (プレビュー)] を選択します。
 - CMC の基本設定で定義されている Crystal レポートのデフォルトの印刷設定を使用する場合は、[Crystal Reports の基本設定に従う] を選択します。

6. [ページレイアウトの指定] の [レイアウトの設定] リストで、次の操作のいずれかを実行します。

- Crystal Reports で定義されているページレイアウトを使用する場合は、[レポートファイルのデフォルト] を選択します。
- プリンタのデフォルトのページレイアウトを使用する場合は [指定のプリンタ設定] を選択して、Crystal Reports Job Server のデフォルトのプリンタか別のプリンタを選択します。
スケジュールされたレポートインスタンスは、[スケジュール時の印刷] で指定されたプリンタのみに印刷できます。つまり、1 つのプリンタのデフォルトのページレイアウトを使用するようにレポートを設定した後で、別のプリンタに印刷することはできません。
- すべてのページレイアウト設定をカスタマイズする場合は、[カスタム設定] を選択して、ページの方向と用紙サイズを選択します。

7. [保存して閉じる] をクリックします。

6.2.10 処理拡張機能

処理拡張機能は、動的にロードされるコードのライブラリであり、特定の表示またはスケジュールリクエストに対して、BI プラットフォームで処理される前にビジネスロジックを適用します。カスタマイズされた処理拡張機能を使用して、レポート環境のセキュリティを向上させることができます。

処理拡張機能により、開発者は、BI プラットフォーム管理 SDK で提供されるハンドルを使用して、レポートが処理される前に、表示リクエストおよびスケジュールリクエストを受信して、これらのリクエストに選択式を追加することができます。SDK には、開発者が処理拡張機能の作成に使用できる API が用意されています。この API の完全な情報は文書化されています。詳細については、製品メディアに収録されている開発者ドキュメントを参照してください。

処理拡張機能は、Web Intelligence ドキュメント、.rptx 形式の Crystal レポート、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。



例

行レベルのセキュリティを実行するレポート処理拡張機能

この種類のセキュリティは、1 つまたは複数のデータベーステーブル内の行ごとのデータアクセスを制限します。開発者は、レポートの表示リクエストまたはスケジュールリクエストが Adaptive Job Server、Crystal Reports Processing Server または Report Application Server によって処理される前に、これらを受信する、動的にロードされるライブラリを作成します。開発者のコードで処理ジョブを所有しているユーザが特定され、サードパーティシステムでユーザのデータアクセス権が検索されます。次に、データベースから返されるデータを制限するために、レコード選択式が生成されて、レポートに追加されます。この例では、処理拡張機能によって、カスタマイズされた行レベルのセキュリティを BI プラットフォームに追加します。

処理拡張機能のレポートへの適用

処理拡張機能をレポートオブジェクトに適用するには、CMC に処理拡張機能を登録する必要があります。レポートオブジェクトには、複数の処理拡張機能を適用することができます。BI プラットフォームサーバコンポーネントは、実行時に処理拡張機能を動的にロードします。


Windows では、動的にロードされるライブラリをダイナミックリンクライブラリ (.dll) と呼びます。Unix では通常、動的にロードされるライブラリを共有ライブラリ (.so) と呼びます。処理拡張機能名には、ファイル拡張子が必要ですが、バックスラッシュ (\) またはスラッシュ (/) を含めることはできません。

6.2.10.1 レポートへの処理拡張機能の割り当て

レポートオブジェクトには、複数の処理拡張機能を適用することができます。

処理拡張機能をレポートオブジェクトに適用するには、CMC に処理拡張機能を登録する必要があります。

処理拡張機能は、Web Intelligence ドキュメント、.rptx 形式の Crystal レポート、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 処理拡張機能を適用するレポートオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **拡張機能** をクリックします。
5. **利用可能な処理拡張機能** リストで処理拡張機能を選択し、 をクリックしてその機能を **これらの処理拡張機能を使用する (表示順)** リストに移動します。
[利用可能な処理拡張機能] リストには、登録済みの処理拡張機能のみが含まれます。
6. **上へ移動** ボタンと **下へ移動** ボタンを使用して、処理拡張機能を使用する順序を設定します。
7. **保存して閉じる** をクリックします。

処理拡張機能が、レポートオブジェクトに割り当てられます。

6.2.11 ハイパーリンクを使用したレポートでの作業

SAP Crystal Reports では、ハイパーリンクを使用してレポートオブジェクト間を移動することができます。たとえば、レポート内のレポートパーツ、別のレポートオブジェクトやその中のパーツ、またはレポートやレポートパーツの特定のインスタンスに移動できます。

あるレポートオブジェクトから別のオブジェクトへ直接リンクすることによって、必要なデータコンテキストが自動的に渡され、オブジェクトに移動したときに適切なデータが表示されます。

BI プラットフォームには、Crystal レポート間ナビゲーションのためのスクリプトベースの DHTML ビューア (ゼロクライアント、サーバ側) が含まれています。セントラル管理コンソール (CMC) から Crystal レポートにオンラインでアクセスする場合、デフォルトの DHTML Web ビューアを使用します。DHTML Web ビューアと同じ機能が提供されない古い Java ビューアを使用しないでください。

まず、SAP Crystal Reports 内のレポート間でハイパーリンクを追加する際には、1 つのファイルから別のファイルへの直接のリンクを作成します。ただし、リンクが設定されたレポートファイルを同時に同じオブジェクトパッケージに追加すると、管理レポートオブジェクトを指すようにリンクが更新されます。各リンクは、ファイルパスによってではなく、Enterprise ID によって適切なレポートを参照するように変更されます。変更されたリンクは、オブジェクトパッケージ内で相対的になります。オブジェクトパッケージをスケジュールすると、プラットフォームはレポートを処理し、各レポートインスタンスのハイパーリンクを再度変

更します。オブジェクトパッケージの特定のインスタンスでは、レポートオブジェクト間のハイパーリンクがレポートインスタンス間のハイパーリンクに変換されます。

ハイパーリンクを使用したレポートを表示するには、リンク元レポートとリンク先レポートの両方をプラットフォームに追加する必要があります。リンク元レポートとは、リンク先レポートへのハイパーリンクのあるレポートのことです。レポートオブジェクト間でハイパーリンクを作成する方法については、SAP Crystal Reports ヘルプを参照してください。

Web Intelligence ドキュメントまたは SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには、ハイパーリンクは表示できません。

関連情報

[オブジェクトパッケージによるオブジェクトのスケジュール \[105 ページ\]](#)

6.2.11.1 既存のハイパーリンクを使用した Crystal レポートの追加

ハイパーリンクを使用したレポートを作成する際のベストプラクティスは、個々のレポートを公開してから、それらのレポート間でハイパーリンクを作成する方法です。

SAP Crystal Reports 2011 designer のレポートアップロードウィザードを使用して、リンクしたレポートを同じオブジェクトパッケージに追加します。このような方法でレポートを公開すると、ハイパーリンクは相対リンクに変換されます。

ハイパーリンクを使用したレポートを、同時に同じオブジェクトパッケージに追加するのではなく、個別に BI リポジトリに追加すると、レポート間のハイパーリンクはすべて切断されます。SAP Crystal Reports を使用してリンクを再設定し、レポートを BI プラットフォームに保存する必要があります。詳細については、SAP Crystal Reports ヘルプを参照してください。

ハイパーリンク化されたレポートを Web Intelligence ドキュメントに追加することはできません。

関連情報

[BI リポジトリへのレポートの追加およびハイパーリンクの追加 \[47 ページ\]](#)

6.2.11.2 ハイパーリンクを使用したレポートの表示

BI プラットフォームでハイパーリンクを使用したレポート間のナビゲーションが行えるのは、BI ラウンチパッド内の DHTML やアドバンスド DHTML など、スクリプトベースのビューアを使用した場合だけです。

セントラル管理コンソールで表示形式を変更するには、ウィンドウの右上隅にある [基本設定](#) をクリックして、[CMC 基本設定](#) をクリックし、優先表示ロケール (PVL) を選択します。PVL の変更についての詳細は、*SAP BusinessObjects Business Intelligence ラウンチパッドユーザガイド* を参照してください。

パラメータ情報は、リンク元レポートからリンク先レポートに転送されません。そのため、リンク元レポート内のハイパーリンクをクリックしてリンク先レポートを表示すると、リンク先レポートに必要なパラメータを入力するように求められます。

CMC から Crystal レポートにオンラインでアクセスする場合、デフォルトの DHTML Web ビューアを使用します。DHTML Web ビューアと同じ機能が提供されないレガシ Java ビューアを使用しないでください。

Web Intelligence ドキュメントまたは SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには、ハイパーリンクは表示できません。

セキュリティ上の考慮事項

ハイパーリンクを使用したレポートを BI プラットフォームで表示するには、プラットフォームとデータベースレベルの両方で適切なアクセス権が必要です。

プラットフォームで、リンク元レポートのハイパーリンクを使用してリンク先レポートを表示するには、リンク先レポートに対する表示権限が必要です。ハイパーリンクがレポートオブジェクトを指す場合、レポートオブジェクトのデータをソースに対し最新表示するには、[オンデマンド表示] アクセス権が必要です。

データベースのログオン情報は、ハイパーリンクを使用したレポート間で引き継がれます。リンク元レポートを表示するために入力した認証情報がリンク先レポートで有効でない場合は、リンク先レポートに有効なデータベースログオン認証情報を入力するように求められます。

6.2.11.3 BI リポジトリへのレポートの追加およびハイパーリンクの追加

レポート間のハイパーリンクが切れないようにするために、最初にレポートを追加してからハイパーリンクを作成します。

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。SAP Crystal Reports でのタスクの詳細については、SAP Crystal Reports ヘルプを参照してください。

1. Crystal Reports でハイパーリンクを設定せずにレポートを作成します。
2. レポートを BI プラットフォームリポジトリに追加します。
3. Crystal Reports を使用してプラットフォームにログオンします。
4. ホームレポートと出力先レポートの間にハイパーリンクを作成します。

Crystal Reports で自動的に、レポート間に相対リンクを確立するか絶対リンクを確立するかが決定されます。プラットフォームでは、相対リンクは同じオブジェクトパッケージ内のレポートに割り当てられ、絶対リンクは個別のレポートオブジェクトまたはインスタンスに割り当てられます。

6.2.12 Crystal レポートの最初のページのサムネイル画像の表示

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 最初のページにサムネイル画像を表示するレポートを見つけて選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。

4. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の**拡張機能**をクリックします。
5. **[レポートのサムネイルを表示]** チェックボックスをオンにします。
6. **保存して閉じる**をクリックします。

6.2.13 Crystal レポートでのアラート表示

セントラル管理コンソール (CMC) で、Crystal レポートのアラートを表示することができます。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. 表示する Crystal レポートが含まれるフォルダまたはカテゴリを見つけて、オブジェクトを選択します。
3. **▶ その他のアクション ▶ アラート**を選択します。

アラートダイアログボックスには、アラートを生成したインスタンスが表示されます。

4. インスタンスタイトルをダブルクリックしてインスタンスを開きます。

6.2.14 Web Intelligence ドキュメントのユニバースの表示

CMC では、Web Intelligence ドキュメントが使用するユニバースを表示できます。

ユニバースとは、データベースで利用できる情報の表現です。ユニバース内のオブジェクトを使用して、Web Intelligence ドキュメントへのクエリを作成します。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. ユニバースを表示する Web Intelligence ドキュメントオブジェクトを選択します。
3. **▶ 管理 ▶ デフォルト設定**を選択します。
4. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の**レポートユニバース**をクリックします。

ドキュメントで使用されているユニバースの一覧が表示されます。

6.3 統合環境でのレポートの操作

SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) および BI プラットフォームで、レポートを追加および表示します。

6.3.1 BW から BI プラットフォームへのレポートの追加

レポートを SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) から BI プラットフォームに追加するには、以下の方法があります。

- BW クエリからレポートを作成した直後に、そのレポートをプラットフォームに追加する

- BW からプラットフォームにレポートをまとめて追加する

Crystal Reports がマシンにインストールされている場合は、BW クエリに基づいてレポートをデザインしてから、レポートの BW への保存と、Crystal Reports からプラットフォームへの追加を同時に実行することができます。この機能を有効にするには、Crystal Reports で、▶ **SAP ▶ 設定** ▶ を選択して、[*SAP BusinessObjects Enterprise に自動的に公開する*]を選択します。

6.3.1.1 BI プラットフォームへの Crystal レポートの追加

次の方法で Crystal レポートを BI プラットフォームに追加できます。

- レポートをまとめてプラットフォームに追加します。この方法は、すでに多数のレポートを SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) にすでに追加している場合に使用します。
- SAP Crystal Reports 2011 またはプラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) のレポートアップロードウィザードを使用します。

6.3.1.2 BW からレポートをまとめて追加

多数の Crystal レポートを BI プラットフォームに追加するには、コンテンツ管理ワークベンチを使用できます。

コンテンツ管理ワークベンチでの公開の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

6.3.2 開発コンテンツを BW の本稼動システムに移行する

BI プラットフォームが SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) 開発環境にデプロイされている場合は、BW 本稼働環境での使用向けに設定されているレポートコンテンツをプラットフォームにインポートできます。次は、コンテンツをインポートする際の留意点です。

- BW は Crystal レポート (.rpt ファイル) をネイティブオブジェクトとして扱います。Crystal レポートが BW 開発システムのリポジトリに格納されている場合、その BW コンテンツを転送して、プラットフォームにレポートをまとめて追加できます。このプロセスでは、NetWeaver BW レポートパブリッシャによって、各レポートのデータベース情報が確実に更新されます。BW システム間でのコンテンツの転送の詳細情報を確認する場合は、SAP Help Portal (help.sap.com) で “SAP Library” を検索してください。
- BW 開発システムのリポジトリから一部または全部の Crystal レポートを削除している場合は、ライフサイクルマネジメントコンソールを使用して、ある BI プラットフォームインストールから別のプラットフォームインストールへレポートオブジェクトをインポートできます。ライフサイクルマネジメントコンソールを使用するときは、インポートする各レポートファイルに正しいデータベース情報を設定する必要があります。
- 移行するレポートファイル数が少ない場合は、CMC で各レポートのデータベース情報を簡単に変更できます (**フォルダ管理**領域で目的のレポートを探し、▶ **アクション ▶ データベース設定** ▶ をクリックします)。

コンテンツを移行したら、コンテンツ管理ワークベンチを使用してレポートの管理タスクを行います。レポート管理タスクには、プラットフォームと BW の間でのレポートに関する情報の同期化（ステータスの更新）、不要なレポートの削除、および前のバージョンのプラットフォームから移行されたレポートの更新（ポスト移行）があります。

6.3.3 レポートの表示

Crystal レポートは、BI プラットフォームと SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) の統合方法に応じて、多くのアプリケーションで表示できます。

たとえば、SAP 認証情報を使用して BI ランチパッドにログオンし、レポートを表示できます。または、SAP Logon の Web ブラウザでレポートを開くことができます。

6.3.3.1 BI ランチパッドでのレポートの表示


BI ランチパッドの使用法の詳細については、BI ランチパッドヘルプを参照してください。

1. Web ブラウザで、BI ランチパッドの URL を入力します。 `http://<WebServer>:<PortNumber>/BOE/BI`
`<WebServer>` を Web サーバの名前に、`<PortNumber>` を BI プラットフォームのポート番号に置き換えます。

プラットフォームがインストールされている場合は、**スタート** > **プログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム Java BI ランチパッド** を選択します。
2. **BI ランチパッドへのログオン** ダイアログボックスの **認証** 一覧で、**SAP** チェックボックスを選択します。
3. **SAP システム ID** ボックスに、SAP システムの 3 文字の ID (SID) を入力します。
SID が不明な場合は、システム管理者にお問い合わせください。
4. **SAP クライアント** ボックスに、3 桁の SAP クライアント番号を入力します。
5. **ユーザ名** ボックスと **パスワード** ボックスに、SAP ログオン認証情報を入力します。
6. **[ログオン]** をクリックします。
これで、ランチパッドにログオンします。
7. **マイグループフォルダ** をクリックすると、SAP ロールで保存され、プラットフォームに公開されているすべてのオブジェクトに簡単にアクセスできます。

6.3.3.2 公開されたレポートの SAP Easy Access での表示

1. SAP Easy Access にログオンします。
2. **ロール** を参照して、SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) に保存されているレポートを探します。

BW で Crystal レポートアイコン  を探します。

3. ダブルクリックして、そのレポートを開きます。

レポートが Web ブラウザに表示されます。SAP Web アプリケーションサーバまたは BI プラットフォーム (あるいはその両方) へのログオンを促すメッセージが表示された場合は、通常の認証情報を入力します。

6.3.4 BW クエリから生成されたレポートのパーソナライゼーション

BI プラットフォームでは、SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリから生成されたレポートのパーソナライズ変数をサポートしています。

BW クエリに基づくレポートには、返されるデータを制限または指定するためにクエリによって使用される値を含む変数を含めることができます。通常、レポートを実行するには値を入力するか、事前定義された値の一覧から値を選択します。

SAP Business Explorer (BEx) のパーソナライゼーション機能を利用すると、変数の値を入力し、それをユーザ固有のデフォルト値として保存することができます。レポートを実行すると、変数値に基づいてデータが生成されます。同じレポートを再度実行する場合は、保存したデフォルト値を使用できます。

パーソナライズ値はユーザ固有です。パーソナライズ値は自分用에만設定でき、他のユーザに対しては設定できません。各ユーザは、変数の既定値の代わりにパーソナライズ値を設定することができます。パーソナライゼーションに関する詳細は、BW システムのマニュアルを参照するか、システム管理者に問い合わせてください。

6.3.4.1 パラメータ

BI ランチパッドでは、レポート変数をパラメータと呼びます。

レポートを表示またはスケジュールするには、ダイナミックピックリストから各パラメータの値を選択する必要があります。パラメータに使用できる値は、SAP 環境で各変数に割り当てられており、SAP 内のアクセス権に基づいてフィルタリングされます。

[プロンプト値を入力してください] ダイアログボックスでは、次のタスクを実行できます。

- デフォルトのパラメータ値を使用して、レポートを実行する
- ダイナミックピックリストでパラメータ値を選択し、レポートを実行する
- 各パラメータ値を手動で入力し、レポートを実行する
- 各パラメータ値をパーソナライズし、レポートを実行する
- すべてのパラメータに NULL 値を使用して、レポートを実行する

一部のオプションは、そのレポートの基になる SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリ内または BI プラットフォーム内で有効になっている場合にのみ利用できます。

6.3.4.1.1 デフォルトのパラメータ値を使用してレポートを表示

レポートのパラメータのデフォルト値は、SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリを作成するときに、SAP 環境に設定されます。

BI プラットフォームのレポートは BW クエリに基づくため、クエリ変数のデフォルト値が自動的にレポートパラメータのデフォルト値になります。

1. BI ラウンチパッドにログインします。
2. デフォルトのパラメータ値を表示するレポートオブジェクトをダブルクリックします。
3. **プロンプト値を入力してください。**ダイアログボックスで、**OK** をクリックします。
レポートが Crystal レポートビューアに表示されます。このレポートには、パラメータに割り当てられているデフォルト値に基づくデータが表示されます。

6.3.4.1.2 ダイナミックピックリスト内のパラメータ値を使用してレポートを表示

パラメータのダイナミックピックリスト内の選択肢は、SAP 環境でその変数に割り当てられている値に基づいています。

BI ラウンチパッドに表示される値は、ユーザのアクセス権に対応しているため、権限のある値のみが表示されます。

SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリベースのパラメータの NULL 値のみを使用してレポートを表示できません。

1. BI ラウンチパッドにログインします。
2. パラメータ値を設定するレポートオブジェクトをダブルクリックします。
3. **プロンプト値を入力してください。**ダイアログボックスで、**参照 (...)** ボタンをクリックします。
4. **ピックリスト** ダイアログボックスで、リスト内のパラメータ値のハイパーリンクをクリックします。
[**プロンプト値を入力してください**] ダイアログボックスがもう一度表示され、選択した値がパラメータの編集フィールドに表示されます。
5. 残りのパラメータに対してもステップ 3 および 4 を繰り返してから、**[実行]** をクリックします。

レポートが Crystal レポートビューアに表示されます。このレポートには、選択したパラメータ値に基づくデータが表示されます。

6.3.4.1.3 スケジュールされたレポートにおける NULL パラメータ値

Null パラメータ値を使用してレポートをスケジュールすると、レポートの実行時に SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリには値が渡されません。代わりに、レポートは変数のデフォルト値またはパーソナライズ値を使用します。パーソナライズ値はデフォルト値を上書きします。

レポートの実行に使用されているパラメータ値を変更する場合は、BI プラットフォームでそのレポートをクリックし、新しいパラメータを使用してレポートを再スケジュールします。そのレポートはもともと、NULL パラメータ値を使用して実行するようにスケジュールされていたので、そのレポートに対して値は保存されていません。レポートを次に実行すると、新しいパラメータ値に基づいてデータが生成されます。

変数にデフォルト値またはパーソナライズ値がない場合、レポートは変数の値なしに実行を試みます。クエリによっては、レポートを実行するために変数に値が必要な場合に、エラーメッセージが表示されることがあります。

6.3.4.1.3.1 NULL パラメータ値を使用してレポートを表示

この方法は、主にレポートをスケジュールする際に使用されます。

SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリベースのパラメータの NULL 値のみを使用してレポートを表示できます。

1. BI ラUNCHパッドにログオンします。
2. パラメータ値を設定するレポートオブジェクトをダブルクリックします。
3. **プロンプト値を入力してください**。ダイアログボックスで、各パラメータに **NULL に設定** を選択します。
4. **OK** をクリックします。

レポートが Crystal レポートビューアに表示されます。このレポートには、SAP 環境の変数に割り当てられているデフォルト値またはパーソナライズ値に基づくデータが表示されます。

6.3.4.1.4 スケジュールされたレポートのパーソナライズされたパラメータ値

パーソナライズされたパラメータ値を含むレポートに対して定期スケジュールを設定すると、BI プラットフォームはレポートを実行するたびに、パーソナライズ値を使用します。

値をパーソナライズすると、プラットフォームによってその値が保存され、そのレポートでユーザ固有の永久パラメータ値として設定されます。パラメータのパーソナライズ値を途中で変更しても、スケジュールされたレポートでは、変更前のパーソナライズ値に基づくデータが引き続き表示されます。

パラメータのパーソナライズ値を変更した後、スケジュールされたレポートで新しい値を使用するには、以下を行います。

- 新しいパラメータ値でレポートをもう一度スケジュールする。
- パラメータに対して NULL 値を使用するレポートをスケジュールする。レポートの実行時に、プラットフォームによってパーソナライズ値が評価されます。

6.3.4.1.4.1 パーソナライズされたパラメータ値を使用してレポートを表示


パーソナライゼーションを利用することにより、ユーザはパラメータに対するデフォルト値を設定して保存し、後で再利用することができます。パラメータのパーソナライズ値を設定すると、そのパーソナライズ値がデフォルト値になります。

SAP NetWeaver Business Warehouse (BW) クエリベースのパラメータのパーソナライズされた値のみを使用してレポートを表示できます。また、このレポートは SAP NetWeaver MDX ドライバに基づいている必要があります。

パーソナライズ値はユーザ固有であり、他のユーザに対して定義することはできません。他のユーザが同じレポートを使用する場合、そのユーザは、自分専用のパーソナライズ値を設定することも、そのパラメータの既定値を使用することもできます。パーソナライゼーションに関する詳細は、BW システムのマニュアルを参照するか、システム管理者に問い合わせてください。

1. BI ラUNCHパッドにログオンします。
2. パラメータ値を設定するレポートオブジェクトをダブルクリックします。
[プロンプト値を入力してください] ダイアログボックスが表示され、[現在の値] の横にレポートパラメータのデフォルトの値が一覧表示されます。

3. パラメータの値をパーソナライズするには、次の操作のいずれかを実行します。

- リストから値を選択して、**パーソナライズアイコン** () をクリックし、その値をパーソナライズ値として設定する。
- パラメータの **編集** ボックスに値を入力して、**パーソナライズアイコン** をクリックし、その値をパーソナライズ値として設定する。

これで、パーソナライズ値に基づくデータを使用したレポートを表示できます。今後、同じレポートを表示する際に別のパラメータ値を指定しない限り、このパーソナライズ値に基づいてレポートが実行されます。

6.4 プログラムオブジェクトの管理

この節では、プログラムオブジェクトおよびプログラムインスタンスについてと、それらをセントラル管理コンソール (CMC) で管理する方法、タイプ特有のプログラムオブジェクトの設定およびプログラムオブジェクトのセキュリティ上の考慮点について説明します。

6.4.1 プログラムオブジェクトとインスタンスの概要

プログラムオブジェクトとは、BI プラットフォーム内のアプリケーションを表すオブジェクトです。プログラムオブジェクトを追加すると、オブジェクトをスケジュールして実行したり、そのオブジェクトに対するアクセス権を管理したりできます。

プログラムオブジェクトまたはその関連ファイルをプラットフォームに追加すると、オブジェクトまたはファイルは、Input File Repository Server (FRS) に格納されます。プログラムが実行されるたびに、プログラムとファイルは、Program Job Server に渡され、プラットフォームはプログラムインスタンスを作成します。

完全な書式で表示可能なレポートインスタンスと違って、プログラムインスタンスはオブジェクト履歴内にレコードとして存在します。プラットフォームでは、各プログラムの標準出力と標準エラーがテキスト形式の出力ファイルに保存されます。これは、オブジェクトの履歴でプログラムインスタンスをクリックすると表示できます。

プログラムオブジェクトを正常にスケジュールし、実行するには、プログラムオブジェクトの実行時に使用するアカウントにログインする必要があります。

関連情報

[プログラムオブジェクトとインスタンスの概要 \[54 ページ\]](#)

6.4.1.1 プログラムオブジェクトのタイプ

次のタイプのアプリケーションを、プログラムオブジェクトとして BI リポジトリに追加することができます。

表 11:

プログラムオブジェクト	説明
実行可能プログラム	実行プログラムは、.com、.exe、.bat、または .sh などのファイル拡張子を持つバイナリファイル、バッチファイル、またはシェルスクリプトです。コマンドラインから実行できる任意の実行可能プログラムを、Program Job Server を実行しているマシンに追加できます。
Java	いずれの Java プログラムも、Java プログラムオブジェクトとして BI リポジトリに追加できます。
スクリプト[スクリプト]	スクリプトプログラムオブジェクトには、JScript スクリプトと VBScript スクリプトがあります。これらのスクリプトは、埋め込み COM オブジェクトを使用して Windows 上で実行され、公開後は、BI プラットフォーム SDK オブジェクトを参照できます。 スクリプトプログラムオブジェクトは、UNIX ではサポートされません。

プログラムオブジェクトを使用すると、BI プラットフォームで実行されるスクリプトや Java プログラムを、作成、公開、スケジュールしたり、履歴からインスタンスを削除する、などの保守作業を行うことができます。プラットフォームセッション情報にアクセスするように、スクリプトと Java プログラムを設計することができます。これによって、スケジュールされたプログラムオブジェクトが、確実に、ジョブをスケジュールしたユーザのセキュリティアクセス権や制限を保持するようになります。スクリプトおよび Java プログラムは、BI プラットフォーム SDK にアクセスする必要があります。詳細については、SAP Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイドなどのプラットフォーム SDK ドキュメントを参照してください。

システム管理者は、プログラムオブジェクトのいずれの種類に対しても有効/無効を設定できます。プログラムオブジェクトをリポジトリに追加すると、CMC の **[フォルダ]** 領域でこのオブジェクトを設定できるようになります。プログラムオブジェクトのタイプ (**実行可能プログラム**、**Java**、または **スクリプト**) ごとに、コマンドライン引数と作業ディレクトリを指定できます。実行可能プログラムおよび Java プログラムについては、プログラムオブジェクトを設定し、それらのプログラムオブジェクトが他のファイルにアクセスできるようにするための追加の方法 (必須またはオプション) が用意されています。

6.4.2 プログラムの処理オプションの設定

6.4.2.1 コマンドライン引数の指定

[管理]メニューの[デフォルト設定]コマンドで、プログラムオブジェクトごとにコマンドライン引数を指定できます。

プログラムのコマンドラインインターフェースでサポートされている引数であれば、どのような引数でも指定できます。引数は、解析されずに、コマンドラインインターフェースに直接渡されます。

1. CMC の **[フォルダ]** 管理エリアで、プログラムオブジェクトを選択します。

2. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
3. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の**プログラムパラメータ**をクリックします。
4. **引数**ボックスには、コマンドラインで使用するのと同じ形式で、プログラムのコマンドライン引数を入力します。

たとえば、プログラムにループオプションがある場合に、ループ値を 100 に設定するには、「**-loops 100**」と入力します。

5. **保存して閉じる**をクリックします。

6.4.2.2 プログラムオブジェクト用の作業ディレクトリ

プログラムオブジェクト用に別の作業ディレクトリを指定するには、**管理** > **デフォルト設定** を選択するか、Adaptive Job Server のデフォルト作業ディレクトリを変更することができます。

BI プラットフォームでは、プログラムオブジェクトの実行時に、デフォルトで Adaptive Job Server の作業ディレクトリ内に一時サブディレクトリが作成され、このサブディレクトリがそのプログラムの作業ディレクトリとして使用されます。プログラムが実行を停止すると、サブディレクトリは自動的に削除されます。

プログラムオブジェクトの実行に使用するアカウントには、作業ディレクトリとして選択したフォルダに対する適切なアクセス権が必要です。プログラムのアカウントには通常、作業ディレクトリに対する読み取り権限、書き込み権限、および実行権限が必要です。必要なファイル権限のレベルは、プログラムの内容によって異なります。

6.4.2.2.1 プログラムオブジェクトの作業ディレクトリの設定

1. CMC の**[フォルダ]**管理エリアで、プログラムオブジェクトを選択します。
2. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
3. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の**プログラムパラメータ**をクリックします。
4. **作業ディレクトリ**ボックスに、プログラムオブジェクトの作業ディレクトリとして設定するディレクトリの完全パスを入力します。

たとえば、Windows で `working_directory` という作業ディレクトリを作成した場合は、**C:\working_directory** と入力します。Unix では、**/working_directory** と入力します。

5. **保存して閉じる**をクリックします。

6.4.2.2.2 プログラムオブジェクトのデフォルトの作業ディレクトリの変更

1. CMC の**サーバ**管理エリアを表示します。
2. プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server を選択します。
Adaptive Job Server がプログラムスケジュールサービスをホストしているかどうかを確認するには、サーバを選択して、**管理** > **プロパティ** を選択します。
3. **管理** > **プロパティ** を選択します。

4. [プロパティダイアログボックスの一時ディレクトリボックス](#)で、作業ディレクトリとして設定するディレクトリの完全パスを入力します。
5. [保存して閉じる](#)をクリックします。

6.4.3 実行可能プログラムオブジェクトの設定

実行可能プログラムオブジェクトを CMC に追加すると、次のアクションを実行できます。

- 外部ファイルまたは補助ファイルにアクセスするためのオブジェクトの設定
プログラムオブジェクト向けの作業ディレクトリの設定に加えて、外部ファイルまたは補助ファイルへアクセスできるように設定する必要があります。外部ファイルまたは補助ファイルの場所を指定するには、次の 2 とおりの方法があります。
 - ファイルがプログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server と同じマシンに存在する場合は、外部ファイルまたは補助ファイルの完全パスを指定します。
 - ファイルがその他の場所にある場合は、必要に応じて、外部ファイルまたは補助ファイルをプログラムスケジュールサービスに渡す File Repository Server に、そのファイルをアップロードします。
- BI プラットフォームでプログラムを実行する際のシェルの環境変数のカスタマイズ

関連情報

[Java プログラムの設定 \[59 ページ\]](#)

6.4.3.1 外部ファイルまたは補助ファイルへのパスの指定

外部ファイルまたは補助ファイルの場所をバイナリファイル、バッチファイル、およびシェルスクリプトに指定する必要があります。

1. CMC の[フォルダ管理](#)エリアを表示します。
2. パスを指定する実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. [管理](#) > [デフォルト設定](#) を選択します。
4. [\[デフォルト設定\]](#) ダイアログボックスで、[\[プログラムパラメータ\]](#) をクリックします。
5. [外部依存](#) ボックスに、ファイルの完全パスを入力し、[追加](#) をクリックします。
6. 外部依存を編集または削除するには、[\[外部依存\]](#) でパスを選択して、[\[編集\]](#) または [\[削除\]](#) をクリックします。
7. パスを指定する外部ファイルまたは補助ファイルごとに手順 5 を繰り返します。
8. [保存して閉じる](#) をクリックします。

6.4.3.1.1 外部ファイルまたは補助ファイルの削除

指定した補助ファイルを削除することができます。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. **現在の補助ファイル** リストからファイルを選択して、**ファイルの削除** をクリックします。

6.4.3.2 File Repository Server への外部ファイルまたは補助ファイルのアップロード

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. ファイルをアップロードする実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. **アクション > 関連ファイル** を選択します。
4. **参照** をクリックして、必要なファイルを見つけ、**ファイルの追加** をクリックします。
5. アップロードする各ファイルに対してステップ 4 を繰り返します。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

6.4.3.3 環境変数の追加

CMC では、環境変数の追加または変更を行って実行可能プログラムオブジェクトを設定することができます。

既存の環境変数を変更すると、デフォルトの変数が書き換えられます (変数に変更が付け足されるものではありません)。ただし、環境変数に対する変更は、情報プラットフォームサービスがプログラムを実行する一時的なシェル内でのみ有効です。そのため、プログラムが終了すると環境変数は破棄されます。

たとえば、次のように path 変数を設定して、ユーザの bin ディレクトリを既存のパスに付加します。

- Windows では、**path=%path%;c:\usr\bin** と入力します。
- UNIX では、**PATH=\$PATH:/usr/bin** と入力します。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. 環境変数を追加する実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. **管理 > デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、**プログラムパラメータ** をクリックします。
5. **環境変数** ボックスで、環境変数を **<name>=<value>** のように入力して、**追加** をクリックします。..

<name> は環境変数名で、**<value>** は環境変数の値です。情報プラットフォームサービスは、お使いのオペレーティングシステムに適した構文を使用して、環境変数を設定します。ただし、UNIX では、以下の規則に従って大文字/小文字を適切に使い分けます。たとえば、UNIX では name の値をすべて大文字にする必要があります。

6. **保存して閉じる** をクリックします。

6.4.3.3.1 環境変数の編集または削除

1. CMC のフォルダ管理エリアに移動します。
2. 環境変数を編集または削除するプログラムオブジェクトを選択します。
3. ► 管理 ► デフォルト設定 ▼ を選択します。
4. [デフォルト設定] ダイアログボックスで、[プログラムパラメータ] をクリックします。
5. 環境変数リストで、編集または削除する変数を選択し、編集または削除をクリックします。

6.4.4 Java プログラムの設定

BI プラットフォームで Java プログラムを正常にスケジュールして実行するには、プログラムオブジェクトに必要なパラメータを指定する必要があります。Java プログラムが Adaptive Job Server にあるファイルにアクセスできるように設定したり、Java 仮想マシンオプションを指定したりすることもできます。

6.4.4.1 Java プログラムの必須パラメータの指定

Java プログラムのスケジュールと実行を正常に行うには、SAP BusinessObjects Enterprise Java SDK の IProgramBase インタフェースを実装する .class ファイルの基本名を情報プラットフォームサービスに指定する必要があります。

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。
2. 必須パラメータを指定する Java プログラムオブジェクトを選択します。
3. ► 管理 ► デフォルト設定 ▼ を選択します。
4. デフォルト設定ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧のプログラムパラメータをクリックします。
5. 実行するクラスボックスに、SAP BusinessObjects Enterprise Java SDK の IProgramBase (com.businessobjects.sdk.plugin.desktop.program.IProgramBase) を実装する .class ファイルの基本名を入力します。
たとえば、ファイル名が Arius.class の場合は、Arius と入力します。
6. 保存して閉じるをクリックします。

6.4.4.2 Java プログラムが他のファイルにアクセスできるようにする設定

Java プログラムが Java ライブラリといったプログラムスケジュールサービスマシン上のファイルにアクセスできるように設定することができます。

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアに移動します。
2. プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server 上のファイルへのアクセスを付与する Java プログラムオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **プログラムパラメータ** をクリックします。
5. **クラスパス** ボックスに、プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server に保存されている、必要な Java ライブラリファイルそれぞれの完全パスを入力します。
パスは、ご使用のオペレーティングシステムのクラスパス区切り記号で区切ります。たとえば、パスを区切るために、Windows の場合はセミコロンを、Unix の場合はコロンを使用します。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

6.4.5 プログラムオブジェクトのユーザアカウントの指定

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. ユーザアカウントを指定する実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. **デフォルト設定** ダイアログボックスで、ナビゲーション一覧の **プログラムのログオン** をクリックします。
5. **ユーザ名** ボックスと **パスワード** ボックスに、プログラムを実行するときのアカウントの認証情報を入力します。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

6.5 オブジェクトパッケージ管理

6.5.1 オブジェクトパッケージ

オブジェクトパッケージは、(スケジュールが可能なフォルダのように) BI プラットフォームの独立したオブジェクトとして機能します。オブジェクトパッケージは、プラットフォーム内のレポートとプログラムオブジェクトの任意の組合せから構成されます。レポートのオブジェクトパッケージでは、ユーザはレポート間で同期されたデータを表示することができます。

オブジェクトパッケージは、複数のコンポーネントオブジェクトで構成されます。複数の (コンポーネント) オブジェクトを 1 つのオブジェクトパッケージにまとめると、それらのオブジェクトを同時にスケジュールすることができます。ただし、コンポーネントオブジェクトは、他のオブジェクトよりも設定オプションに制限があります。またコンポーネントオブジェクトは、CMC の **[フォルダ]** 領域のオブジェクトのリストには表示されません。コンポーネントオブジェクトを表示するには、そのオブジェクトパッケージを開く必要があります。

BI プラットフォームでは、オブジェクトパッケージを実行するたびに、オブジェクトパッケージインスタンスが作成されます。オブジェクトパッケージインスタンスには、パッケージの各コンポーネントオブジェクトの個々のインスタンスが含まれています。個々のインスタンスは、コンポーネントオブジェクトではなく、オブジェクトパッケージインスタンスと連携しています。オブジェクトパッケージインスタンス内にあるハイパーリンクされたレポートインスタンスの場合、ハイパーリンクは、同じオブジェクトパッケージインスタンス内にある他のレポートインスタンスをポイントします。

たとえば、オブジェクトパッケージを実行し、インスタンスを作成した後に、オブジェクトパッケージからレポートオブジェクトを削除しても、既存のオブジェクトパッケージインスタンスは変更されません。削除したレポートオブジェクトのインスタンスは含まれたままです。次にオブジェクトパッケージを実行してオブジェクトパッケージインスタンスを作成するときには、削除したレポートオブジェクトのインスタンスは作成されません。

非プラットフォームオブジェクト (Microsoft Excel、Microsoft Word、Adobe Acrobat、テキスト、リッチテキスト、Microsoft PowerPoint、ハイパーリンクされたオブジェクトなど) はオブジェクトパッケージに追加できません。

関連情報

[ハイパーリンクを使用したレポートでの作業 \[45 ページ\]](#)

6.5.2 オブジェクトパッケージの作成

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. オブジェクトパッケージを作成するフォルダを見つけて選択します。
3. **管理** > **新規** > **オブジェクトパッケージ** の順にクリックします。
4. **オブジェクトパッケージ** ダイアログボックスに、オブジェクトパッケージのタイトル、説明、およびキーワードを入力します。
5. **OK** をクリックします。

作成されたパッケージにコンポーネントオブジェクトを追加できます。

6.5.3 オブジェクトパッケージへのコンポーネントオブジェクトの追加

CMC では、オブジェクトパッケージを作成した後で、オブジェクトパッケージに対して、レポートおよびプログラムコンポーネントオブジェクトの追加や、新規オブジェクトまたは既存のオブジェクトのコピーの追加が可能なほか、オブジェクトパッケージへのオブジェクトのコピー (実際のオブジェクトではない) の移動、オブジェクトパッケージ間でのオブジェクトのコピーの移動が必要になります。

オブジェクトをオブジェクトパッケージにコピーすると、コンポーネントオブジェクトには元のオブジェクトの設定が保持されます。オブジェクトパッケージ内にオブジェクトのコピーを作成すると、コンポーネントオブジェクトと元のオブジェクトは別のエンティティになります。一方のオブジェクトを変更しても、他方のオブジェクトには影響しません。

6.5.3.1 オブジェクトパッケージへのコンポーネントオブジェクトの追加

パッケージをスケジュールするには、オブジェクトパッケージ内の各オブジェクトコンポーネントに対するスケジュール権限が必要です。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。

2. コンポーネントオブジェクトを追加するオブジェクトパッケージをダブルクリックします。
オブジェクトパッケージのコンテンツが、詳細パネルに表示されます。
3. 追加するオブジェクトに応じて、**管理** > **追加** > **ローカルドキュメント** または **プログラムファイル** を選択します。
4. **参照** をクリックし、追加するコンポーネントオブジェクトを見つけて選択します。
5. 必要に応じ、プロパティを設定します。
たとえば、プログラムオブジェクトを追加する場合は、**実行ファイル**、**Java**、または **スクリプト** を選択してプログラムの種類を設定します。
6. **OK** をクリックします。

6.5.4 オブジェクトパッケージとオブジェクトの設定

オブジェクトパッケージを使用すると、同様のスケジュール要件を持つ複数のオブジェクトを同時にスケジュールできるため、時間を節約できます。結果として、一部のパラメータはオブジェクトパッケージレベルで設定し、また別の一部はオブジェクトレベル、つまりパッケージ内の個々のオブジェクトに対して設定することになります。

オブジェクトパッケージ内のオブジェクトは、パッケージ外に存在するオブジェクトのコピーであるため、実行した変更内容は、パッケージ外のオブジェクトには反映されません。

たとえば、オブジェクトパッケージの出力先を指定するの必要はありますが、パッケージ内の個々のオブジェクトに対して出力先を指定することはできません。BI プラットフォームでオブジェクトパッケージが実行されると、そのオブジェクトパッケージに対して指定した出力先に出カインスタンスが保存されます。

6.5.4.1 オブジェクトパッケージのコンポーネントエラーオプションの設定

実行時にコンポーネントエラーがオブジェクトパッケージに与える影響の程度を指定することができます。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアを表示します。
2. コンポーネントエラーオプションを設定するオブジェクトパッケージを見つけて選択します。
3. **管理** > **デフォルト設定** を選択します。
4. ナビゲーション一覧で **[コンポーネントのエラー]** をクリックします。
5. **スケジュールされたパッケージは個々のコンポーネントのエラーのため失敗します** チェックボックスをオンまたはオフにします。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

6.5.5 認証およびオブジェクトパッケージ

オブジェクトパッケージは、Enterprise とデータベースにおける認証処理を簡便にします。

Enterprise 認証を 1 回入力するだけで、コンポーネントオブジェクトが含まれているオブジェクトパッケージをスケジュールすることができます。オブジェクトパッケージ内の各オブジェクトに対するスケジュール権限が必要です。スケジュール権限のな

いコンポーネントオブジェクトが含まれるオブジェクトパッケージをスケジュールしようとする、コンポーネントインスタンスが失敗します。

データベース認証では、オブジェクトパッケージ内の各レポートコンポーネントオブジェクトに対し、データベースログオン情報を指定する必要があります。レポートをオブジェクトパッケージにコピーした場合は、元のレポートのデータベースログオン情報が最初に継承されています。

7 オブジェクトのスケジュール

7.1 カレンダー

カレンダーとは、スケジュールされたジョブの実行日をカスタマイズしたリストです。カレンダーがジョブに適用されている場合、BIプラットフォームではカレンダーで指定された日付に従ってジョブが実行されます。

カレンダーでは、標準のスケジュールオプションよりも複雑な処理スケジュールを作成することができます。カレンダーは、レポートオブジェクト、プログラムオブジェクト、およびオブジェクトパッケージを含むスケジュール可能なすべてのオブジェクトに適用可能です。プラットフォームで定義できるカレンダー数に制限はありません。

カレンダーは、不規則なスケジュールを設定する場合や、一連の定期的なスケジュール日付を提示してそこから日付を選択する場合に有用です。カレンダーを使用することで、このような複雑な定期的ジョブについて、定期的なスケジュール日付に固有のスケジュール日付を組み合わせた、より複雑な処理スケジュールを作成することができます。たとえば、自国の法定休日を除いて、営業日には毎日レポートオブジェクトを実行する場合、レポートオブジェクトを実行しない非実行日として指定した休日を含むカレンダーを作成することができます。プラットフォームでは、実行日にのみレポートが生成されます（休日には生成されません）。

7.1.1 カレンダー形式

表 12:

カレンダー形式のオプション	説明
年単位	1 年間のカレンダーの実行日が表示されます。 表示される年を変更するには、 前の年 または 次の年 をクリックします。 年単位 形式を使用して日付を追加するには、追加する日、曜日ヘッダ、または週の行ヘッダをクリックします。
四半期単位	現在の四半期カレンダーの実行日が表示されます。 表示される四半期を変更するには、 前の四半期 または 次の四半期 をクリックします。 四半期単位 形式を使用して日付を追加するには、追加する日、曜日ヘッダ、または週の行ヘッダをクリックします。
月単位	現在の月カレンダーの実行日が表示されます。 表示される月を変更するには、 前の月 または 次の月 をクリックします。 月単位 形式を使用して日付を追加するには、追加する日、曜日ヘッダ、または週の行ヘッダをクリックします。

7.1.2 カレンダへのアクセス権

デフォルトで、カレンダは現在のセキュリティ設定に基づき、ユーザの親フォルダから権限が継承されますが、カレンダアクセス権をユーザおよびユーザグループに対して許可または拒否することができます。

カレンダへのアクセス権の一般的な用途は以下のとおりです。

- 特定のグループに適用されないカレンダを非表示にします。ユーザは、表示権限を持つカレンダのみを表示します。
- 特定の従業員または部署に対して、利用可能な固有の日付セットを作成します。たとえば、財務チームが使用する一連の財務記録日は、他の部署には関係ないでしょう。

アクセス権の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“アクセス権の設定”の章を参照してください。

7.1.3 カレンダの作成

新しいカレンダを作成するためのテンプレートに使用するカレンダを作成すると便利です。このようなテンプレートカレンダは、必要に応じてコピーし、変更することができます。たとえば、週末と会社の休日を除くすべての日付を実行日とした、デフォルトの平日カレンダを作成することができます。

1. CMC の **カレンダ** 管理エリアを表示します。
2. **管理** > **新規** > **新しいカレンダ** の順に選択します。
3. カレンダの名前と説明を入力し、**OK** をクリックします。

カレンダがシステムに追加され、**日付**タブでカレンダに実行日を追加することができます。

関連情報

[カレンダへの日付の追加 \[65 ページ\]](#)

7.1.3.1 カレンダへの日付の追加

カレンダを作成後、日付をカレンダに追加する前に年単位、四半期単位、または月単位の形式で表示することができます。また、日別または曜日別に定期的な日付を指定することができます。

既存のカレンダを変更する場合は、システム内で現在スケジュールされているすべてのインスタンスが BI プラットフォームによってチェックされ、カレンダを使用しているすべてのオブジェクトは、改定された日付スケジュールに従って実行されるように自動的に更新されます。

1. CMC の **カレンダ** 管理エリアを表示します。
2. 日付を追加するカレンダを選択します。
3. **アクション** > **日付の選択** を選択します。

4. [年単位](#)、[四半期単位](#)、または[月単位](#)カレンダー形式を選択します。
5. 定期的な日付のカレンダーを作成するには、[日別](#)または[曜日別](#)を選択します。
6. カレンダーを実行する日を選択します。

実行日を削除するには、その日をクリックします。実行日として、週または月のすべての平日を選択するには、行ヘッダまたは列ヘッダをクリックします。

7. 作業が完了したら、[\[保存\]](#)をクリックします。

7.1.3.1.1 特定の実行日

特定の日付をカレンダーに追加する場合は、以下の形式から選択します。

表 13:

日付形式	説明
年単位	1年間全体の実行スケジュールが表示されます。
四半期単位	現在の四半期の実行日が表示されます。
月単位	現在の月の実行日が表示されます。

これら 3 つの形式では、[戻る](#)ボタンおよび[次へ](#)ボタンをクリックして、表示される期間の範囲を変更することができます。

追加する日をクリックすることで、任意のカレンダー形式に特定の日付を追加できます。週全体を追加する場合は、その週の行ヘッダの [>](#) をクリックします。ある月の特定の曜日を追加するには、その曜日をクリックします。

2008 - 2009

前の年 次の年

特定日の追加: 日別 曜日別

表示: 年単位 四半期単位 月単位

下の日付をクリックし、実行日を追加または削除してください。

ヘッダーをクリックして特定の曜日の、または左側の行ヘッダーをクリックしてすべての曜日の選択/非選択を切り替えてください。

7月 2008							8月 2008							9月 2008									
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土			
>			1	2	3	4	5	>					1	2	>	1	2	3	4	5	6		
>	6	7	8	9	10	11	12	>	3	4	5	6	7	8	9	>	7	8	9	10	11	12	13
>	13	14	15	16	17	18	19	>	10	11	12	13	14	15	16	>	14	15	16	17	18	19	20
>	20	21	22	23	24	25	26	>	17	18	19	20	21	22	23	>	21	22	23	24	25	26	27
>	27	28	29	30	31			>	24	25	26	27	28	29	30	>	28	29	30				
								>	31														

10月 2008							11月 2008							12月 2008									
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土			
>				1	2	3	4	>					1	>		1	2	3	4	5	6		
>	5	6	7	8	9	10	11	>	2	3	4	5	6	7	8	>	7	8	9	10	11	12	13
>	12	13	14	15	16	17	18	>	9	10	11	12	13	14	15	>	14	15	16	17	18	19	20
>	19	20	21	22	23	24	25	>	16	17	18	19	20	21	22	>	21	22	23	24	25	26	27
>	26	27	28	29	30	31		>	23	24	25	26	27	28	29	>	28	29	30	31			
								>	30														

凡例

8 非実行日

8 元の実行日

8 新しい実行日

8 削除した実行日

保存

保存して閉じる

リセット

たとえば、ある会社が、日単位または週単位の設定では定義できない不規則なスケジュールで製品を出荷している場合は、必要な日付の出荷日カレンダーを作成することができます。これにより、出荷部門は、各出荷日の終わりに実行されるレポートをスケジュールすることにより、出荷を済ませるたびに在庫を確認できます。

関連情報

[定期的な実行日 \[67 ページ\]](#)

7.1.3.1.2 定期的な実行日

カレンダーでは、さまざまな定期的な実行パターンを1つのジョブに組み合わせて、定期的なパターンに従わない日付にインスタンスを実行するよう設定することができます。

年単位、四半期単位、および月単位が、定期的な日付をカレンダーに追加するためのデフォルトの形式です。形式に対する既存の実行日を表示するには、形式を選択します。

定期的な日付をカレンダーに追加する場合、日別または曜日別オプションを使用して、追加する日付を入力します。たとえば、毎月の月初の4日間と、毎月の第2および第4金曜日にレポートオブジェクトをスケジュールするには、まず、新しいカレンダーオブジェクトを作成してから日別を選択し、月初の4日間をカレンダーに追加します。このカレンダーを更新すると、新しい実行日が設定された年単位形式が表示されます。

特定日の追加（日別）

特定日の追加：日別 曜日別

下の日付をクリックし、月単位の定期実行日を追加してください。

開始日：☒

2008/05/26



終了日：☐

2009/05/26

日付

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

凡例

8 非実行日

8 新しい実行日

このカレンダーに第 2 および第 4 金曜日を追加する場合は、**曜日別**で定期的な日付を追加することにして、第 2 および第 4 金曜日を選択します。

特定日の追加（曜日別）

特定日の追加： ☐ 日別 ☒ 曜日別 表示： ☐ 年単位 ☐ 四半期単位 ☐ 月単位

下の曜日をクリックし、週単位の定期実行曜日を追加してください。

ヘッダーをクリックして特定の曜日の、または左側の行ヘッダーをクリックしてすべての曜日の選択/非選択を切り替えてください。

開始日：☒

2008/05/26



終了日：☐

2009/05/26

凡例

☐ 非実行日

☒ 新しい実行日

曜日	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
日	日	日	日	日	日	日	日
>	第	第	第	第	第	第	第
>	第	第	第	第	第	第	第
>	第	第	第	第	第	第	第
>	第	第	第	第	第	第	第
>	最	最	最	最	最	最	最

保存

保存して閉じる

キャンセル

7.1.4 カレンダの削除

カレンダを削除すると、BI プラットフォームで、削除されたカレンダによってスケジュールされたオブジェクトがもう一度実行されます。

カレンダを削除する前に、そのカレンダが適用されていたオブジェクトのスケジュール情報を確認します。必要なオブジェクトを引き続き実行することもできます。必要な場合は、オブジェクトに対して別のカレンダまたは別の定期スケジュールパターンを選択できます。

1. CMC の [\[カレンダ\]](#) 管理エリアを表示します。

2. 削除するカレンダを選択します。

複数のカレンダを選択するには、☐ **Ctrl** または ☐ **Shift** キーを押しながら各カレンダをクリックします。

3. **管理** > **削除** を順に選択し、**OK** をクリックします。

関連情報

[オブジェクトのスケジュール \[70 ページ\]](#)

7.2 スケジュールプロセスおよびオプション

スケジュールは、指定した時間に自動的にオブジェクトが実行されるように設定するプロセスです。

オブジェクトをスケジュールする場合は、定期スケジュールパターン、およびそのオブジェクトを実行する時刻と頻度を決定するその他のパラメータを選択します。オブジェクトをスケジュールすると、BI プラットフォームによってスケジュールされたインスタンスが作成されます。スケジュールされたインスタンスは、オブジェクトの [\[履歴\]](#) ダイアログボックスに ([\[定期\]](#) または [\[待機\]](#) というステータスで) 表示されますが、このインスタンスにはオブジェクトとスケジュール情報のみが含まれ、データは含まれません。

プラットフォームによってオブジェクトが実行されると、レポートまたはプログラムインスタンスなどのオブジェクトの出カインスタンスが作成されます。レポートインスタンスには、データベースから取得した実際のデータが含まれます。プログラムインスタンスは、プログラムオブジェクトの実行時に生成された標準出力および標準エラーを含むテキストファイルです。オブジェクトの [\[履歴\]](#) ダイアログボックスには、出カインスタンスも ([\[成功\]](#) または [\[失敗\]](#) というステータスで) 表示されます。

ユーザは BI ラウンチパッドまたはカスタム Web アプリケーションなどの Web ベースのクライアントソフトウェアで、オブジェクトのスケジュールや実行、レポートの表示を行います。適切なアクセス権限を持つ管理者およびユーザは、オブジェクトの管理やスケジュール、レポートの表示に CMC を使用します。

関連情報

[定期的なパターンの選択 \[170 ページ\]](#)

7.2.1 スケジュールオプションの設定

7.2.1.1 オブジェクトのスケジュール

オブジェクトのデフォルトのスケジュール設定をすばやく変更するには、[スケジュール](#) ダイアログボックスの [デフォルト設定](#) をクリックし、スケジュールオプションを設定して、[保存](#) をクリックします。

1. CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#) を選択します。

[\[スケジュール\]](#) ダイアログボックスが表示され、オブジェクトのデフォルト設定が示されます。

4. インスタンスのタイトルを入力します。

5. [\[繰り返し\]](#) をクリックし、定期的なスケジュールパターンを選択します。
たとえば、1 週間に 1 回オブジェクトを実行するには、[週単位](#)を選択します。
6. 実行オプションおよびスケジュールパラメータを指定します。
たとえば、[\[月曜日\]](#)、[\[水曜日\]](#)、および [\[金曜日\]](#) を選択します。
7. [\[スケジュール\]](#) をクリックします。

BI プラットフォームにより、スケジュールされたインスタンスが作成され、指定したスケジュールに従ってそのインスタンスが実行されます。スケジュールされたインスタンスは、オブジェクトの [\[履歴\]](#) ダイアログボックスに表示されます。

関連情報

[定期スケジュールパターン \[72 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[73 ページ\]](#)

7.2.1.2 個々のユーザに対するオブジェクトのスケジュール

[対象指定](#) オプションを使用して、レポートオブジェクトをスケジュールし、個々のユーザに合わせたデータを使用したレポートを生成できます。

個々のユーザに合わせた、次のタイプのオブジェクトをスケジュールできます。

- ビジネスビュー、ユニバース、または SAP BEx クエリに基づく Crystal レポート
- ユニバースを使用する Web Intelligence ドキュメント

BI プラットフォームはオブジェクトを実行して、レポートまたはドキュメントの複数のインスタンスを生成します。各インスタンスには、個々のユーザだけに関係のあるデータが含まれます。

例

個々の営業担当者向けの営業情報のスケジュール

営業レポートをスケジュールする場合は、[対象指定](#) ダイアログボックスで各営業担当者のユーザ名を入力します。スケジュールされた時刻になると、レポートオブジェクトが実行されて、個々のレポートインスタンスが生成されます。各インスタンスには、1 人の営業担当者を対象にした営業情報が含まれます。

7.2.1.2.1 個々のユーザに対するレポートオブジェクトのスケジュール

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするレポートオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#) を選択します。
4. [\[対象指定\]](#) をクリックします。
5. [\[現在のユーザだけを対象にスケジュールする\]](#) または [\[スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する\]](#) を選択します。

6. [スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する](#)を選択した場合、レポートインスタンスを生成するユーザまたはユーザグループを見つけて選択し、> をクリックして [選択リスト](#) に追加します。
- [選択リスト](#) からユーザまたはグループを削除するには、ユーザまたはグループを選択し、< をクリックします。
7. 他のスケジュールオプションを指定し、[\[スケジュール\]](#) をクリックします。

関連情報

[定期スケジュールパターン \[72 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[73 ページ\]](#)

7.2.1.3 定期スケジュールパターン

まず定期的なスケジュールパターンを選択し、次に定期スケジュールパターンの実行オプションを選択します。

表 14:

定期スケジュールパターン	説明
今すぐ	ユーザが [スケジュール] をクリックするとオブジェクトが実行されます。
1 回	オブジェクトは 1 回だけ実行されます。実行時間、開始日、終了日を指定します。
時間単位	オブジェクトは時間ごとに実行されます。オブジェクトの実行頻度、実行時間、開始日、終了日を指定します。
日単位	オブジェクトは <N> 日ごとに 1 回だけ実行されます。オブジェクトの実行頻度、実行時間、開始日、終了日を指定します。
週単位	オブジェクトは毎週実行されます。実行日、実行時間、開始日、終了日を指定します。
月単位	オブジェクトは <N> カ月ごとに実行されます。オブジェクトの実行頻度、実行時間、開始日、終了日を指定します。
N 日	オブジェクトは毎月 <N> 日に実行されます。実行する月の日、実行時間、開始日、終了日を指定します。
第 1 月曜日	オブジェクトは毎月第 1 月曜日に実行されます。実行時間、開始日、終了日を指定します。
月末日	オブジェクトは毎月末日に実行されます。開始日と終了日を指定します。
第 N 週の X 日	オブジェクトは各月特定の週の特定の曜日に実行されます。実行する週および曜日、実行時間、開始日、終了日を指定します。
カレンダー	オブジェクトはカレンダーで指定された日に実行されます。

関連情報

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[73 ページ\]](#)

7.2.1.3.1 定期的なスケジュールパターンの実行オプション

まず定期的なスケジュールパターンを選択し、次にパターンの実行オプションを選択します。オブジェクトによって使用できる実行オプションが異なります。変数が含まれる実行オプションを選択すると、BI プラットフォームに変数のデフォルト値が表示されます。デフォルト値は必要に応じて変更できます。

表 15:

定期的なスケジュールパターンの実行オプション	説明
開始日/時刻	<p>これらの一覧は、今すぐおよびカレンダー以外のすべての定期的なスケジュールパターンで表示されます。</p> <p>オブジェクトの開始時間 (時、分、および午前/午後) および日付を選択します。</p> <p>プラットフォームでは、開始時間を過ぎると、指定されたスケジュールに従って可能な限り早くオブジェクトが実行されます。デフォルトは、現在の日時です。たとえば、3 カ月後の開始時間を指定すると、プラットフォームでは、他のすべての基準が満たされている場合でも、その開始日が経過するまでオブジェクトは実行されません。開始日後に、プラットフォームで指定された時間にレポートが実行されます。</p>
終了日/時刻	<p>これらの一覧は、今すぐおよびカレンダー以外のすべての定期的なスケジュールパターンで表示されます。</p> <p>オブジェクトの終了時間 (時、分、および午前/午後) および日付を選択します。</p> <p>終了時間を過ぎると、プラットフォームでは、オブジェクトがそれ以上実行されません。デフォルトは遠い将来における現在の時刻と日付で、それまでは何度もオブジェクトが実行されます。</p>
時間 (N) および分 (X)	<p>これらの一覧は、時間単位定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>オブジェクトの実行間隔 (時間単位および分単位) を選択します。</p> <p><N> または <X> の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎時間レポートが実行されます。</p>

定期的なスケジュールパターンの実行オプション	説明
日数 (N)	<p>このボックスは、日単位 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>オブジェクトの実行間隔 (日単位) を入力します。〈N〉の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎日レポートが実行されます。</p>
月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日、および日曜日	<p>これらのチェックボックスは、週単位 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>ジョブを実行する週の各曜日の横のチェックボックスを選択します。</p>
月 (N)	<p>この一覧は、月単位 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>オブジェクトの実行間隔 (月単位) を入力します。〈N〉の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎月レポートが実行されます。</p>
日 (N)	<p>このボックスは、N 日 定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。</p> <p>ジョブを実行する月の日を選択します。〈N〉の値を選択しない場合、プラットフォームでは毎日レポートが実行されます。</p>
週 (N) および日数 (X)	<p>これらの一覧は、定期的なスケジュールパターン第 N 週の X 曜日を選択すると表示されます。</p> <p>オブジェクトを実行する月の週および週の曜日を選択します。〈N〉または 〈X〉の値を入力しない場合、プラットフォームでは毎日レポートが実行されます。</p>

7.2.1.4 スケジュールされたジョブの成功または失敗の通知

BI プラットフォームでは、スケジュールされたオブジェクトインスタンスが成功または失敗したときに、管理者、ユーザ、およびユーザグループに通知することができます。

監査通知または電子メール通知では、複数の通知方法を組み合わせることが可能なため、成功したインスタンスと失敗したインスタンスで異なる通知オプションを選択して送信することができます。

たとえば、毎日実行するレポートが多数あるとします。管理者は、各インスタンスが正常に実行されたことを確認し、新しいレポートが作成されたことを特定のユーザに電子メールで知らせる必要があります。多数のレポートがある場合、手動でレポートを確認してユーザに通知する作業には非常に時間がかかります。レポートが正常に実行されなかったときには管理者に、新しいレポートインスタンスが正常に実行されたときにはユーザに通知が自動送信されるよう、各オブジェクトのプラットフォームのオプションを設定することができます。

7.2.1.4.1 スケジュールされたインスタンスの成功または失敗の決定

オブジェクトをスケジュールすると、スケジュールされたインスタンスは成功するか失敗するかのいずれかです。インスタンスが成功する条件と失敗する条件は、オブジェクトの種類によって決まります。

レポートオブジェクトと Web Intelligence ドキュメントの場合、オブジェクトの処理中またはデータベースへのアクセス中にエラーが発生しない場合は、レポートインスタンスまたはドキュメントオブジェクトインスタンスの実行は成功となります。ユーザの指定したログオン情報が間違っていると、インスタンスは失敗する可能性があります。

プログラムオブジェクトの場合、成功するためには BI プラットフォームによって実行される必要があります。プラットフォームによって実行されない場合、インスタンスは失敗と見なされます。プラットフォームによって実行されたものの、本来のタスクがすべて実行されるとは限らない場合があります。この場合、プログラムオブジェクトが実行された以上、そのインスタンスは、成功と見なされます。プラットフォームは、プログラムオブジェクトの内容に応じて問題を監視しているわけではありません。

オブジェクトパッケージの場合、そのコンポーネントのどれかが失敗すると、パッケージ全体が失敗する可能性があります。オブジェクトパッケージ内の個々のオブジェクトに対して、通知、データベースログオン、フィルタ、形式、印刷、パラメータ、サーバグループ、およびアラートなどのスケジュールオプションを設定することができます。

パッケージ内のオブジェクトが失敗した場合にオブジェクトパッケージが失敗することを防ぐには、**管理 > デフォルト設定**を選択して、**[コンポーネントのエラー]**をクリックし、**[スケジュールされたパッケージは個々のコンポーネントのエラーのため失敗します]**チェックボックスをオフにします。

オブジェクトパッケージには監査通知や電子メール通知は設定できませんが、イベントに連動するオブジェクトパッケージをスケジュールして、オブジェクトパッケージに含まれる個々のオブジェクトに通知を設定できます。

関連情報

[スケジュールベースのイベント \[114 ページ\]](#)

7.2.1.4.2 通知オプション

オブジェクトごとに通知オプションを選択し、条件によって異なる種類の通知を送信します。

オブジェクトパッケージには、イベント通知しか設定できません。イベント通知は、オブジェクトパッケージの成功または失敗に基づいてイベントを発生させます。より一般的な観点からオブジェクトの失敗と成功を監視するには、BI プラットフォームの監査機能を使用します。

通知が失敗すると、オブジェクトインスタンスも失敗します。たとえば、電子メール通知で無効な電子メールアドレスにメッセージが送信されると、通知が失敗し、オブジェクト履歴には、オブジェクトインスタンスの失敗として記録されます。

次の通知オプションがあります。

表 16:

通知オプション	説明
監査通知	<p>監査通知を使用するには、監査データベースを設定し、サーバの監査を有効にする必要があります。監査機能を使用して BI プラットフォームシステムを監視する場合は、監査通知を使用できます。監査データベースの設定と監査機能の有効化の詳細については、SAP ヘルプポータル (http://help.sap.com) で入手可能な SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。</p> <p>監査通知を選択すると、スケジュールされるオブジェクトの情報が監査データベースに書き込まれます。監査データベースへの通知は、ジョブが正常に実行されたとき、実行が失敗したとき、またはその両方の場合に送信できます。</p>
電子メール通知	<p>オブジェクトインスタンスの成功または失敗に関する電子メール通知を送信することができます。電子メールの送信者と受信者、およびインスタンスが失敗したときと成功したときのどちらの場合に通知を送信するかを選択します。たとえば、レポートが失敗した場合には、管理者に電子メールを送信することができます。また、レポートが成功した場合には、レポートが利用可能であることを知らせる電子メールをユーザに自動的に送信することができます。</p> <p>電子メール通知を有効にするには、Job Server で <i>SMTP</i> の出力先を有効にし、設定が行われている必要があります。詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。</p>

スケジュールされたオブジェクトの成功または失敗に関する通知は、アラート通知とは異なります。アラート通知は、レポートの設計に組み込まれている必要があります。たとえば、レポートの特定の値が 1,000,000 ドルを超える場合に、アラート通知によって電子メールが送られてくるようにすることができます。この場合、通知はレポートのコンテンツには関係ありません。レポートオブジェクトインスタンスが失敗または成功したかということだけに関係があります。

7.2.1.4.3 インスタンスに対する成功または失敗の通知の設定

通知オプションが利用可能でも選択されていないときは、ラベルは "無効" となります。通知タイプが使用中の場合、ラベルは "有効" となります。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアに移動します。
2. 通知を設定するオブジェクトを選択します。
3. **アクション** > **スケジュール** を選択します。
4. ナビゲーション一覧で **[通知]** をクリックします。
5. 監査通知を使用するには、**[監査通知]** をクリックし、以下のアクションを実行します。
 - ジョブの成功時にレコードを監査データベースに送信する場合は、**ジョブの実行の成功**チェックボックスをオンにします。

- ジョブの失敗時にレコードを監査データベースに送信する場合は、**ジョブの実行の失敗**チェックボックスをオンにします。
- 6. 電子メール通知を使用するには、[**電子メール通知**] をクリックし、以下のアクションを実行します。
 - ジョブの成功時に電子メールを送信する場合は、**ジョブの実行の成功**チェックボックスをオンにします。
電子メールのコンテンツと受信者を指定する場合は、**ここで使用する値を設定する**を選択し、**差出人**と**宛先**ボックスに電子メールアドレスを入力し、件名を入力して、メッセージを入力します。複数のアドレスまたは配信リストの区切り文字には、セミコロン (;) を使用してください。
 - ジョブの失敗時に電子メールを送信する場合は、**ジョブの実行の失敗**チェックボックスをオンにします。
電子メールのコンテンツと受信者を指定する場合は、**ここで使用する値を設定する**を選択し、**差出人**と**宛先**ボックスに電子メールアドレスを入力し、件名を入力して、メッセージを入力します。複数のアドレスまたは配信リストの区切り文字には、セミコロン (;) を使用してください。

デフォルトで、通知はサーバのデフォルトの電子メール宛先に送信されます。

7.2.1.5 出力先の選択

BI プラットフォームがオブジェクトを実行すると、出力インスタンスはデフォルトで Output File Repository Server (FRS) に保存されます。オブジェクトまたはインスタンスを設定して、出力を別の出力先に送信することができます。

たとえば、電子メールで特定のユーザに出力を自動配布するようにオブジェクトを設定することができます。追加の出力先を選択すると、エンタープライズシステム内および使用しているシステム外の出力先にインスタンスを柔軟に配布することができます。

デフォルトの Output File Repository Server 以外の出力先を指定すると、BI プラットフォームで出力ファイルの一意のファイル名が生成されます。ファイル名には、ID、オブジェクトの名前またはタイトル、所有者、および日時の情報の組み合わせが使用されます。

セントラル管理コンソール (CMC) または BI ラウンチパッドでオブジェクトやインスタンスの出力先を選択できます。CMC を使用する場合は、ここで選択する値がラウンチパッドのデフォルトのスケジュール値になります。

実行後に印刷されるようにオブジェクトインスタンスを設定することができます。

関連情報

[デフォルトの Enterprise の場所へのオブジェクトのスケジュール \[89 ページ\]](#)

[ユーザの BI 受信ボックスに対するオブジェクトのスケジュール \[89 ページ\]](#)

[電子メールに対するオブジェクトのスケジュール \[90 ページ\]](#)

[ファイルの場所に対するオブジェクトのスケジュール \[92 ページ\]](#)

[FTP サーバへのオブジェクトのスケジュール \[91 ページ\]](#)

[Job Server の出力先の有効化または無効化 \[93 ページ\]](#)

7.2.1.5.1 パブリケーション出力先

スケジュールされたパブリケーションには、次の出力先が使用できます。

- デフォルトの *Enterprise* の場所
- BI 受信ボックス
- 電子メール
- FTP サーバ
- ファイルシステム
- SAP StreamWork (有効化かつ設定されている場合)

デフォルトでは、すべての出力先に対して [各ユーザにオブジェクトを配信] チェックボックスがオンになっています。ただし、場合によっては、各ユーザにオブジェクトを配信しないようにする場合もあります。たとえば、3 人の受信者が同一のパーソナライゼーション値を持っていると、パブリケーションインスタンスの同じデータが受信されます。[各ユーザにオブジェクトを配信] チェックボックスをオフにした場合は、1 つのパブリケーションインスタンスが生成され、それが 3 人の受信者すべてに配信されます。[各ユーザにオブジェクトを配信] チェックボックスをオンにした場合は、同じパブリケーションインスタンスが 3 回 (受信者ごとに 1 回ずつ) 配信されます。

デフォルトの *Enterprise* の場所

この場所にパブリケーションを送信する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。

表 17:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
それを作成したフォルダ	<ul style="list-style-type: none">• すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ)• パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) ファイルとしてパッケージ化する	Output File Repository Server 履歴のインスタンスはデフォルトの Enterprise サーバに保存されますが、他の出力先には保存されません。

BI 受信ボックス

表 18:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
各受信者の BI 受信ボックス	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する 個別のユーザにオブジェクトを配信するユーザをすばやく見つけるには、[タイトルの検索] ボックスで受信者のユーザ名、フルネーム、または電子メールアドレスを検索できます。 デフォルトのファイル名を使用するか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。 パブリケーションをショートカットまたはコピーとして送信する パブリケーションを受信者の BI 受信ボックスにショートカットとして送信する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。パブリケーションのショートカットを BI 受信ボックスに送信するには、出力先として、[BI 受信ボックス] および [デフォルトの Enterprise の場所] の両方を選択します。 すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 指定された BI 受信ボックス

電子メール

レポートインスタンスをスケジュールするかこの出力先に送信するには、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) の出力先を有効にして設定する必要があります。

表 19:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
電子メールで各受信者に	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する 個別のユーザにオブジェクトを配信する (必須) 差出人ボックスに自分の電子メールアドレスを入力する。 電子メールアドレスを入力しない場合、BI プラットフォームでは、公開者のアカウントに関連付けられている電子メールアドレスが使用されます。公開者のアカウントに電子メールアドレスがない場合、プラットフォームでは、Adaptive Job Server の電子メールアドレスが使用されます。[差出人] ボックス、公開者のアカウント、または Adaptive Job Server のいずれにも電子メールアドレスがない場合、パブリケーションは失敗します。 宛先ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレスのプレースホルダを追加する CC ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレスのプレースホルダを追加する BCC ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレスのプレースホルダを追加する [件名] ボックスに件名を入力するか、プレースホルダを追加する [メッセージ] ボックスに、パブリケーションと一緒に配信する情報を入力するか、プレースホルダを追加して電子メール本文に動的コンテンツドキュメントを埋め込む ソースドキュメントのインスタンスを電子メールに添付する デフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 指定された電子メール受信者

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
	<p>ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	

FTP サーバ

パブリケーションを **FTP サーバ** 出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、**各ユーザーにオブジェクトを配信** チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。[各ユーザーにオブジェクトを配信] をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するプレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

表 20:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
<p>FTP サーバ</p> <p>(ホストボックスに、FTP サーバの場所を入力する必要があります。入力しないと、プラットフォームは、Adaptive Job Server 用に設定された FTP サーバを使用します)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する ポート番号、ユーザー名とパスワード、およびアカウントを入力する ディレクトリ名を入力する。 デフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。 すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 選択された FTP サーバ

ファイルシステム

パブリケーションをファイルシステム出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、各ユーザにオブジェクトを配信チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。各ユーザにオブジェクトを配信をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するプレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

表 21:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
ファイルシステムのディレクトリ (パブリケーションのディレクトリを入力する必要があります)。	<ul style="list-style-type: none">出力先のデフォルト設定を使用するファイルの場所にアクセスするためのユーザ名とパスワードを入力する個別のユーザにオブジェクトを配信するデフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ)パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する	<ul style="list-style-type: none">Output File Repository Server選択されたファイルの場所

SAP StreamWork

この出力先は、BI プラットフォームでコラボレーションが設定されて有効化されている場合に使用できます。

表 22:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
他のユーザとのコラボレーションのために送信されます。	<ul style="list-style-type: none"> Crystal レポートおよび Web Intelligence ドキュメントのコラボレーションアクティビティへの送信またはスケジュール フィードの監視 コメントおよびディスカッションを追跡するドキュメントおよびインスタンスのフォロー ドキュメントおよびインスタンスへのコメントの投稿、およびパブリックドキュメントに関して他のユーザによって投稿されたコメントの表示 	次のコラボレーションアプリケーションのいずれか: <ul style="list-style-type: none"> SAP StreamWork

7.2.1.5.2 出力先ごとのオプション

BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) の[サーバ](#)エリアで、デフォルトの Adaptive Job Server の設定を変更できます。

詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

デフォルトの **Enterprise** の場所のオプション

表 23:

オプション	説明
出力先	<p>デフォルトの Enterprise の場所</p> <p>スケジュールされたジョブは、Output File Repository Server (FRS) で実行されます。この出力先では、追加のオプションを設定する必要はありません。履歴のインスタンスはデフォルトの Enterprise サーバに保存されますが、他の出力先には保存されません。</p>

BI 受信ボックスのオプション

表 24:

オプション	説明
出力先	BI 受信ボックス
履歴にインスタンスを保持する	<p>このチェックボックスをオンにすると、オブジェクトの履歴にこのインスタンスのコピーが保持されます。このチェックボックスはデフォルトではオンになっています。</p> <p>BI プラットフォームでインスタンスを Output FRS から自動的に削除してサーバ上のインスタンス数を最小限に抑える場合は、このチェックボックスをオフにします。</p>
デフォルト設定を使用	<p>BI 受信ボックスのデフォルトの Adaptive Job Server 値を使用する場合にこのチェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトの Adaptive Job Server 値を使用しない場合はこのチェックボックスをオフにして、表示される出力先受信者オプションを設定します。</p>
[利用可能な受信者] および [選択した受信者]	[利用可能な受信者] リストで、インスタンスの送信先とするユーザまたはユーザグループを選択して、[>] をクリックして [選択した受信者] リストにユーザまたはユーザグループを追加します。
タイトルの検索 (利用可能な場合)	利用可能な受信者リストでユーザをすばやく見つけるには、タイトルの検索ボックスに受信者のユーザ名、フルネーム、または電子メールアドレスを入力します。
ターゲット名	<ul style="list-style-type: none"> 自動的に生成される名前をインスタンスのファイル名に使用する場合は、自動で生成された名前を使用するを選択します。 インスタンスのファイル名を選択するには、指定の名前を使用するを選択し、名前を入力するか、プレースホルダの追加リストからファイル名の変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、ユーザのフルネーム、およびファイル拡張子です。インスタンスファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、[ファイル拡張子を追加する] チェックボックスを選択します。ファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開けないことがあります。
送信者の名前	<ul style="list-style-type: none"> インスタンスへのショートカットを受信者に送信するには、[ショートカット] を選択します。 インスタンスのコピーを受信者に送信するには、[コピー] を選択します。

電子メールのオプション

表 25:

オプション	説明
出力先	電子メール

オプション	説明
履歴にインスタンスを保持する	<p>このチェックボックスをオンにすると、オブジェクトの履歴にこのインスタンスのコピーが保持されます。このチェックボックスはデフォルトではオンになっています。</p> <p>BI プラットフォームでインスタンスを Output FRS から自動的に削除してサーバ上のインスタンス数を最小限に抑える場合は、このチェックボックスをオフにします。</p>
デフォルト設定を使用	<p>電子メールのデフォルトの Adaptive Job Server 値を使用する場合にこのチェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトの Adaptive Job Server 値を使用しない場合はこのチェックボックスをオフにして、表示される出力先受信者オプションを設定します。</p>
開始日	<p>差出人の電子メールアドレスを入力するか、プレースホルダの追加リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、および ユーザのフルネームです。変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミicolon (;) で区切ります。</p> <p>システム設定によっては、このオプションを使用できない場合があります。</p>
終了日	<p>インスタンスを送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、プレースホルダの追加リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、および ユーザのフルネームです。変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミicolon (;) で区切ります。</p>
CC	<p>電子メールおよびインスタンスのコピーを送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、プレースホルダの追加リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、および ユーザのフルネームです。変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミicolon (;) で区切ります。</p>
BCC	<p>非公開受信者の電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、プレースホルダの追加リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、および ユーザのフルネームです。変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミicolon (;) で区切ります。</p>
件名	<p>電子メールの件名を入力するか、プレースホルダの追加リストから件名の変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、および ユーザのフルネームです。変数をクリックして追加します。</p>
メッセージ	<p>電子メール本文のメッセージを入力するか、プレースホルダの追加リストからメッセージの変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、ユーザのフルネーム、ビューア、および ドキュメント名です。変数をクリックして追加します。</p>
添付ファイルの追加	<p>インスタンスを含む電子メールに添付ファイルを追加する場合は、このチェックボックスをオンにします。</p>

オプション	説明
ファイル名	<ul style="list-style-type: none"> 自動的に生成される名前をインスタンスのファイル名に使用する場合は、自動で生成された名前を使用するを選択します。 インスタンスのファイル名を選択するには、指定の名前を使用するを選択し、名前を入力するか、ブレースホルダの追加リストからファイル名の変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、ユーザのフルネーム、およびファイル拡張子です。インスタンスファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、ファイル拡張子を追加するチェックボックスを選択します。ファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開けないことがあります。

FTP サーバのオプション

表 26:

オプション	説明
出力先	FTP サーバ
履歴にインスタンスを保持する	<p>このチェックボックスをオンにすると、オブジェクトの履歴にこのインスタンスのコピーが保持されます。このチェックボックスはデフォルトではオンになっています。</p> <p>BI プラットフォームでインスタンスを Output FRS から自動的に削除してサーバ上のインスタンス数を最小限に抑える場合は、このチェックボックスをオフにします。</p>
デフォルト設定を使用	<p>FTP サーバのデフォルトの Adaptive Job Server 値を使用する場合にこのチェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトの Adaptive Job Server 値を使用しない場合はこのチェックボックスをオフにして、表示される出力先受信者オプションを設定します。</p> <p>CMC の [サーバ] エリアで、値を変更できます。詳細については、<i>SAP BusinessObjects Business Intelligence</i> プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。</p>
ホスト	インスタンスを送信する FTP サーバホストコンピュータの IP アドレスを入力します。
ポート	インスタンスを送信する FTP サーバのポートを入力します。デフォルトは「21」です。
ユーザ名	FTP サーバにオブジェクトをアップロードするアクセス権限を持つユーザ名を入力します。
パスワード	FTP サーバへのアクセスに必要なパスワードを入力します。
アカウント	<p>FTP サーバへのアクセスに必要なアカウントを入力します。</p> <p>アカウントは標準の FTP プロトコルの一部ですが、実装されている場合はまれです。アカウントは、FTP サーバで必要な場合にのみ入力します。</p>
ディレクトリ	インスタンスを送信する FTP ディレクトリへのパスを入力します。

オプション	説明
ファイル名	<ul style="list-style-type: none"> 自動的に生成される名前をインスタンスのファイル名に使用する場合は、自動で生成された名前を使用するを選択します。 インスタンスのファイル名を選択するには、指定の名前を使用するを選択し、名前を入力するか、プレースホルダの追加リストからファイル名の変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、ユーザのフルネーム、ドキュメント名およびファイル拡張子です。インスタンスファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、ファイル拡張子を追加するチェックボックスを選択します。ファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開けないことがあります。

ファイルシステムのオプション

表 27:

オプション	説明
出力先	ファイルシステム
履歴にインスタンスを保持する	<p>このチェックボックスをオンにすると、オブジェクトの履歴にこのインスタンスのコピーが保持されます。このチェックボックスはデフォルトではオンになっています。</p> <p>BI プラットフォームでインスタンスを Output FRS から自動的に削除してサーバ上のインスタンス数を最小限に抑える場合は、このチェックボックスをオフにします。</p> <p>インスタンスは、イベントを監査するのに必要です。このチェックボックスは、スケジュールされたオブジェクトで監査が有効にされている場合は、無効にされます。</p>
デフォルト設定を使用	<p>ファイルシステムのデフォルトの Adaptive Job Server 値を使用する場合にこのチェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトの Adaptive Job Server 値を使用しない場合はこのチェックボックスをオフにして、表示される出力先受信者オプションを設定します。</p>
ユーザ名	<p>出力先ディレクトリにファイルを保存するアクセス権限を持つユーザ名を入力します。</p> <p>Windows のサーバにだけ、ユーザ名とパスワードを指定することができます。</p>
パスワード	<p>出力先ディレクトリへのアクセスに必要なユーザパスワードを入力します。</p> <p>Windows のサーバにだけ、ユーザ名とパスワードを指定することができます。</p>
ディレクトリ	<p>ローカルハードディスクの場所かマップされた場所へのパス、またはインスタンスを送信するディレクトリへの UNC パスを入力します。</p> <p>Web Intelligence ドキュメントをスケジュールしていて、変数 (インスタンスのタイトル、オーナー、日時、ユーザ名など) に基づいてフォルダを作成する場合は、プレースホルダを使用します。プレースホルダは、このボックスのテキストの後に挿入されます。</p>

オプション	説明
ファイル名	<ul style="list-style-type: none"> 自動的に生成される名前をインスタンスのファイル名に使用する場合は、自動で生成された名前を使用するを選択します。 インスタンスのファイル名を選択するには、指定の名前を使用するを選択し、名前を入力するか、プレースホルダの追加リストからファイル名の変数を選択します。使用可能な変数は、タイトル、ID、所有者、日時、(ユーザの) 電子メールアドレス、ユーザのフルネーム、ドキュメント名およびファイル拡張子です。インスタンスファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、ファイル拡張子を追加するチェックボックスを選択します。ファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開けないことがあります。

SAP StreamWork のオプション

SAP StreamWork 出力先は、BI プラットフォームでコラボレーションが有効化されて設定されている場合に使用できます。

表 28:

オプション	説明
出力先	<i>SAP StreamWork</i>
履歴にインスタンスを保持する	<p>このチェックボックスをオンにすると、オブジェクトの履歴にこのインスタンスのコピーが保持されます。このチェックボックスはデフォルトではオンになっています。</p> <p>BI プラットフォームでインスタンスを Output FRS から自動的に削除してサーバ上のインスタンス数を最小限に抑える場合は、このチェックボックスをオフにします。</p>
デフォルト設定を使用	<p>コラボレーションアプリケーション (SAP Jam または SAP StreamWork) のデフォルトの Adaptive Job Server 値を使用する場合にこのチェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトの Adaptive Job Server 値を使用しない場合はこのチェックボックスをオフにして、表示される出力先オプションを設定します。</p>
ファイル	このボックスにはファイル名が表示されます。ここで、名前を変更することはできません。
出力先の選択	レポートの出力先として、既存または新しいアクティビティを選択します。ワークリストでアクティビティをフィルタリングする場合は、最初のリストを使用します。
ワークリストの選択	ワークリストの名前を入力するか、リストで選択します。
アクティビティの選択	アクティビティの名前を入力するか、リストで選択します。
アクティビティ名	オブジェクトを新しいアクティビティに公開する場合は、このボックスにアクティビティの名前が表示されます。
アクティビティの目的	このボックスには、可能な場合に、アクティビティの目的が表示されます。
アイテムの説明	(オプション) 参加者がオブジェクトの内容と使用方法を理解しやすくするために、オブジェクトのコンテンツに関する説明を入力します。

オプション	説明
アクティビティの種類の選択	(オプション) スケジュールするアクティビティの種類を選択します。
参加者の追加	(オプション) 新しいコラボレーションアクティビティを作成する場合は、アクティビティに招待する各参加者 (ユーザ) の電子メールアドレスを入力します。電子メールアドレスは、カンマで区切ります。

7.2.1.5.3 デフォルトの Enterprise の場所へのオブジェクトのスケジュール

インスタンスを別の場所ではなく Output File Repository Server (FRS) のみに保存する場合は、出力先として [デフォルトの Enterprise の場所] を使用します。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. デフォルトの出力先を設定するオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ► を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[デフォルトの Enterprise の場所] を選択します。
6. [スケジュール] をクリックします。

7.2.1.5.4 ユーザの BI 受信ボックスに対するオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールする際に、1 つまたは複数のユーザの BI 受信ボックスにインスタンスを送信するように、オブジェクトを設定できます。BI プラットフォームでは、Output File Repository Server (FRS) にインスタンスが保存され、指定した BI 受信ボックスにインスタンスのコピーが送信されます。

デフォルトでは、BI 受信ボックスの出力先が Adaptive Job Server で有効になっており、設定されています。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ► を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[BI 受信ボックス] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。
デフォルト設定を使用チェックボックスをオンにした場合は、ステップ 9 に進んでください。
8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [利用可能な受信者] で、インスタンスを送信するユーザを選択します。

- b. [ターゲット名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
 - c. [送信者の名前] で、[ショートカット] または [コピー] を選択します。
9. [スケジュール] をクリックします。

7.2.1.5.5 電子メールに対するオブジェクトのスケジュール

[電子メール] 出力先を選択する場合、BI プラットフォームでは Output File Repository Server に出力インスタンスが保存され、指定した電子メールアドレスに添付ファイルとしてインスタンスのコピーが送信されます。

この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) 出力先が有効になっており、設定されている必要があります。

Crystal レポートおよびその他のオブジェクトインスタンスは、Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) メールサポートを経由して電子メール出力先に送信されます。

BI プラットフォームは、MIME (Multipurpose Internet Mail Extensions) エンコーディングをサポートしています。

1. CMC で、[フォルダ] 領域を選択します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► アクション ► スケジュール ▼ を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[電子メール] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。

デフォルト設定を使用チェックボックスをオンにした場合は、ステップ 9 に進んでください。

8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [差出人] ボックスに、返信先の電子メールアドレスを入力します。
 - b. [宛先] ボックスに、インスタンスを送信する各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - c. [CC] ボックスに、電子メールおよびインスタンスのコピーを送信する各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - d. [BCC] ボックスに、電子メールおよびインスタンスのコピーを送信する非公開の各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - e. [件名] ボックスに、電子メールの件名を入力します。
 - f. [メッセージ] ボックスに、電子メール本文のメッセージを入力します。
 - g. [添付ファイルの追加] チェックボックスをオンまたはオフにします。
 - h. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
9. スケジュールをクリックします。

関連情報

[Job Server の出力先の有効化または無効化 \[93 ページ\]](#)

SMTP over SSL のセットアップ

SMTP over SSL をセットアップするには、サーバとクライアントのシステムに同じ証明書があることが必要です。

SMTP over SSL をセットアップするには、次の手順に従います。

1. Windows プラットフォームで、<install_dir>\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64_x64 にジャンプします。また、BI プラットフォームに接続するクライアントの場合は、<install_dir>\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win32_x86 にジャンプします。

i 注記

サポートされているその他すべてのプラットフォームの、それぞれのフォルダに移動します。

2. 証明書に "certificate.crt" と名前を付けます。

たとえば、SMTP サーバへの接続中に、サーバは証明書の詳細を送信します。証明書の詳細を未使用のテキストファイルにコピーして、"certificate.crt" に名前を変更する必要があります。これは、Windows プラットフォームでは win64_x64 フォルダに、クライアントの場合は win32_x86 フォルダに置く必要があります。

これで、SMTP over SSL がセットアップされました。

i 注記

ユーザが [\[SSL を有効にする\]](#) チェックボックスにチェックを入れている場合、セキュリティ保護されたチャネルが有効になります。これにより、セキュリティ保護された SMTP over SSL 送信が可能になります。

7.2.1.5.6 FTP サーバへのオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールするときに、オブジェクトの出力先を FTP(File Transfer Protocol)サーバに設定できます。FTP サーバに接続するには、FTP サーバにファイルをアップロードできるアクセス権を持つユーザを指定する必要があります。FTP の出力先を指定する場合、出力インスタンスは、システムにより Output FRS および指定した出力先に保存されます。

この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で出力先が有効になっており、設定されている必要があります。

1. CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#) を選択します。
4. [\[出力先\]](#) をクリックします。
5. [\[出力先\]](#) リストで、[\[FTP サーバ\]](#) を選択します。
6. [\[履歴にインスタンスを保持する\]](#) チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [\[デフォルト設定を使用\]](#) チェックボックスをオンまたはオフにします。
チェックボックスをオンにした場合は、手順 9 に移動してください。
8. [\[デフォルト設定を使用\]](#) チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [\[ホスト\]](#) ボックスに、インスタンスを送信する FTP サーバホストコンピュータの IP アドレスを入力します。

- b. [ポート] ボックスに、インスタンスを送信する FTP サーバのポートを入力します。
 - c. [ユーザ名] ボックスに、FTP サーバへのオブジェクトのアップロードが可能なアクセス権を持つユーザ名を入力します。
 - d. [パスワード] ボックスに、FTP サーバにアクセスするのに必要なユーザパスワードを入力します。
 - e. [アカウント] ボックスに、FTP サーバにアクセスするのに必要なアカウントを入力します。
 - f. [ディレクトリ] ボックスに、インスタンスを送信する FTP ディレクトリへのパスを入力します。
 - g. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
9. [スケジュール] をクリックします。

7.2.1.5.7 ファイルの場所に対するオブジェクトのスケジュール

オブジェクトをスケジュールするときに、出力先がアンマネージドディスクになるようにオブジェクトを設定できます。この場合、BI プラットフォームは Output File Repository Server (FRS) および指定された出力先に出力インスタンスを保存します。

ファイルの場所に対してオブジェクトをスケジュールするための条件は、次のとおりです。

- ファイルの場所は、処理サーバ上のローカルディレクトリである必要があります。Windows 上のサーバでは、保存場所として Universal Naming Convention (UNC) パスまたはローカルディレクトリを指定できます。
- ファイルの場所は、Adaptive Job Server で有効化と設定が行われている必要があります。
- 処理サーバには、ファイルの場所に対する十分なアクセス権が必要です。

オブジェクトが Web Intelligence ドキュメントまたはオブジェクトパッケージの場合は、出力先としてアンマネージドディスクを選択できません。ただし、オブジェクトパッケージの場合は、オブジェクトパッケージ内の個々のオブジェクトの出力先をアンマネージドディスクに設定することができます。

1. CMC の [フォルダ] 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ► **アクション** ► **スケジュール** ▼ を選択します。
4. [出力先] をクリックします。
5. [出力先] リストで、[ファイルシステム] を選択します。
6. [履歴にインスタンスを保持する] チェックボックスをオンまたはオフにします。
7. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにします。

デフォルト設定を使用チェックボックスをオンにした場合は、ステップ 9 に進んでください。

8. [デフォルト設定を使用] チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. [ユーザ名] ボックスに、出力先ディレクトリにファイルを保存可能なアクセス権を持つユーザ名を入力します。
 - b. [パスワード] ボックスに、出力先ディレクトリにアクセスするのに必要なユーザパスワードを入力します。
 - c. [ディレクトリ] ボックスに、インスタンスの送信先となるローカルハードディスクの場所、マップされた場所、またはディレクトリへの UNC パスを入力します。
 - d. [ファイル名] で、[自動で生成された名前を使用する] または [指定の名前を使用する] を選択します。
9. [スケジュール] をクリックします。

7.2.1.5.8 コラボレーションのオブジェクトのスケジュール

- この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で出力先が有効になっており、設定されている必要があります。
 - コラボレーションのオブジェクトをスケジュールするには、SAP StreamWork アカウントが有効化されている必要があります。
1. CMC のフォルダ管理エリアに移動します。
 2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
 3. **▶ アクション ▶ スケジュール ▶**を選択します。
 4. **[出力先]** をクリックします。
 5. **[出力先]** リストで、**[コラボレーション]** を選択します。
SAP StreamWork アカウントをユーザ名に関連付けていない場合は、SAP StreamWork へのログオンを求められます。
 6. **[履歴にインスタンスを保持する]** チェックボックスをオンまたはオフにします。
 7. **[デフォルト設定を使用]** チェックボックスをオンまたはオフにします。
デフォルト設定を使用 チェックボックスをオンにした場合は、ステップ 9 に進んでください。
 8. チェックボックスをオフにした場合、以下のアクションを実行します。
 - a. **[送信先の選択]** リストで、レポートの出力先として既存または新しいアクティビティを選択します。
 - b. **[ワークリストの選択]** リストで、スケジュールするワークリストの名前を入力するか、リストから名前を選択します。
 - c. **[アクティビティの選択]** リストで、スケジュールするアクティビティの名前を入力するか、リストから名前を選択します。
アクティビティの名前が **[アクティビティ名]** ボックスに表示されます。アクティビティの目的が定義されている場合は、**[アクティビティの目的]** ボックスに表示されます。
 - d. **アイテムの説明** ボックスに、オブジェクトの説明を入力します。
 - e. **[アクティビティの種類の選択]** リストで、アクティビティの種類を選択します。
 - f. 新しいアクティビティを作成している場合は、**[参加者の追加]** ボックスに、アクティビティに招待する参加者の電子メールアドレスをカンマで区切って入力します。
 9. **スケジュール** をクリックします。

関連情報

[出力先ごとのオプション \[83 ページ\]](#)

[Job Server の出力先の有効化または無効化 \[93 ページ\]](#)

7.2.1.5.9 Job Server の出力先の有効化または無効化

デフォルトでは、BI プラットフォームでのスケジュールされたレポートまたはプログラムオブジェクトの実行時に、作成された出力インスタンスが Output File Repository Server (FRS) に保存されます。オブジェクトをスケジュールしたり送信したりする出力先 (デフォルトの Enterprise の場所以外) を選択した場合、BI プラットフォームは、Output FRS に出力インスタンスを保存し、指定した出力先にコピーを保存します。

出力先を選択する前に、Adaptive Job Server で出力先が有効になっており、設定されている必要があります。

デフォルトでは、レポートおよびドキュメントを配信できるように、BI 受信ボックスの出力先が Adaptive Job Server で有効になっており、設定されています。Adaptive Job Server に出力先を追加して設定できます。

1. CMC の [サーバ管理](#) エリアを表示します。
2. 出力先を有効または無効にする Adaptive Job Server を選択します。
3. [管理](#) > [プロパティ](#) を選択します。
4. [プロパティ](#) ダイアログボックスで、[出力先](#) をクリックします。
5. 次の操作のいずれかを実行します。
 - 出力先を有効にするには、[出力先一覧](#) で出力先を選択し、[追加](#) をクリックし、設定します。
 - 出力先を無効にするには、[出力先](#) リストで出力先を選択し、[削除](#) をクリックします。
6. [保存](#) または [保存して閉じる](#) をクリックします。

7.2.1.6 Crystal レポートアラート通知

アラート通知は、Crystal レポートにのみ適用されます。この機能は、Web Intelligence ドキュメントには適用されません。

Crystal レポートのアラート通知は、BI ラウンチパッドのアラートとは異なります。アラート通知は SAP Crystal Reports で作成されるカスタムメッセージです。レポートデータが条件を満たすと表示されます。アラート条件 (SAP Crystal Reports で定義されます) が満たされると、アラートが呼び出され、ユーザが実行する必要があるアクションやレポートデータに関する情報を含むメッセージが表示されます。

BI プラットフォームには、オプションで Crystal レポートのスケジュール時にアラート通知を送信できます。アラート通知を有効にすると、SMTP サーバからメッセージが送信されます。さらに、電子メールの配信オプションの設定、電子メールアドレス、件名、およびメッセージの入力、受信者が使用するビューアの URL、および送信するアラートレコードの最大数の設定が可能です。

[\[アラート通知\]](#) リンクは、Crystal レポートオブジェクトにアラートがある場合にのみ使用できます。アラート通知を有効にするには、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) の出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド* を参照してください。

アラート通知を無効にしても、Crystal レポートオブジェクト内ではアラートが発生します。ただし、通知は送信されません。

関連情報

[アラートと Crystal レポートアラート通知の相違点 \[119 ページ\]](#)

7.2.1.6.1 アラート通知の設定

1. CMC の [フォルダ管理](#) エリアに移動します。

2. アラートを設定するレポートオブジェクトを選択します。
3. **アクション** ▶ **スケジュール** を選択します。
4. [スケジュール] ウィンドウで **[通知]** をクリックします。
5. **[アラート通知を有効にする]** チェックボックスをオンにします。
6. **[デフォルト設定を使用]** をオンにしてデフォルトの Adaptive Job Server 設定を使用してアラート通知を配信するか、**[カスタム設定]** を選択して電子メール設定を指定します。

CMC の **[サーバ]** エリアで、デフォルトの Adaptive Job Server の設定を変更できます。詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 管理者ガイドを参照してください。

7. 受信者がレポートの表示に使用するビューアの URL を入力するか、デフォルトビューアを選択します。

ビューア URL には、W3C (World Wide Web Consortium) エンコーディングを使用する必要があります。たとえば、パス内のスペースを **%20** に置き換えます。詳細については、<http://www.w3.org/> を参照してください。

ビューア URL をデフォルトとして設定するには、CMC の **アプリケーション** エリアにある **セントラル管理コンソール** を選択し、**アクション** ▶ **処理設定** を選択して **URL (URL エンコードされている必要があります)** ボックスに URL を入力します。

ビューア URL は、アラート通知電子メール内にハイパーリンクとして表示されます。

8. アラート通知に含めるアラートレコードの最大数を入力します。

アラート通知内のハイパーリンクは、アラートを発生させたレコードが含まれるレポートページを表示します。

SAP Crystal Reports でアラート名およびステータスを入力します。

9. **スケジュール** をクリックします。

7.2.1.7 インスタンスの出力ファイル形式

オブジェクトは、インスタンスの種類ごとに異なる形式で送信またはスケジュールすることができます。

Crystal レポートのファイル形式[crystal レポートノファイルケイシキ]

Crystal Reports オプションでは、他のファイル形式よりも多くの書式設定が保持されます。*Crystal Reports* 以外のファイル形式を選択する場合、BI プラットフォームはその形式で可能な限り多くの書式設定を保持します。ただし、レポートでは一部または全部の書式設定が失われる場合があります。スケジュール時にレポートの印刷を選択すると、レポートインスタンスが *Crystal Reports* 形式で自動的にプリンタに送信されます。このファイル形式は、レポートをスケジュールする際に選択したファイル形式と競合することはありません。

Crystal レポートを特定の形式にスケジュールする詳細については、*SAP Crystal Reports 2011 ユーザガイド* のエクスポートに関する情報を参照してください。

表 29:

形式	説明
<i>Crystal Reports</i>	この .rpt 形式は、すべての出力形式オプションのほとんどの書式設定を保持します。この形式では、通常の編集可能なレポートが作成されます。
<i>Crystal レポート (RPTR)</i>	この .rprr 形式では、読み取り専用の Crystal レポートが作成されます。
<i>Microsoft Excel(97-2003)</i>	この .xls 形式では、元のレポートの外観を維持しようとします。データを保持し、セルのマージを行いません。レポートの書式設定プロパティをいくつか指定する必要があります。
<i>Microsoft Excel (97-2003) (データのみ)</i>	この .xls 形式ではデータのみが保存され、各セルはフィールドを表します。
<i>Microsoft Excel Workbook データのみ</i>	
<i>Microsoft Word(97-2003)</i>	この .doc 形式では、グラフィックを含め、できるだけ多くの書式設定が保持されます。各オブジェクトは、個別のテキストフィールドに表示されます。
<i>PDF</i>	.pdf 形式
<i>リッチテキスト形式(RTF)</i>	この .rtf 形式では、グラフィックを含め、できるだけ多くの書式設定が保持されます。各オブジェクトは、個別のテキストフィールドに表示されます。このオプションは、Web ビューアでのみ使用できます。
<i>Microsoft Word - 編集可能 (RTF)</i>	この .doc 形式で維持される書式設定は、 <i>Microsoft Word (97-2003)</i> オプションよりも少なくなります。テキストは行内に表示され、イメージはテキストと共に行内に配置されます。
<i>テキスト</i>	
<i>ページ区切り付きテキスト</i>	レポートの書式設定プロパティをいくつか指定する必要があります。
<i>タブ区切りテキスト (TTX)</i>	この形式では、複数の値の間にタブ文字を置きます。レポートの書式設定プロパティをいくつか指定する必要があります。
<i>カンマ区切り値(CSV)</i>	この .csv 形式では、複数の値の間に指定された文字を置きます。レポートの書式設定プロパティをいくつか指定する必要があります。たとえば、このオプションを選択した場合は、区切り文字および区切り記号を入力する必要があります。
<i>XML</i>	.xml 形式

Web Intelligence ファイル形式

表 30:

形式	注
Web Intelligence	.wid 形式
Microsoft Excel	.xlsx 形式
Adobe Acrobat	.pdf 形式
カンマ区切り値 (CSV)	.csv 形式
テキスト	.txt 形式

7.2.1.7.1 Crystal レポートインスタンスの書式設定オプション

Crystal レポートインスタンスをいくつかの出力形式にスケジュールする場合、追加のオプションの設定が必要になる場合があります。

表 31: Microsoft Excel (97-2003) 形式

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">すべてのページをレポートに含めるには、[すべて] を選択します。ページ範囲を含めるには、ページ指定を選択して最初に含めるページ番号を入力し、終了ボックスに最後に含めるページを入力します。
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスをクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none">レポート内のオブジェクトに基づいて Excel 列の幅を設定するには、[列幅を次のオブジェクトに合わせる] を選択し、リストで列幅を取得するレポート領域を選択します。一定の列幅を設定するには、列幅を一定にする (ポイント単位) を選択し、ボックスに幅を入力します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	<ul style="list-style-type: none">インスタンスにページヘッダとページフッタをエクスポートするタイミングを選択するには、[レポートごとに 1 回] または [各ページ] を選択します。インスタンスからページヘッダおよびページフッタを除外するには、[なし] を選択します。
ページごとにページ区切りを作成	レポート内の各ページの後にページ区切りを作成する場合は、このチェックボックスを選択します。
日付の値を文字列に変換する	レポート内の日付値をテキスト文字列としてエクスポートする場合は、このチェックボックスを選択します。
グリッドラインの表示	エクスポートしたドキュメントにグリッドラインを表示する場合は、このチェックボックスを選択します。

表 32: Microsoft Excel (97-2003) (データのみ) および Microsoft Excel ワークブックのデータ専用形式

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none"> レポート内のオブジェクトに基づいて Excel 列の幅を設定するには、列幅を次のオブジェクトに合わせるを選択し、リストで列幅を取得するレポート領域を選択します。 一定の列幅を設定するには、列幅を一定にする (ポイント単位)を選択し、ボックスに幅を入力します。
オブジェクトの書式設定をエクスポートする	オブジェクトの書式設定を維持する場合は、このチェックボックスを選択します。
画像をエクスポートする	レポート内の画像をエクスポートする場合は、このチェックボックスを選択します。
集計にワークシートの関数を使用する	レポートで集計を使用して Excel でワークシート関数を作成する場合は、このチェックボックスを選択します。
オブジェクトの相対位置を維持する	別のオブジェクトと相対的なオブジェクトの位置を維持する場合は、このチェックボックスを選択します。
列の配置を維持する	レポートの列内のテキスト配置を維持する場合は、このチェックボックスを選択します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	インスタンスにヘッダおよびフッタを含める場合は、このチェックボックスを選択します。
ページヘッダを簡略化する	簡略なページヘッダを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。
グループのアウトラインを表示する	グループアウトラインを表示する場合は、このチェックボックスを選択します。

表 33: Microsoft Word (97-2003) 形式

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、すべてを選択します。 ページ範囲を含めるには、ページ指定を選択して最初に含めるページ番号を入力し、終了ボックスに最後に含めるページを入力します。

表 34: PDF 形式

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、すべてを選択します。 ページ範囲を含めるには、ページ指定を選択して最初に含めるページ番号を入力し、終了ボックスに最後に含めるページを入力します。
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。

オプション	説明
グループツリーからブックマークを作成	レポートのツリー構造に基づいて PDF ファイルにブックマークを作成する場合は、このチェックボックスを選択します。これにより、レポート内での移動が簡単になります。

表 35:リッチテキスト形式 (RTF)

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、すべてを選択します。 ページ範囲を含めるには、ページ指定を選択して最初に含めるページ番号を入力し、終了ボックスに最後に含めるページを入力します。

表 36:Microsoft Word - 編集可能 (RTF) 形式

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、すべてを選択します。 ページ範囲を含めるには、開始をクリックして最初に含めるページを入力し、終了ボックスに最後に含めるページを入力します。
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。
レポートのページごとに改ページする	レポート内の各ページの後にページ区切りを挿入する場合に、このチェックボックスを選択します。

表 37:テキスト形式

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。
インチあたりの文字数	インチあたりに含める文字数として 8 ～ 16 の値を入力します。この設定では、テキストファイルの表示方法と書式設定方法を指定します。

表 38:ページ区切り付きテキスト形式

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。
1 ページあたりの行数	ページ区切り間に含めるテキストの行数を入力します。
インチあたりの文字数	インチあたりに含める文字数として 8 ～ 16 の値を入力します。この設定では、テキストファイルの表示方法と書式設定方法を指定します。

表 39:区切り値 (CSV) 形式

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。
区切り文字	区切り文字として使用する文字を入力します。
区切り文字	値を区切るのに使用する文字を入力するか、 <input type="checkbox"/> タブ チェックボックスを選択します。
モード	[標準モード] または [レガシーモード] を選択します。[標準モード] を選択すると、インスタンスに含めるレポートセクション、ページセクション、およびグループセクションを選択できます。[レガシーモード] を選択すると、レポートセクション、ページセクション、またはグループセクションのオプションを選択できません。
レポートセクションとページセクション	[標準モード] を選択した場合、[エクスポート] または [エクスポートしない] を選択してレポートセクションとページセクションをエクスポートするかどうかを指定します。 [エクスポート] を選択した場合、レポートセクションとページセクションを切り離すには、[レポート/ページセクションを切り離す] チェックボックスを選択します。
グループセクション	[標準モード] を選択した場合、[エクスポート] または [エクスポートしない] を選択してグループセクションをエクスポートするかどうかを指定します。[エクスポート] を選択した場合、グループセクションを切り離すには、[グループセクションを切り離す] チェックボックスを選択します。

表 40:XML

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用	レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合は、このチェックボックスを選択します。他の書式設定オプションは設定できません。
XML エクスポート形式	[Crystal Reports XML] などの XML エクスポート形式を選択します。


7.2.1.7.2 出力ファイル形式の選択

1. CMC の **[フォルダ]** 管理エリアに移動します。
2. 出力ファイル形式を選択するレポートオブジェクトを選択します。
3. **▶ アクション ▶ スケジュール ▶** を選択します。
4. **[形式]** をクリックします。
5. 出力形式を選択します。
たとえば、Crystal レポートの場合は、**[選択したドキュメントの形式オプション]** で形式を選択します。Web Intelligence ドキュメントの場合は、**[出力形式]** で形式を選択します。
6. 必要に応じて残りのスケジュールオプションを設定します。
7. **[スケジュール]** をクリックします。

7.2.1.8 Web Intelligence ドキュメントのキャッシュ形式の選択

スケジュールされた Web Intelligence ドキュメントを BI プラットフォームが実行する際には、生成されたインスタンスが Output File Repository Server (FRS) に保存されます。キャッシュ形式を選択すると、プラットフォームは適切なレポートサーバーにインスタンスをキャッシュします。キャッシュ形式を選択しないと、システムはインスタンスをキャッシュしません。

キャッシュ形式の選択は、Web Intelligence ドキュメントにのみ適用され、Crystal レポートには適用されません。

1. CMC の **フォルダ** 管理エリアに移動します。
2. キャッシュ形式を選択する Web Intelligence ドキュメントオブジェクトを選択します。
3. **アクション** > **スケジュール** を選択します。
4. **[キャッシュ]** をクリックします。
5. **[キャッシュで利用可能な形式]** で、**[Microsoft Excel]**、**[標準の HTML]**、または **[Adobe Acrobat]** を選択します。
複数の形式を選択できます。
キャッシュは、選択した形式で事前ロードされます。
6. **利用可能なロケール** で、キャッシュの事前ロードで使用するロケールを選択し、 をクリックしてロケールを **選択されたロケール** リストに移動します。
複数のロケールを選択できます。この Web Intelligence ドキュメントをスケジュールすると、プラットフォームはこれらのロケールでドキュメントのキャッシュ済みバージョンを生成します。
キャッシュは、選択したロケールで事前ロードされます。
7. 必要に応じて残りのスケジュールオプションを設定します。
8. **スケジュール** をクリックします。

7.2.1.9 オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定

イベント発生に合わせてオブジェクトをスケジュールすると、イベントが発生したときにのみオブジェクトが実行されます。以下のイベントタイプが発生するまで、オブジェクトが待機するようにスケジュールできます。

- ファイルベース: 特定のファイルが存在する場合に発生します。
- カスタム: 手動で発生させます。
- スケジュールベース: 実行中の他のオブジェクトによって発生します。

スケジュールされたオブジェクトによってイベントを発生させるには場合は、スケジュールベースのイベントを選択する必要があります。

イベントの発生に基づくオブジェクトのスケジュール

イベントの発生に基づくオブジェクトをスケジュールすると、そのイベントが発生し、他のスケジュール条件が満たされたときにのみオブジェクトは実行されます。

オブジェクトの開始日時より前にイベントが発生した場合、オブジェクトは実行されません。オブジェクトの終了日時を指定して、その終了日時より前にイベントが発生しなかった場合は、すべての条件が満たされないためオブジェクトは実行されません。

週単位、月単位、またはカレンダースケジュールを選択すると、オブジェクトを実行できる特定の時間枠が設定されます。オブジェクトが実行されるためには、イベントがその時間枠内に発生する必要があります。たとえば、毎週火曜日に実行する週単位レポートオブジェクトをスケジュールした場合、イベントはそのインスタンスの日付が終わる前に（この場合月曜日の終わりまで）に発生する必要があります。

イベントを発生させるオブジェクトのスケジュール

イベント発生に合わせてオブジェクトをスケジュールするには、最初にイベントを作成しておく必要があります。

スケジュールベースのイベントを発生させるようにオブジェクトをスケジュールすると、そのオブジェクトの実行後にイベントが発生します。たとえば、スケジュールベースのイベントが成功したインスタンスに基づく場合、インスタンスが失敗するとイベントは発生しません。


関連情報

[一般的なオブジェクトの管理 \[29 ページ\]](#)

[オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定 \[101 ページ\]](#)

7.2.1.9.1 イベントの発生に基づくオブジェクトのスケジュール

イベントの発生後にスケジュールされたジョブを実行する場合は、このタスクを実行します。

1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。
2. イベントの発生に基づいて実行するオブジェクトを選択します。
3. **▶ アクション ▶ スケジュール ▶**を選択します。
4. ナビゲーション一覧で **[繰り返し]** をクリックします。
5. **[オブジェクトの実行]** リストで、実行オプションを選択します。
6. 必要に応じて、オブジェクトの他の定期的なスケジュールオプションを設定します（開始日、終了日など）。
7. ナビゲーション一覧で **[イベント]** をクリックします。
8. **利用可能なイベント**で、1 つまたは複数のイベントを選択し、 をクリックしてそのイベントを**待機するイベント**リストに追加します。
9. **スケジュール**をクリックします。


関連情報

[定期スケジュールパターン \[72 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[73 ページ\]](#)

7.2.1.9.2 イベントを発生させるオブジェクトのスケジュール

スケジュールされたジョブの実行時にイベントを発生させる場合は、このタスクを実行します。

1. CMC の [\[フォルダ\]](#) 管理エリアに移動します。
2. イベントを発生させるオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#) を選択します。
4. ナビゲーション一覧で [\[繰り返し\]](#) をクリックします。
5. [\[オブジェクトの実行\]](#) リストで、実行オプションを選択します。
6. 必要に応じて、オブジェクトの他の定期的なスケジュールオプションを設定します (開始日、終了日など)。
7. ナビゲーション一覧で [\[イベント\]](#) をクリックします。
8. [利用可能なスケジュールイベント](#)で、1つまたは複数のイベントを選択し、 をクリックしてそのイベントを [完了時に発生させるイベントリスト](#)に追加します。
スケジュールに基づくイベントだけを選択できます。
9. [\[スケジュール\]](#) をクリックします。

関連情報

[定期スケジュールパターン \[72 ページ\]](#)

[定期的なスケジュールパターンの実行オプション \[73 ページ\]](#)

7.2.1.10 スケジュール済みオブジェクトでのサーバまたはサーバグループの選択

スケジュールされたオブジェクトを実行するサーバまたはサーバグループを選択できます。これにより、負荷分散をさらに制御できます。

ユーザが Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントのインスタンスを表示しながら最新表示するときに BI プラットフォームで使用するサーバグループを選択することができます。また、システムリソースを独占しないように、特定のサーバグループ上でプログラムジョブを実行できます。

このタスクのオプションは、[▶ 管理 ▶ デフォルト設定 ▶](#) および [サーバグループの表示](#) (Crystal レポート) または [Web Intelligence 処理設定](#) (Web Intelligence ドキュメント) を選択している場合に使用できます。

1. CMC の [フォルダ](#) 管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. [▶ アクション ▶ スケジュール ▶](#) を選択します。

4. ナビゲーション一覧で [サーバグループのスケジュール] をクリックします。
 5. 使用するサーバの種類を、以下のように選択します。
 - 最初に見つかった利用可能なサーバを使用するを選択すると、使用されているサーバグループに関係なく、できるだけ速やかにオブジェクトを実行します。
 - 複数のサーバが使用可能な場合に、サーバグループ内の特定のサーバを使用するには、選択したグループに所属するサーバを優先して使用するを選択します。
 - 指定したサーバグループを使用する場合は、選択したグループに所属するサーバだけを使用するを選択して、サーバグループを入力します。
- プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server 上にローカルで保存されたファイルにアクセスする必要があるプログラムオブジェクトをスケジュールしている場合、Adaptive Job Server が複数存在するときは、プログラムを実行するサーバを指定する必要があります。
6. オブジェクトが配置されているサイトでオブジェクトを実行する場合は、元のサイトで実行チェックボックスをオンにします。
 7. 必要に応じて他のスケジュールオプションを設定し、スケジュールをクリックします。

7.2.1.11 Crystal レポートインスタンスの言語の選択

このタスクは、レポートインスタンスを複数の言語で生成する場合に実行します。

1. CMC のフォルダ管理エリアに移動します。
2. スケジュールするオブジェクトを選択します。
3. ▶ アクション ▶ スケジュール をクリックします。
4. ナビゲーション一覧で、言語をクリックします。
5. 以下の言語オプションからいずれかを選択します。
 - 基本設定で設定した優先表示ロケール (PVL) に従ってレポートをスケジュールし、そのロケールのみを使用してインスタンスを作成する場合は、優先表示ロケールでレポートをスケジュールを選択します。
 - 複数の言語でレポートをスケジュールするには、複数のロケールでレポートをスケジュールを選択し、すべてのロケールリストから選択インスタンスのロケールリストにロケールを移動して、複数の PVL を選択します。
6. 必要に応じて他のスケジュールパラメータを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.2.2 複数オブジェクトの即時実行

個々のオブジェクトをスケジュールする代わりに、今すぐ実行を使用して、CMC から複数のオブジェクトを実行できます。オブジェクトをすぐに実行すると、オブジェクトはデフォルトのスケジュール設定を使用して直ちに実行されます。

1. CMC のフォルダ管理エリアに移動します。
2. 実行するオブジェクトを見つけて選択します。
3. ▶ アクション ▶ 今すぐ実行 をクリックします。

7.2.3 オブジェクトパッケージによるオブジェクトのスケジュール

オブジェクトパッケージを使用すると、オブジェクトをバッチでスケジュールすることができます。

オブジェクトパッケージは、BI プラットフォームの独立したオブジェクトで、スケジュール可能なオブジェクト（レポート、プログラムオブジェクト、および Web Intelligence ドキュメントなど）を自由に組み合わせて含めることができます。オブジェクトパッケージを使用することで認証処理が簡便になり、ユーザは異なるオブジェクトのインスタンス間で同期されたデータを表示することができます。

オブジェクトパッケージを使用してオブジェクトをスケジュールするには、オブジェクトパッケージを作成し、作成したオブジェクトパッケージに既存のオブジェクトをコピーし、オブジェクトパッケージをスケジュールします。オブジェクトパッケージ内のコンポーネントごとに処理情報を設定する必要があります。

たとえば、スケジュールするときにオブジェクトパッケージ内のレポートオブジェクトを印刷するには、[スケジュールダイアログボックスのコンポーネント](#)をクリックし、印刷するコンポーネントのタイトルをクリックし、コンポーネントの[印刷設定](#)展開してから、個別にそのコンポーネントをスケジュールするときに、希望どおりに印刷されるよう設定します。

関連情報

[オブジェクトパッケージとオブジェクトの設定 \[62 ページ\]](#)

[ハイパーリンクを使用したレポートでの作業 \[45 ページ\]](#)

7.3 インスタンスの管理

BI プラットフォームでは、オブジェクトから 2 種類のインスタンスが生成されます。

表 41:

インスタンスの種類	説明
レポートインスタンス	Job Server によってレポートオブジェクトがスケジュールされ、実行される際に生成されます。 レポートインスタンスは、1 つまたは複数のデータベースから取得されたレポートデータが含まれるレポートオブジェクトです。各インスタンスで、レポートが処理された時点のデータが取得されます。レポートインスタンスは完全な書式で表示することができます。
プログラムインスタンス	Job Server によってプログラムオブジェクトがスケジュールされ、実行されるたびに生成されます。 プログラムインスタンスはオブジェクト履歴内にレコードとして存在します。プラットフォームでは、プログラムの標準出力と標準エラーがテキストファイルに保存されます。

インスタンスを表示および管理する方法は、以下の 2 通りあります。

- オブジェクトの履歴ダイアログボックス
- インスタンスマネージャ

関連情報

[インスタンス情報の表示 \[106 ページ\]](#)

[インスタンスに対する制限の設定 \[110 ページ\]](#)

[インスタンスマネージャ \[107 ページ\]](#)

7.3.1 インスタンス情報の表示

インスタンスマネージャまたは各オブジェクトの履歴ダイアログボックスで、インスタンスを管理できます。

以下の表に、各インスタンスの列と表示されるインスタンス情報を示します。

表 42: インスタンスマネージャに表示される情報

列	説明
タイトル	インスタンスのタイトル。
種類	オブジェクトの種類
ステータス	各インスタンスのステータス。
場所	リポジトリ内のオブジェクトの場所。
所有者	インスタンスをスケジュールしたユーザ。
終了時刻	インスタンスの実行が完了した日時。
次回実行時	定期スケジュールが設定され、ステータスが保留となっているオブジェクトの次回実行時刻。
送信時刻	ユーザがオブジェクトをスケジュールした日時。
開始時刻	オブジェクトの実行開始日時。
期間 (秒)	スケジュールされたジョブの期間。
繰り返し	スケジュールされたジョブの頻度。
有効期限	インスタンスの実行終了日時、またはエラーによる終了日時。
サーバ	インスタンスが実行されたサーバ。
エラー	実行中に発生し、オブジェクトの失敗原因となったエラー (エラーが発生した場合)。

表 43: 履歴ダイアログボックスに表示されるインスタンス情報

列	表示される情報
インスタンスの日時	各インスタンスの最終更新日時。
タイトル	インスタンスのタイトル。
ステータス	各インスタンスのステータス。

列	表示される情報
実行者	インスタンスをスケジュールしたユーザ。
書式	レポートインスタンスを保存するときの書式。レポートオブジェクトのみに適用されます。
パラメータ	各インスタンスで使用された、または使用される予定のパラメータ。レポートオブジェクトのみに適用されます。
引数	各インスタンスのコマンドラインインタフェースに渡された、または渡される予定のコマンドラインオプション。プログラムオブジェクトのみに適用されます。

オブジェクトタイプによっては、上の表で説明されていない追加の列が表示される場合があります。

関連情報

[インスタンスの表示 \[108 ページ\]](#)

[インスタンスの削除 \[110 ページ\]](#)

7.3.1.1 インスタンスマネージャ

インスタンスマネージャを使用すると、BI プラットフォームデプロイメント内のすべてのインスタンスを 1 つの場所から表示および管理できます。

インスタンスマネージャを使用して、次のタスクを実行できます。

- 特定のインスタンスを検索する
- 複数のインスタンスを選択し、それらに対して、一時停止、再開、削除などのバッチ操作を実行する
- 単一インスタンスの詳細情報を表示する
- インスタンスエラーの原因となっているシステムの問題を診断して解決する

インスタンスマネージャのデフォルトビューには、保留中のインスタンスがタイトル別に表示されます。インスタンスに関する詳細情報を表示するには、インスタンスを選択し、ツールバーの [インスタンスの詳細](#) アイコンをクリックします。

例

インスタンスマネージャを使用したトラブルシューティング

管理者が CMC にログオンし、インスタンスマネージャを確認して、複数のジョブが失敗していることに気づいたとします。管理者は一覧をフィルタ処理し、この 2 日間に失敗したジョブだけを表示すると、それらはすべて同じサーバで実行されていることがわかりました。管理者は一覧をサーバ別に並べ替え、失敗したジョブがすべて同じサーバで実行されていることを確認します。各失敗のエラーコードは同じでした。管理者が 1 つのインスタンスの詳細情報を表示すると、データベース接続が正しく再接続されていないことがわかりました。管理者はデータベース接続を正しく再接続し、インスタンスマネージャに戻って失敗したすべてのジョブを再実行します。

7.3.2 インスタンスマネージャでのインスタンスの検索

インスタンスマネージャで特定のインスタンスを検索するには、次の基準を満たすインスタンスを検索するのオプションを使用します。

次の表に、使用可能なオプションを示します。

オプション	有効化方法
親フォルダ	親フォルダチェックボックスをオンにして、リポジトリフォルダを参照します。BI プラットフォームでフォルダ内のすべてのインスタンスが表示されます。
所有者	所有者チェックボックスを選択して、ユーザ名を入力します。プラットフォームで、そのユーザによってスケジュールされたすべてのインスタンスが検索されます。
ステータス	ステータスチェックボックスをオンにして、一覧から以下のステータスオプションのいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none">成功失敗実行中一時停止待機中繰り返し
オブジェクトタイプ	オブジェクトタイプチェックボックスをオンにして、一覧からオブジェクトタイプを選択します。
終了時刻	終了時刻チェックボックスをオンにして、開始時刻と停止時刻を設定します。完了したパブリケーションインスタンスについては、オブジェクトタイプを選択し、パブリケーションに設定して終了時刻を設定します。
次回実行時	次回実行時チェックボックスをオンにして、開始時刻と停止時刻を設定します。

複数のオプションを同時に使用してインスタンスを検索することができ、設定したすべての基準を満たすインスタンスのみが表示されます。

BI 受信ボックスにオブジェクトをスケジュールすると、ユーザが BI 受信ボックスで受け取るドキュメントはインスタンスとして見なされません。したがって、これらの BI 受信ボックスドキュメントはインスタンスマネージャに表示されません。

7.3.3 インスタンスの表示

インスタンスマネージャを使用すると、ステータス別やユーザ別にインスタンスのリストを表示することができます。

1. CMC のフォルダ管理エリアを表示します。

2. インスタンスを表示するオブジェクトを選択します。
3. **▶ アクション ▶ 履歴** を選択します。
4. **インスタンスの日時列**で、表示するインスタンスをクリックします。

すべての列をデフォルトの幅で表示するには、右にスクロールします。送信時刻、開始時刻、期間、繰り返し、または有効期限列を使用してインスタンスを並べ替えることはできません。

関連情報

[インスタンスマネージャ \[107 ページ\]](#)

7.3.4 オブジェクトのインスタンスの管理

このタスクは、特定のオブジェクトのインスタンスを表示および管理する場合に実行します。すべてのオブジェクトのインスタンスを表示および管理するには、このタスクの代わりに、インスタンスマネージャを使用します。

1. CMC の**フォルダ**管理エリアを表示します。
2. インスタンスを管理するオブジェクトを選択します。
3. **▶ アクション ▶ 履歴** を選択します。
4. インスタンス(複数可)を選択します。

このリストを最新表示するには、**[最新表示]**をクリックします。この場合、最初にインスタンスを選択する必要はありません。

5. **今すぐ実行、一時停止、再開、送信、再スケジュール**、または**削除**のいずれかを選択します。

今すぐ実行を選択すると、BI プラットフォームはオブジェクトをすぐに実行するようにスケジュールします。スケジュールされたジョブのステータスは、待機中になります。

関連情報

[インスタンスマネージャ \[107 ページ\]](#)

7.3.5 インスタンスの一時停止および再開

ステータスが待機または定期のオブジェクトに対して、オブジェクトのスケジュールされたインスタンスを一時停止してから再開できます。

たとえば、Job Server が保守目的で停止されている場合は、スケジュールされたインスタンスを一時停止して BI プラットフォームがオブジェクトを実行しないようにすることができます。Job Server が稼働していないとき、スケジュールされたジョブは失敗します。Job Server が再始動したら、このスケジュールされたインスタンスを再開することができます。

7.3.5.1 インスタンスの一時停止

1. オブジェクトの履歴ダイアログボックスを開きます。
2. 一時停止するスケジュールされたインスタンスを選択して、一時停止をクリックします。

7.3.5.2 一時停止インスタンスの再開

1. オブジェクトの履歴ダイアログボックスを開きます。
2. 再開するスケジュールされたインスタンスを選択して、再開をクリックします。

7.3.6 インスタンスの削除

必要に応じてオブジェクトからインスタンスを削除できます。ステータスが "定期" または "待機" のスケジュールされたインスタンスと、ステータスが "成功" または "失敗" のレポートインスタンスまたはプログラムインスタンスの両方を削除できます。

1. オブジェクトの履歴ダイアログボックスを開きます。
2. 削除するインスタンスを選択し、削除をクリックします。

7.3.7 インスタンスに対する制限の設定

オブジェクトまたはフォルダレベルで制限を設定し、古いインスタンスの定期的なクリーンアップを自動化します。

BI プラットフォームに残すオブジェクト、ユーザ、またはユーザグループのインスタンスの数をオブジェクトレベルで制限することができます。また、ユーザまたはグループのインスタンスをプラットフォームに残す日数を制限することもできます。オブジェクトレベルで制限を設定すると、その制限は、フォルダに設定されているすべての制限を上書きします (つまり、オブジェクトはフォルダの制限を継承しません)。

フォルダレベルでは、制限を設定すると、その制限がサブフォルダなど、フォルダ内のすべてのオブジェクトに影響します。

1. CMC のフォルダ管理エリアに移動して、オブジェクトを選択します。
2. ▶ アクション ▶ 制限 を選択します。
3. 制限ダイアログボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
 - オブジェクトあたりのインスタンス数を制限するには、オブジェクトのインスタンスが N 個より多い場合は、超過インスタンスを削除するチェックボックスをオンにし、システム上に残す必要があるインスタンスの最大数を入力します。デフォルト値は 100 です。
 - ユーザまたはグループのインスタンス数を制限するには、超過インスタンスを削除するユーザ/グループチェックボックスをオンにし、追加をクリックします。さらに、ユーザまたはグループを選択し、> をクリックしてユーザまたはグループをリストに移動し、OK をクリックして、インスタンスの制限列にインスタンスの最大数を入力します。デフォルト値は 100 です。

- ユーザまたはグループのインスタンスを保存する日数を制限するには、**N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ**チェックボックスをオンにし、**追加**をクリックします。さらに、ユーザまたはグループを選択し、**>** をクリックしてユーザまたはグループをリストに移動し、**OK** をクリックして、**最大日数**列にインスタンスの最大有効日数を入力します。デフォルト値は 100 です。

4. **更新**をクリックします。

関連情報

[フォルダレベルでのレポートインスタンスの制限 \[24 ページ\]](#)

7.4 イベントとスケジュール

イベントは、システム内での発生を表すオブジェクトです。

イベントタイプに従って、スケジュール、アラート、またはシステムの健全性をモニタリングするために使用できます。CMC の **[イベント]** 管理エリアでは、イベントタイプに従ってすべてのイベントがフォルダに整理されます。各イベントタイプフォルダ内では、イベントの保存と管理のためにサブフォルダを作成できます。

イベントベースのスケジュールを使用すると、オブジェクトのスケジュールをより詳細に制御できます。たとえば、指定したイベントが発生した後にのみオブジェクトが処理されるように、イベントを設定できます。イベントに関する作業は、イベントの作成と、イベント発生に合わせたオブジェクトのスケジュールという 2 つのステップによって成り立ちます。一度イベントを作成すれば、オブジェクトをスケジュールする際にそれを依存関係として選択できます。これにより、スケジュールされたジョブは、イベントの発生時にのみ処理されます。

スケジュールと併用する、以下のタイプのイベントを作成できます。

表 44:

イベントのタイプ	説明
ファイルイベント	ファイルベースのイベントを定義するときには、 Event Server で監視する特定のファイルの名前を指定します。その名前のファイルが生成されると、 Event Server はイベントを生成します。たとえば、他のプログラムやスクリプトの通常のファイル出力に応じてレポートが実行されるようにできます。ファイルイベントは、 [システムイベント] フォルダに保存されます。

イベントのタイプ	説明
スケジュールイベント	スケジュールベースのイベントを定義するときには、イベントのトリガとして機能する定期的なスケジュールが設定されているオブジェクトを選択します。スケジュールベースのイベントでは、このようにして、スケジュールされたオブジェクト間に依存関係(条件)を設定することができます。たとえば、大量のレポートを連続して実行したり、詳細売上レポートが正常に実行された場合のみ、特定の売上集計レポートを実行することができます。スケジュールイベントは、[システムイベント] フォルダに保存されます。
カスタムイベント	カスタムイベントを作成するときには、イベントを発生させるためのショートカットを手動で作成します。カスタムイベントは、[カスタムイベント] フォルダに保存されます。

イベントを使ってスケジュールする場合、オブジェクトの定期的なスケジュールによってオブジェクトの実行頻度が決定されることに注意してください。たとえば、ファイルベースイベントに依存する日次レポートは、指定したファイルが毎日生成される限り、1日1回実行されます。さらにこのイベントは、ユーザがイベントベースのレポートのスケジュールで設定した時間枠内に発生する必要があります。

アラートにはファイルベースのイベントを使用します。

自動的に作成されたイベント

リポジトリに特定のタイプのオブジェクト (例: Crystal レポート) が追加されると、対応するイベントが自動的に作成されます。

i 注記

これらのタイプのイベントは [イベント] エリアで表示できます。ただし、これらのタイプのイベントを管理または変更するには、対応するイベントソース、または関連アプリケーションに対するアクセス権が必要です。

イベントのモニタリング

システムの総合的な健全性を監視するために、BI プラットフォームにはモニタリングイベントがあります。これらのイベントは [モニタリング] エリアで作成および管理されるモニタリングプローブに対応します。

7.4.1 ファイルベースのイベント

ファイルベースのイベントは、イベント発生前に特定のファイル(トリガ)が作成されるのを待ちます。

ファイルベースのイベントの発生を待つオブジェクトをスケジュールする前に、まず CMC の[イベント]管理エリアでファイルベースのイベントを作成する必要があります。次に、オブジェクトをスケジュールしてイベントを選択します。

ファイルベースのイベントは、[Event Server]によって監視されます。指定したファイルが作成されると、[Event Server]はイベントを生成します。CMCは、イベントに応じてスケジュールリクエストを送信します。

たとえば、データベース分析プログラムが終了して自動ログファイルが書き込まれた後に、日次レポートを実行するとします。これを行うには、ファイルベースのイベントにログファイルを指定して、そのイベントを依存関係として日次レポートをスケジュールします。ログファイルが作成されると、イベントが生成され、レポートが処理されます。

イベント作成前にすでにファイルが存在する場合は、イベントは生成されません。この場合、ファイルが削除後に再作成されたときのみ、イベントが生成されます。イベントを複数回生成させたい場合は、イベント生成のたびにファイルを削除して再作成する必要があります。

関連情報

[オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定 \[101 ページ\]](#)

7.4.1.1 ファイルベースのイベントの作成

ファイルベースのイベントは、システムイベントフォルダに保存され、管理されます。

1. CMC のイベント管理エリアに移動します。
2. システムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. **管理** > **新規** > **新規イベント** の順に選択します。
4. タイプリストでファイルを選択します。
5. イベント名ボックスにイベントの名前を入力します。
6. 説明ボックスに説明を入力します。
7. サーバリストで、指定したファイルをモニタリングするイベントサーバを選択します。
8. ファイル名ボックスにファイル名を入力します。

イベントサーバが監視するファイルの絶対パス (例: C:\<folder>\<FileName> または /home/<folder>/<FileName>) を入力します。指定するドライブとディレクトリは、イベントサーバから見えるようにしておく必要があります。通常は、ローカルドライブ上のディレクトリを指定してください。

9. イベントのアラートを有効化するには、アラート有効を選択し、アラートメッセージボックスにメッセージを入力します。
イベントが発生すると、送信されるアラート通知にこのメッセージが含まれます。
10. OK をクリックします。

7.4.2 スケジュールベースのイベント

スケジュールベースのイベントは、スケジュールされたオブジェクトに依存します。特定のオブジェクトが処理されると、完了したジョブ、またはスケジュールされたオブジェクトの成功/失敗に基づいてイベントが開始されます。

スケジュールベースのイベントには、スケジュールされたオブジェクトを少なくとも 2 つ関連付ける必要があります。最初のオブジェクトはイベントのトリガとして機能します。つまり、オブジェクトが処理されるときに、イベントが発生します。2 つ目のオブジェクトは、イベントに依存します。つまり、イベントが発生すると、2 つ目のオブジェクトが実行されます。

たとえば、プログラムオブジェクト P1 を実行した後に、レポートオブジェクト R1 と R2 を実行させるとします。このことを行うには、最初にスケジュールベースのイベントを **イベント** 管理エリアに作成します。イベントに対して **成功** オプションを指定します (これは、プログラム P1 の実行に成功したときにのみ、このイベントが生成されることを意味します)。次に、イベント発生に合わせてレポート R1 と R2 をスケジュールします。新しいスケジュールベースのイベントを依存として選択します。イベント発生に合わせてプログラム P1 をスケジュールして、プログラム P1 が正常に完了するとスケジュールベースのイベントが生成されるように設定します。プログラム P1 が正常に実行されると、スケジュールベースのイベントが生成され、レポート R1 と R2 が処理されるようになります。

関連情報

[オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定 \[101 ページ\]](#)

7.4.2.1 スケジュールベースのイベントの作成

スケジュールベースのイベントは、**[システムイベント]** に保存され、管理されます。

1. CMC の **イベント** 管理エリアに移動します。
2. システムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. **管理 > 新規 > 新規イベント** の順に選択します。
4. **新規イベント** ダイアログボックスの **タイプ** リストで、**スケジュール** を選択します。
5. **イベント名** ボックスにイベント名を入力します。
6. **説明** ボックスにイベントの説明を入力します。
7. 次のいずれかのイベントのステータスオプションを選択します。

イベントのステータス	説明
成功	指定したオブジェクトが正常に完了した場合のみ、イベントが発生します。
失敗	指定したオブジェクトが正常に完了しなかった場合のみ、イベントが発生します。
成功または失敗	このイベントは、指定したオブジェクトが完了した場合に発生します。

8. イベントのアラートを有効化するには、**アラート有効** を選択します。
イベントが発生されると、ユーザにアラート通知が送信されます。

9. **OK** をクリックします。

7.4.3 カスタムイベント

カスタムイベントは、明示的に呼び出したときのみ発生します。

他のイベントと同様、カスタムイベントに基づくオブジェクトは、オブジェクトのスケジュールパラメータで設定されている時間枠内にイベントが発生したときのみ実行されます。カスタムイベントは、クリックすると依存スケジュールリクエストが生成されるショートカットを設定できるため、便利です。

たとえば、データベースで情報を更新した後に、多数のレポートをスケジュールしてそれらのレポートを実行するようにします。これを行うには、新しいカスタムイベントを作成して、そのイベントの発生に合わせてレポートをスケジュールします。データベースのデータを更新してレポートを実行する必要がある場合は、CMC のイベントに戻って手動でトリガします。BI プラットフォームでレポートが実行されます。

カスタムイベントは複数回発生させることができます。たとえば、2 組のイベントベースのオブジェクトをスケジュールして、1 組は午前、もう 1 組は午後というように毎日実行させるとします。関連するカスタムイベントを午前に発生させると、1 組のプログラムが実行されます。そのイベントを午後に発生させると、もう 1 組のプログラムが実行されます。午前にイベントを発生させるのを忘れて、午後にだけ発生させた場合、2 組ともプログラムが実行されます。

関連情報

[オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定 \[101 ページ\]](#)

7.4.3.1 カスタムイベントの作成

まずカスタムイベントを作成してから、イベントに依存するオブジェクトをスケジュールし、イベントを発生させます。

1. CMC の**イベント**管理エリアに移動します。
2. カスタムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. **管理** > **新規** > **新規イベント** の順に選択します。
4. **イベント名**ボックスにイベントの名前を入力します。
5. **説明**ボックスにイベントの説明を入力します。
6. イベントのアラートを有効化するには、**アラート有効**を選択し、**アラートメッセージ**ボックスにメッセージを入力します。
イベントが発生すると、このメッセージがアラート通知に含まれます。
7. **OK** をクリックします。

関連情報

[オブジェクトのスケジュール \[70 ページ\]](#)

7.4.3.2 カスタムイベントの呼び出し

1. CMC の **イベント** 管理エリアに移動します。
2. カスタムイベントフォルダを見つけて、開きます。
3. カスタムイベントを選択します。
4. **▶ アクション ▶ イベントの呼び出し ▶** をクリックします。

7.4.4 イベントのアクセス権

ユーザおよびグループに対して、イベントおよびイベントフォルダへのアクセスを許可または拒否して、特定の従業員または部署でのみ使用できるようにイベントを指定することができます (たとえば、管理者や IT 担当者に対して特定のイベントを指定する)。

ユーザは、表示権限のあるイベントのみを表示することができます。権限を使用して、特定のグループに対して適用されないイベントを非表示にすることができます。たとえば、IT 関連のイベントへのアクセス許可を IT 管理グループだけに限れば、人事管理グループのユーザはこれらのイベントを閲覧することはできません。したがって、イベントリストがあれば人事管理グループにも閲覧させることが可能になります。

デフォルトでは、イベントは現在のセキュリティ設定に基づきます。権限は、ユーザの親フォルダから継承されます。

イベントは、イベントタイプに基づいてフォルダに保存されます。各イベントタイプのフォルダ内では、より細かい精度でイベントを並べ替えるためにサブフォルダを作成できます。アクセス権の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手できる *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“アクセス権の設定”の章を参照してください。

8 アラート

8.1 コンセプトのアラート

アラートは、変更についてユーザに通知したり、イベントがトリガされたときにユーザおよび管理者に通知する機能です。アラートを使用して、例外に基づいてオブジェクトとイベントを管理することができます。

アラートの購読

BI プラットフォームでは、ユーザおよび管理者は、ラウンチパッドまたはセントラル管理コンソール (CMC) でアラートを購読できます。

アラートの有効化

レポート作成者は、新しいレポートを作成したときにアラートを有効化します。イベントがトリガされると、通知が購読者の電子メールアドレスまたは BI システム出力先 (ラウンチパッドアカウントなど) に送信されます。

アラート通知の表示

プラットフォームでは、ユーザおよび管理者はラウンチパッドまたは電子メールで通知を表示します。

アラートのタイトル、メッセージ、トリガ時刻などのアラート情報を表示するには、アラートを右クリックして、[\[その他を表示\]](#)を選択します。

アラートの管理

コンテンツ管理者とパワーユーザは、ラウンチパッドまたは CMC でアラートを管理します。

システム管理者は、CMC でアラートを管理し、アクセス権限を割り当ててユーザアクセスを制御します。

例

アラートおよび Crystal レポート

たとえば、Julie は自動車保険会社で働いており、Crystal レポートを使用して提出された保険金請求を監視しています。Julie は日単位の保険金請求数アラートを購読しており、アラート通知を電子メールで受け取ることを選択しました。1 週間

後、自動車保険の保険金請求数が 10,000 件に達し、アラートの条件が満たされて、イベントがトリガされました。Julie は電子メール通知を受け取り、自動車保険の保険金請求数が大幅に増加していることに気がきます。Julie はマネージャに通知し、安全運転を呼びかけるキャンペーンの開始を推奨します。

8.1.1 アラートソース

モニタリングでは、アラートを使用して、BI プラットフォームの全体的な状態の変化をシステム管理者に通知します。

モニタリングプローブに基づくアラートは、CMC の **イベント** 領域の **Monitoring Events** フォルダにあります。モニタリングの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

Information Steward および Event Insight などのアプリケーションで作成されたオブジェクトにも、アラートが使用されます。詳細については、アプリケーションのドキュメントを参照してください。

アラートをサポートするオブジェクト	説明
Crystal レポート	Crystal レポートには、複数のアラートを含めることができます。アラートを含むレポートをリポジトリに追加すると、BI プラットフォームはレポートの各アラートに対応するイベントオブジェクトを自動的に作成します。イベントオブジェクトは、セントラル管理コンソール (CMC) の イベント の下の Crystal Reports Events フォルダにあります。 [コンテンツ検索] を使用してアラートを検索できます。 プラットフォームで作成されたレポートのみがアラートをサポートし、レポートが追加された場合にユーザがアラート通知を購読することができます。購読するには、レポートを見つけ、レポートオブジェクトで購読タスクを実行します。
イベント (ファイルベース、スケジュールベース、カスタム)	任意のイベントに対して、アラートを有効化することができます。

8.1.2 アラートワークフロー

Crystal レポートのアラートワークフロー [crystal レポートノアラートワークフロー]

- レポート作成者が、SAP Crystal Reports for Enterprise においてアラートを含むレポートを作成します。
- レポート作成者またはコンテンツ管理者が、セントラル管理コンソール (CMC) の **フォルダ** または **個人用フォルダ** エリアのフォルダに Crystal レポートを追加します。レポートが追加されると、BI プラットフォームにより、レポートのアラートに基づいてレポートイベントオブジェクトが自動的に作成されます。
- ユーザが CMC または BI ラウンチパッドにログオンし、Crystal レポートを検索して、アラートを購読します。
- レポート作成者またはコンテンツ管理者が、Crystal レポートの実行をスケジュールします。
アラート条件が満たされた場合、アラートがトリガされ、購読設定に基づいてユーザに通知が送信されます。

イベントのアラートワークフロー

1. コンテンツ管理者が CMC でイベントを作成し、新規イベントに対してアラートを有効化します。
2. ユーザが CMC の **イベント** エリアでアラートを確認するか、ラウンチパッドでアラートを検索して、アラートを購読します。
3. イベントが発生し、アラートがトリガされます。
4. イベントが発生したことを示す通知が、購読設定に基づいてユーザに送信されます。

8.1.3 アラートと Crystal レポートアラート通知の相違点

旧バージョンの BI プラットフォームでは、レポートのスケジュール時に Crystal レポートのアラート通知を設定することができました。プラットフォームは、SAP Crystal Reports で作成されたレポートについては、この機能を引き続きサポートします。

表 45:

主な相違点	Crystal レポートにおけるアラート通知	BI ラウンチパッドにおけるアラート
サポートされるオブジェクト	Crystal Reports で作成されたレポート	<ul style="list-style-type: none">• Crystal Reports のみで作成されたレポート• イベント• モニタリングプローブ• Information Steward アラート• Event Insight アラート
サポートされる送信先	電子メール	<ul style="list-style-type: none">• BI 起動パッドの [マイアラート]• 電子メール
用法	<p>アラートは Crystal レポートをスケジュールするときに設定します。</p> <p>受信者には Enterprise ユーザまたは動的ユーザを指定することができます。すべての受信者の電子メールアドレスを手動で入力する必要があります。</p>	<p>アラートソースからのアラート通知を購読し、必要に応じて購読を変更することができます。</p> <p>受信者には Enterprise ユーザまたは動的ユーザを指定することができます。動的受信者の場合は、電子メールアドレスを手動で入力する必要があります。</p>

8.1.4 CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索

アラートソースは、オブジェクトタイプに基づいて異なる場所に格納されます。下の表は、各種アラートソースを検索する方法をまとめたものです。

オブジェクト (アラートソース)	CMC での場所
Crystal レポート	[フォルダ] または [個人用フォルダ] エリア

オブジェクト (アラートソース)	CMC での場所
	アラートをサポートするシステムにおけるすべての Crystal レポートアラートのリストは、CMC の [イベント] エリアの [Crystal Reports のイベント] フォルダにあります。アラートを購読するには、Crystal レポートを [フォルダ] または [個人用フォルダ] エリアに格納します。
イベント (ファイルベース、スケジュールベース、カスタム)	[イベント] エリア [イベント] は、イベントタイプで整理されます。アラートが有効化されたイベントは、  アイコンで示されます。

8.1.5 アラートに必要なアクセス権

アラートワークフローにおけるロールと責任によって、必要なアクセス権が異なる可能性があります。

表 46:ドキュメントアラート権限

ロール	タスク	必要な権限
ユーザ	ドキュメントアラートの購読	<ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示権限 関連イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限 <p>アラート通知に含まれるドキュメントリンクを使用してインスタンスを表示する場合、ドキュメントに対するインスタンスの表示権限も必要です。</p>
ユーザ	ドキュメントアラートの購読解除	<ul style="list-style-type: none"> 関連イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限
ユーザ	ドキュメントアラートに関する通知の受信	<ul style="list-style-type: none"> 関連イベントに対する表示権限 ドキュメントに対する表示権限
コンテンツ管理者	ドキュメントアラートの送信先およびパラメータ設定の管理	<ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する編集権限 イベントに対する編集権限

ロール	タスク	必要な権限
コンテンツ管理者	ドキュメントのアラート設定の管理	<ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示権限および編集権限 関連イベントに対する表示権限および編集権限 購読者として追加されるユーザまたはグループに対する表示権限および購買権限 <p>購読者のリストにユーザグループを追加する場合は、ユーザグループオブジェクトに対する表示権限および購読権限が必要です。グループ内の個別ユーザに対する表示権限および購読権限では不十分です。</p>
コンテンツ管理者	ユーザのドキュメントアラートの購読解除	<ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示権限 関連イベントに対する表示権限 ユーザに対する表示権限および購買権限
コンテンツ管理者	ドキュメントアラートのトリガ	<ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示権限およびスケジュール権限 関連イベントに対する表示権限およびトリガ権限

表 47: イベントアラート権限

ロール	タスク	必要な権限
ユーザ	イベントアラートの購読	<ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限。デフォルトで、各ユーザは自分のアカウントに対する購読権限が付与されています。
ユーザ	イベントアラートの購読解除	<ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限。デフォルトで、各ユーザは自分のアカウントに対する購読権限が付与されています。
コンテンツ管理者	イベントのアラート設定の管理	<ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示権限および編集権限 購読者として追加されるユーザまたはグループに対する表示権限および購買権限 <p>購読者のリストにユーザグループを追加する場合は、ユーザグループオブジェクトに対する表示権限および購読権限が必要です。グループ内の個別ユーザに対する表示権限および購読権限では不十分です。</p>
コンテンツ管理者	イベントのトリガ	イベントに対する表示権限およびトリガ権限

表 48: アラート通知権限

ロール	タスク	必要な権限
ユーザ	アラート通知の受信	関連イベントに対する表示権限

ロール	タスク	必要な権限
ユーザ	アラート通知の既読または未読への設定	<ul style="list-style-type: none"> アラート通知に対する表示権限 ユーザアカウントに対する購読権限
ユーザ	アラート通知の再読	アラート通知に対する表示権限
ユーザ	BI 起動パッドにおけるアラート通知の削除	<ul style="list-style-type: none"> アラート通知に対する表示権限 ユーザアカウントに対する購読権限

8.1.6 購読の不整合の解決

グループメンバーシップの結果として、ユーザの購読設定が不整合の原因となる可能性があります。

購読設定の不整合が発生すると、アラートは以下の方法でそれを解決します。

- ユーザに対する設定により、グループメンバーシップから継承されたすべての設定が上書きされます。
- サブグループに対する設定により、グループから継承されたすべての設定が上書きされます。

ユーザが階層で等しいレベルにある 2 つのグループから異なる購読設定を継承することがあります。この場合、ユーザはそれぞれの設定に基づいてアラート通知を受け取ります。

[除外する] リストは、その他すべての購読設定より優先されます。アラートを購読しているものの、[除外する] リストに含まれているユーザは、アラート通知を受け取りません。



例

階層で等しいレベルにある 2 つのグループからの購読設定

Julie は、北米販売グループと南米販売グループに属しています。どちらのグループも、もう 1 つのグループのサブグループではありません。北米販売グループは収益アラート通知を電子メールと BI 受信トレイで受け取り、南米販売グループは収益アラート通知を電子メールのみで受け取ります。Julie は両方のグループに属しているため、収益アラート通知を電子メールと BI 受信トレイで受け取ります。レポートに定義済みのパラメータ（“北米”および“南米”の地域パラメータ値など）がある場合、Julie は個別の電子メールアラート通知を受け取ります。それ以外の場合、アラートは 1 件の電子メールにまとめられます。

8.1.7 アラートのベストプラクティス

- Crystal レポートのアラートの名前変更は行わないようにしてください。BI プラットフォームは、名前変更された Crystal レポートアラートを新しいオブジェクトとして解釈します。アラートを名前変更すると、アラートの購読設定は失われます。
- Everyone グループではなく、特定のグループを購読者として指定します。
- 大容量のアラートに対しては、BI ラウンチパッドではなく電子メールを出力先に使用してください。BI ラウンチパッドに送信されるアラートメッセージはシステムに格納されます。アラートメッセージが蓄積されると、システムのパフォーマンスを低下させる可能性があります。

8.2 アラートタスク

8.2.1 イベントのアラートの有効化

アラートは、アラートを含む Crystal レポートに対して自動的に有効化されます。つまり、ユーザは、レポートがリポジトリに追加された瞬間から、レポートアラートを購読することができます。

イベントのアラートを有効化するには、新しいイベントの作成時にアラートを有効化するなどの追加の手順が必要になります。

1. CMC の **イベント** 管理エリアに移動します。
2. アラートを有効化するイベントを検索し、選択します。
3. **管理** > **プロパティ** の順に選択します。
4. **[プロパティ]** ダイアログボックスのナビゲーションペインで、**[イベントの設定]** をクリックします。
5. **[アラート有効]** チェックボックスをオンにし、アラートがトリガされたときに購読者に送信されるメッセージを **[アラートメッセージ]** ボックスに入力します。
スケジュールベースのイベントに対してメッセージを入力することはできません。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

8.2.2 アラートの購読

1. CMC の **イベント** 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. **アクション** > **購読** を選択します。
4. **パブリケーションの購読** ダイアログボックスの **出力先** で、アラートの出力先を選択します。

オプション	説明
マイアラート	このチェックボックスをオンにすると、アラート通知がビジネスインテリジェンスシステム (BI ラUNCHパッドなど) の送信先に送信されます。
電子メール	このチェックボックスをオンにすると、アラート通知が BI プラットフォームのユーザアカウントに対して指定された電子メールアドレスに送信されます。送信先は、ユーザアカウントに対して電子メールアドレスが指定されている場合にのみ使用することができます。 電子メールアドレスが有効であり、正しく入力されていることを確認します。電子メールアドレスが正しくない場合、アラート通知を受け取ることができません。

5. 複数のドキュメントが **[アラート]** に一覧表示されている場合、受信する各アラートのチェックボックスをオンにします。
6. アラートのパラメータを指定するには、**[パラメータ]** で **[編集]** をクリックして、パラメータ値を変更します。
ドキュメントがパーソナライズされている場合、アラートのチェックボックスにマウスを重ねると、パーソナライゼーションの詳細が表示されます。
7. 必要に応じて、残りのアラート購読オプションを設定します。

アラートソースによっては、その他の購読オプションが表示される場合があります。たとえば、複数のアラートを含む Crystal レポートの場合、購読するアラートを選択する必要があります。

8. [OK](#) をクリックします。

次回アラートがトリガされると、通知が選択した送信先に送信されます。アラート通知を別の出力先に送信するには、アラートソースを選択し、[▶ アクション ▶ 購読の変更](#) の順に選択します。このオプションを使用して、アラートを購読する Crystal レポートを選択することもできます。

アラートソースのカスタム設定を指定しない場合、通知は、アラートアプリケーションに対して設定された出力先デフォルトを使用して送信されます。

関連情報

[アラートソースのアラート設定の管理 \[126 ページ\]](#)

[CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索 \[119 ページ\]](#)

8.2.3 アラートの購読解除

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読解除](#) を選択します。
4. [\[アラートの購読解除\]](#) ダイアログボックスで確認を求めるメッセージが表示されたら、[\[購読解除\]](#) をクリックします。

8.2.4 他のユーザのアラートの購読の解除

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読者の管理](#) を選択します。
4. [購読者の管理](#) ダイアログボックスのナビゲーションペインで、[受信者一覧](#) をクリックします。
5. アラートの購読を停止するユーザまたはユーザグループを選択し、[\[購読解除\]](#) をクリックします。

8.2.5 他のユーザのアラートの購読

1. CMC の [イベント](#) 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. [▶ アクション ▶ 購読者の管理](#) を選択します。

4. **[購読者の管理]** ダイアログボックスのナビゲーションペインで、**[受信者一覧]** をクリックします。
5. 新しい購読者を追加するには、次の手順を実行します。
 - a. **追加** をクリックします。
 - b. **[購読者の追加]** ダイアログボックスで、**[>]** ボタンを使用して、ユーザおよびグループを **[利用可能]** リストから **[購読済み]** リストに移動させ、**[デフォルト購読の追加]** をクリックします。
 - c. **[購読の編集]** ダイアログボックスで、必要に応じてアラートおよび送信先オプションを設定します。
たとえば、購読するアラート（アラートソースに複数のアラートが含まれる場合）を変更することができます。アラートソースによっては、その他の設定も行うことができます。
 - d. **保存して閉じる** をクリックします。
6. 購読者の設定を編集するには、次の手順を実行します。
 - a. **[購読者]** 列でユーザを選択し、**[編集]** をクリックします。
 - b. ユーザが受信するアラートを編集するには、**[購読の編集]** ダイアログボックスのナビゲーション一覧で、**[アラート]** をクリックし、ユーザが購読する各アラートのチェックボックスをオンにします。
アラートソースに複数のアラートが含まれている場合、各アラートが一覧表示されます。複数のアラートが含まれていない場合、1つのアラートのみが表示されます。
 - c. アラートの送信先を編集するには、ナビゲーション一覧で **[送信先]** をクリックし、アラートの各送信先のチェックボックスをオンにします。

Adaptive Job Server で有効化および設定されている電子メール送信先のみを使用できます。電子メール送信先が設定されていない場合、**[マイアラート]** チェックボックスのみが表示されます。
 - d. 使用可能な場合、必要に応じて他のアラートオプションを設定します。
アラートソースによっては、その他のオプションも使用できます。
 - e. **保存して閉じる** をクリックします。
7. **[購読者の管理]** ダイアログボックスで、**[保存して閉じる]** をクリックします。

8.2.6 アラート通知の別のユーザの BI 受信ボックスへの転送

[マイアラート] から別のユーザの BI 受信ボックスにアラート通知を転送できます。

1. BI ラウンチパッドの**ドキュメント**タブで**マイドキュメント**ドロワを展開し、**マイアラート** をクリックします。
2. 転送するアラート通知を右クリックし、**整理 > 転送** を選択します。
3. アラートを転送するユーザの BI 受信ボックスを入力し、**[OK]** をクリックします。

8.2.7 アラートからのユーザの除外

ユーザの除外は、グループの少数ユーザのみを購読者として指定する場合に有用です。グループ全体を購読者として指定してから、アラート通知を受け取る必要がないユーザを除外します。

[除外する] リストは、ユーザのその他すべての購読設定より優先されます。

1. CMC の**イベント**管理エリアに移動します。

2. アラートソースを見つけて選択します。
3. **▶ アクション ▶ 購読者の管理** を選択します。
4. **購読者の管理** ダイアログボックスで、ナビゲーションパネルの **除外リスト** を選択します。
5. **[>]** ボタンを使用して、ユーザまたはグループを **[利用可能]** リストから **[除外する]** リストに移動させます。
6. **保存して閉じる** をクリックします。

関連情報

CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索 [119 ページ]

8.2.8 アラートソースのアラート設定の管理

アラートソースのアラート設定を変更しない限り、通知はアラートアプリケーションのデフォルト送信先設定を使用して送信されます。

1. CMC の **イベント** 管理エリアに移動します。
2. アラートソースを見つけて選択します。
3. **▶ アクション ▶ アラート設定の管理** を選択します。
4. **アラート設定の管理** ダイアログボックスで、BI ラウンチパッドを出力先として有効化するには、**マイアラートの有効化** チェックボックスを選択します。
このオプションをオンにすると、アラート通知が購読者の BI ラウンチパッドアカウントに送信され、購読者はアラート通知をラウンチパッドの **マイアラート** で表示できます。
5. 送信先として電子メールを有効化するには、**[電子メールを有効にする]** チェックボックスをオンにし、**[デフォルト電子メール設定を使用]** または **[カスタム電子メール設定を使用]** を選択します。
[デフォルト電子メール設定を使用] を選択した場合、**[アプリケーション]** エリアで設定されたアラート値からデフォルト設定が生成されます。
6. **[カスタム電子メール設定を使用]** を選択した場合、必要に応じて次のアクションを実行します。
 - a. **差出人** ボックスで、差出人の電子メールアドレスを入力するか、**プレースホルダの追加** リストから電子メールアドレスの変数を選択します。
 - b. **宛先** ボックスで、アラート通知を送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、**プレースホルダの追加** リストから電子メールアドレスの変数を選択します。
 - c. **CC** ボックスで、アラート通知を送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、**プレースホルダの追加** リストから電子メールアドレスの変数を選択します。
 - d. **BCC** ボックスで、アラート通知を送信する非公開の各受信者の電子メールアドレスを入力するか、**プレースホルダの追加** リストから電子メールアドレスの変数を選択します。
 - e. **件名** ボックスで、アラート通知の件名を入力するか、**プレースホルダの追加** リストから件名の変数を選択します。
 - f. **メッセージ** ボックスで、アラート通知の本文のメッセージを入力するか、**プレースホルダの追加** リストからメッセージの変数を選択します。
 - g. アラート通知に添付ファイルを追加する場合は、**[添付ファイルの追加]** チェックボックスをオンにします。
 - h. **[ファイル名]** で、**[自動で生成された名前を使用する]** または **[指定の名前を使用する]** を選択します。**指定の名前を使用する** を選択した場合、ファイル名を入力するか、リストのプレースホルダを選択します。

-
- i. ファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、[[ファイル拡張子を追加する](#)] チェックボックスをオンにします。

ファイル名にファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開くことができません。

7. [保存して閉じる](#)をクリックします。

関連情報

[CMC におけるアラートソースオブジェクトの検索 \[119 ページ\]](#)

9 プロファイルの管理

9.1 プロファイルの仕組み

プロファイルは、パブリケーションと共に動作し、コンテンツをパーソナライズします。

オブジェクトとしてのプロファイル

プロファイルは、ユーザおよびグループを分類する BI プラットフォーム内のオブジェクトでもあります。プロファイルは、レポート内のデータを個人用にカスタマイズするために使用されるプロファイル値に、ユーザとグループをリンクします。プロファイルは、プロファイルのレポートへの適用方法を示した "プロファイルターゲット" も使用します。異なるプロファイル値を割り当てることで、レポート内のデータを特定のユーザまたはグループに合わせて調整できます。多くの異なるカスタマイズバージョンのレポートがユーザに配信されます。

プロファイルおよびロール

プロファイルは、組織構造の中でのユーザとグループのロールを反映することがあります。たとえば、部署プロファイルに組織のすべての従業員を含むようにできます。ユーザとグループのそれぞれのプロファイル値は、組織内のロールを反映します (たとえば、"財務"、"販売"、"マーケティング" など)。公開者がパブリケーションに部署プロファイルを適用すると、従業員は自分の部署に関連したデータを受け取ります。

プロファイルおよびドキュメントコンテンツ

プロファイルは、ドキュメントのコンテンツを詳細に設定したり、フィルタリングしたりするために使用され、データへのアクセスは管理しません。プロファイルを使用してデータのサブセットをユーザに表示することは、ユーザにデータ参照の制約をかけることとは異なります。ユーザに適切なアクセス権があってドキュメントの元の形式にアクセスした場合、BI 起動パッドまたは CMC でドキュメントを表示することにより、そのドキュメントの完全データを参照できます。プロファイルは、データソースからクエリされたデータを変更またはセキュリティ保護することなく、データのビューをフィルタリングします。

9.1.1 プロファイルと公開のワークフロー

プロファイルを使用したパブリケーションをパーソナライズするためのプロセスは 2 つの部分で構成されます。最初に、CMC の **プロファイル** エリアでプロファイルを定義してから、パブリケーションを作成して、プロファイルをこれに関連付けます。

プロファイルを定義するには、次のタスクを実行します。

1. プロファイルの作成
2. プロファイルにユーザおよびグループを追加する。
3. プロファイルの各ユーザおよびグループにプロファイル値を割り当てる。
4. 必要に応じて、グローバルプロファイルターゲットを指定する。

パブリケーションを作成した後に、次のタスクを実行します。

1. 受信者としてユーザおよびグループを追加します。
2. プロファイルのローカルプロファイルターゲットを指定してフィルタを適用する (Crystal レポート内のフィールドなど)。
3. パーソナライゼーションで使用するプロファイルを指定します。

関連情報

[パーソナライゼーション \[152 ページ\]](#)

9.1.2 プロファイルの作成

1. CMC の [\[プロファイル\]](#) 管理エリアに移動します。
2. [▶ 管理 ▶ 新規 ▶ 新しいプロファイル ▶](#) の順に選択します。
3. [\[新規プロファイルの作成\]](#) ダイアログボックスで、[\[タイトル\]](#) ボックスにプロファイルの名前を入力します。
4. [\[説明\]](#) ボックスにプロファイルの説明を入力し、[\[OK\]](#) をクリックします。

9.2 プロファイルターゲットおよびプロファイル値

プロファルを使用してパブリケーションを個人用にカスタマイズするには、プロパティのプロファイル値とプロファイルターゲットを設定する必要があります。

プロファイルターゲット

プロファイルターゲットとは、個人用にカスタマイズされたパブリケーションを提供するために、プロファイル値がフィルタを適用したり、対話するデータソースです。プロファイルターゲットには次の 2 つの種類があります。

表 49:

プロファイルターゲットのタイプ	説明
ローカル	ローカルプロファイルターゲットは、Web Intelligence ドキュメントの変数、または Crystal レポートのフィールドまたはパラメータにすることができます。ローカルプロファイルターゲットを使用する場合、ローカルプロファイルターゲットを含むソースドキュメントはパブリケーションの受信者に対してフィルタ処理されます。
グローバル	<p>グローバルプロファイルターゲットはユニバースにすることができます。同様に、ユニバース内のオブジェクトを指定する必要があります。このタイプのプロファイルターゲットは、ユニバースを使用するすべてのソースドキュメントをフィルタ処理できます。</p> <p>グローバルプロファイルターゲットは、Web Intelligence ドキュメントを含む（ただし、Crystal レポートは含まない）パブリケーションで使用できます。</p>

プロファイル値

プロファイル値は、特定のユーザまたはグループをプロファイルに割り当てるときに、これらのユーザやグループの詳細を示す属性です。プロファイルがパブリケーションに適用されると、そのプロファイルに割り当てられたユーザおよびグループは、自らに設定されたプロファイル値に従ってフィルタ処理されたパブリケーションバージョンを受信します。

プロファイル値をユーザとグループの両方に割り当てる場合、セキュリティ設定の場合と同様に、継承も有効になる点に注意してください。詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手できる *SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド* の“アクセス権の設定”の章を参照してください。

プロファイルターゲットおよびプロファイル値の使用

プロファイルターゲットとプロファイル値により、プロファイルは受信者に合わせてパブリケーションをカスタマイズできます。プロファイルに対して指定されているユーザとグループは、自身に最も関連するデータのみを表示する、同じパブリケーションのフィルタ済みバージョンを受け取ります。

グローバルな売上レポートを、北米、南米、アジアにある会社の地域営業チームに配布する例を考えます。各地域営業チームは、その地域に固有のデータのみ表示する必要があります。管理者は、“地域営業”プロファイルを作成し、各地域営業チームをグループとしてプロファイルに追加します。管理者は各地域の営業チームに対応するプロファイル値を割り当てます（たとえば、北米の営業チームには、“北米”を割り当てます）。公開中に、公開者はグローバルな売上レポートの“地域”フィールドをローカルプロファイルターゲットとして使用し、レポートにプロファイルを適用します。各地域営業チームに設定されたプロファイル値に従って、グローバルな売上レポートがフィルタ処理されます。グローバルな売上レポートが配布されると、各地域営業チームはその地域の売上データのみを表示する、カスタマイズされたバージョンを受信します。

9.2.1 プロファイルへのグローバルプロファイルターゲットの指定

ローカルプロファイルターゲットは、公開プロセス中に指定します。

1. CMC の**プロファイル**管理エリアに移動します。
2. プロファイルターゲットを指定するプロファイルを検索し、選択します。
3. **アクション** > **プロファイルターゲット** の順に選択します。
4. **プロファイルターゲット**ダイアログボックスで、**追加**をクリックします。
5. **ユニバース名**一覧でユニバースを選択します。
6. **クラス名**ボックスにクラス名を入力するか、**ユニバースからオブジェクトを選択します**をクリックします。
7. **変数名**ボックスに変数名を入力するか、**ユニバースからオブジェクトを選択します**をクリックします。
8. **OK**をクリックします。

9.2.2 プロファイル値の指定

プロファイル値として、静的な値、式、または変数を使用できます。

最も一般的なプロファイル値の種類は、静的な値で、すべてのソースドキュメントの種類フィルタ処理に使用できます。1つのプロファイルのユーザまたはグループに対して、複数の静的な値を入力することもできます。たとえば、複数の部署からデータを受信する管理者は、“部署”プロファイルの静的なプロファイル値として“製造”、“設計”、“マーケティング”などを指定できます。

式は、ソースドキュメントの種類に固有の構文を使用します。SAP Crystal Reports および Web Intelligence 式を使用して、複雑なパーソナライゼーションとフィルタ処理を実行できます。ユーザに対して値の範囲、または指定された値よりも大きいあるいは小さい値の範囲をフィルタ処理する場合に、式が役に立ちます。

プロファイル値としてユーザ情報を使用する場合は、ユーザ名、フルネーム、および電子メールアドレスの変数を使用できます。これらの変数は、ユーザ情報にマップされてプレースホルダとして機能します。プロファイルをパブリケーションに適用すると、システムはユーザの最新情報を取得します。

プロファイル値に変数を使用することによって、情報の手動入力に関連する管理コストおよび発生する可能性のあるエラーを減らすことができます。管理者が AD ユーザをシステムにマップし、ユーザを 2 つのプロファイルに追加する状況を考えてみます。管理者はユーザのデータに使用する変数を指定することで、プロファイル値ごとに手動で情報を入力する手間がなくなり、入力エラーは発生しなくなります。

サードパーティユーザの場合、ユーザの情報が外部のシステムで変更されると、BI プラットフォーム内のデータはパブリケーションが実行されたときにそれらの変更を反映して更新されます。たとえば、外部ディレクトリのユーザ属性によって上書きされるべきでないデータが含まれるサードパーティユーザアカウントについては、そのユーザオブジェクトの**プロパティ**ダイアログボックスで、**フルネーム**と**電子メールアドレス**の**インポート**チェックボックスをオフにして、データが上書きされないようにします。

静的な値のプロファイル値は、ソースドキュメントの文字列フィールドだけをフィルタ処理できます。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。

9.2.2.1 ユーザまたはグループにプロファイル値を指定する

値を指定するプロファイルで開始することによって同じ結果を導き出すことができます。

異なるタイプのプロファイル値（静的なプロファイル値か式、またはシステムにマップされているサードパーティのユーザおよびグループに対する変数プロファイル値など）を使用することができます。

1. CMC の **プロファイル** または **ユーザとグループ** 管理エリアに移動します。
2. 値を指定するプロファイルを選択するか、またはプロファイル値を指定するユーザまたはユーザグループを選択します。
3. **アクション** > **プロファイル値** を選択します。
4. **プロファイル値** ダイアログボックスで、**追加** をクリックします。
5. **選択** をクリックします。
6. ユーザまたはグループ（それぞれ複数可）を選択し、**[>]** をクリックして右側の一覧に選択したものを移動します。
7. **OK** をクリックします。
8. 選択したユーザまたはグループのプロファイル値を入力します。
 - 値を追加するには、**値** をクリックして、**新しい値** ボックスに値を入力してから **追加** をクリックします。
パーソナライゼーションのためにプロファイルでフィルタ処理できる値がユーザまたはグループに含まれていない場合は、ユーザまたはグループに複数の静的な値を追加して、静的なプロファイル値として **%NULL%** を使用できます。
 - フィルタ式を使用する場合、**フィルタ式** をクリックして、**Web Intelligence 式** ボックスまたは **Crystal Reports 式** ボックスに式を入力します。複数のドキュメントの種類にプロファイルを適用するには、3 つのボックスすべてにフィルタ式を入力します。
Web Intelligence 式を使用するには、最初にプロファイルに対するグローバルプロファイルターゲットを指定します。
9. **OK** をクリックします。

関連情報

[プロファイル値としての変数の使用 \[132 ページ\]](#)

9.2.2.2 プロファイル値としての変数の使用

ユーザまたはユーザグループをプロファイルに追加すると、ユーザのフルネーム、アカウント名、または電子メールアドレスに変数プロファイル値を指定することができます。

以下の表は、プロファイルを具体化する際に使用可能なプレースホルダ変数について説明しています。

変数	説明
タイトル	ユーザまたはユーザグループのアカウント名との関連付け
ユーザのフルネーム	ユーザまたはユーザグループのフルネームとの関連付け

変数	説明
電子メールアドレス	ユーザまたはユーザグループの電子メールアドレスとの関連付け 電子メールアドレス変数をユーザグループの共通の電子メールアドレスにマップすると、BI プラットフォームが変数を解決して、グループの各メンバーの個別の電子メールアドレスを取得します。

1. CMC の **プロフィール** 管理エリアに移動します。
2. ユーザまたはユーザグループを追加するプロフィールを見つけて選択します。
3. **アクション** > **プロフィール値** の順に選択します。
4. **プロフィール値** ダイアログボックスで、**追加** をクリックします。
5. **選択** をクリックします。
6. 左側の一覧からユーザまたはグループを選択し、> をクリックして右側の一覧にユーザまたはグループを移動します。
7. **OK** をクリックします。
8. **[値]** をクリックします。
9. **プレースホルダの追加** 一覧でプレースホルダ変数を選択し、**追加** をクリックします。
プレースホルダは、**既存値** ボックスに表示されます。
10. **OK** をクリックします。

プロフィールを使用してパブリケーションをパーソナライズする場合、サードパーティユーザのプロフィール値は最新のユーザ情報で自動的に更新されます。たとえば、最後にパブリケーションを実行した後にユーザの電子メールアドレスが変更された場合、次にパブリケーションを実行すると、プロフィール値に使用されている電子メールアドレスが変更されます。

9.3 プロファイル間の競合の解消

ユーザおよびグループが複数のプロフィールに割り当てられている場合、プロフィール間の競合が発生します。2 つの競合するプロフィールを持つドキュメントをユーザに配布する場合、この競合を解消する必要があります。

たとえば、トニーはメキシコオフィスの製品マネージャです。彼には、メキシコのデータのみを表示するように彼のドキュメントをパーソナライズする "地域" というプロフィールが割り当てられています。また、製品マネージャにデータを表示するように、彼のドキュメントをパーソナライズする "マネジメント" というプロフィールも割り当てられています。

これらのプロフィールを両方とも使用するドキュメントでは、トニーにどのようなデータが表示されるのでしょうか。1 つのプロフィールに従えば、メキシコのデータを参照します。もう 1 つのプロフィールに従うと、製品マネージャのデータのみを参照します。

このような不整合を解決するには、BI プラットフォームで以下のオプションのいずれかを使用してください。

- **マージしない:** BI プラットフォームは、パブリケーションで考えられるすべてのビューを判別し、それぞれの場合に固有のビューを使用します。例では、トニーはメキシコのデータを表示するようにパーソナライズされたパブリケーションと、製品マネージャのデータを表示するパブリケーションを受け取ります。
- **マージする:** プラットフォームは考えられる異なるデータビューを判別し、競合していないプロフィールをマージします。この種類のプロファイルの解決は、ロールベースのセキュリティに対して設計されます。例では、トニーはメキシコの製品マネージャのデータを表示するようにパーソナライズされた単一のパブリケーションを受け取ります。

マージしない/マージするシナリオは、継承されたプロフィール値のみに適用されます。ユーザが 2 つのプロフィール値に明示的に割り当てられている場合、パブリケーションインスタンスは必ずマージされます。

パブリケーションを定義する際に、プロファイルの解決の設定を指定します。

関連情報

[CMC におけるプロファイルの解決方法の選択 \[191 ページ\]](#)

9.3.1 プロファイル値の競合

グループメンバーシップの結果としてユーザが 2 つの相反するプロファイル値を継承したときに、プロファイル値の競合が発生することがあります。

通常、明示的に割り当てられたプロファイル値は、グループメンバーシップから継承したプロファイル値より優先されます。ユーザまたはサブグループに割り当てられたプロファイル値は、グループメンバーシップから継承したプロファイル値より優先されます。

たとえば、David は "北アメリカ営業" グループと "カナダ営業" グループに所属しています。"カナダ営業" グループは "北アメリカ営業" グループのサブグループです。2 つのグループが両方とも "地域" プロファイルに追加されます。David は、"北アメリカ営業" グループからは "地域" プロファイル値 "北アメリカ" を継承し、"カナダ営業" グループからは "カナダ" を継承します。この場合、サブグループに割り当てられるプロファイル値はグループに割り当てられるプロファイル値より優先され、David はカナダに対するデータのパブリケーションを受信します。

ユーザに対して、グループメンバーシップから継承したプロファイルと相反するプロファイル値が明示的に割り当てられたときにも、プロファイル値の競合が発生します。たとえば、Paula は "北アメリカ営業" グループに所属し、その "地域" プロファイル値は "北アメリカ" です。管理者が、Paula に "地域" プロファイル値として "スペイン" を割り当てました。この場合、メンバーに割り当てられるプロファイル値はグループから継承したプロファイル値より優先され、Paula はスペインに対するデータのパブリケーションを受信します。

しかし、2 つの異なるグループから、1 つのプロファイルに対して異なるプロファイル値を継承することがあります。どちらのグループも階層上は対等で、一方が他方のサブグループではない場合、どちらのプロファイルも他方より優先されません。この場合、両方のプロファイルが有効になり、ユーザは各プロファイル値に対するパブリケーションインスタンスを受信します。

このようにプロパティ値が競合すると、重複するレポートインスタンスが複数の異なるパブリケーションインスタンスに含まれ、同じユーザに送信される場合があります。たとえば、2 つの北米オフィスのマネージャを務める Sandra は、2 つのレポートを含むパブリケーションを電子メールで受信しています。レポート 1 は、レポートプロファイルを使用してカスタマイズされています。このレポートプロファイルで Sandra はグループメンバーシップから競合するプロファイル値 "米国" および "カナダ" を継承します。レポート 2 は役割プロファイルを使用してカスタマイズされています。この役割プロファイルで Sandra はプロファイル値 "マネージャ" を継承します。プロファイル値の競合がない場合は、パーソナライゼーションの後に、Sandra はマージされたレポート 1 インスタンス (米国とカナダのデータ) およびレポート 2 インスタンス (マネージャデータ) を含む 1 つの電子メールを受信します。競合がある場合、Sandra は 2 つの電子メールを受信します。1 つの電子メールには、レポート 1 の米国のインスタンスが含まれ、もう 1 つの電子メールにはレポート 1 のカナダのインスタンスが含まれています。どちらの電子メールにも、同じレポート 2 のマネージャインスタンスが含まれています。

重複するパブリケーションインスタンスの送信の原因となるプロファイル値の競合をできる限り防ぐには、ユーザがグループメンバーシップからプロファイル値を継承できるようにする代わりに、プロファイル値をユーザに明示的に割り当てます。

9.4 プロファイルのアクセス権の指定

ユーザおよびグループに対して、プロファイルへのアクセスを許可または拒否することができます。プロファイルの構成方法によっては、特定の従業員または部署だけが特定のプロファイルを利用できるようにすることができます。

CMC に対するアクセス権があるユーザは、参照するアクセス権のあるプロファイルだけを閲覧できるので、アクセス権を使用して特定のグループに対してプロファイルを非公開にすることもできます。たとえば、IT 関連のプロファイルへのアクセス許可を IT 管理グループだけに限れば、人事管理グループのユーザはこれらのプロファイルを閲覧することはできません。したがって、プロファイルリストがあれば人事管理グループにも閲覧させることが可能になります。

BI プラットフォーム内のアクセス権モデルの詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手できる *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム 管理者ガイド の“アクセス権の設定”の章を参照してください。

10 公開

10.1 公開について

公開により、Crystal レポートおよび Web Intelligence ドキュメントなどのドキュメントはディスクに保存され、BI プラットフォームで Web の表示、アーカイブ、取得、スケジュール用に管理されて、電子メールまたは FTP サーバ経由で自動的に使用可能になります。

BI ラUNCHパッドまたはプラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) を使用して、ドキュメントを異なるそれぞれのユーザー (受信者) 用にカスタマイズしたり、スケジュールして一定の間隔で実行したり、また、BI 受信ボックスや電子メールアドレスなどの複数の出力先に送信したりすることができます。

10.1.1 パブリケーションとは

パブリケーションは、不特定多数の受信者に配信するドキュメントのコレクションです。ドキュメントを配信する前に、公開者はメタデータのコレクションを使用してパブリケーションを定義します。このメタデータには、パブリケーションのソース、受信者、および適用されるパーソナライゼーションが含まれます。

パブリケーションを使用すると、組織内への情報提供をより効果的に行うことができます。例:

- ユーザまたはユーザグループにユーザ用またはグループ用にカスタマイズしたフィルタを適用して、情報を簡単に配信できます。
- イン트라ネット、エクストラネット、またはインターネット経由で、パスワード保護されたポータルを使って、ユーザまたはユーザグループにターゲットビジネス情報を配信します。
- ユーザがドキュメント処理要求を送信する手間が省かれるので、データベースへのアクセスを最小限に抑えることができます。

Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントに基づいて、さまざまな種類のパブリケーションを作成できます。

10.1.2 公開に必要なアクセス権

表 50:

ロール	タスク	必要な権限
ドキュメントデザイナー	パブリケーションを基にするドキュメントを作成する	なし
ドキュメントデザイナー	ドキュメントを BI プラットフォームに追加する。	ドキュメントを追加するフォルダまたはカテゴリに対する表示権限および追加権限

ロール	タスク	必要な権限
ドキュメントデザイナー	動的受信者ソースとして使用するドキュメントを作成する。	ドキュメントを追加するフォルダまたはカテゴリに対する表示権限および追加権限
公開者	パブリケーションを作成する。	<ul style="list-style-type: none"> パブリケーションが保存されるフォルダに対する追加権限 受信者となるユーザおよびユーザグループに対する表示権限 パーソナライゼーションに使用されるプロファイルに対する表示権限 パブリケーションのドキュメントに対する表示権限 パブリケーションのドキュメントに対するスケジュール権限 Enterprise 受信者に対するスケジュール権限

ロール	タスク	必要な権限
公開者	パブリケーションをスケジュールする。	<p>パブリケーションをスケジュールする権限は、公開者のみが保持する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示権限、スケジュール権限、追加権限、およびセキュリティの変更権限 パブリケーションに対するインスタンスの削除権限 受信者となるユーザおよびユーザグループに対する表示権限 パーソナライゼーションに使用されるプロファイルに対する表示権限 パブリケーションのドキュメントに対する表示権限およびスケジュール権限 動的受信者ソースに対する表示権限および最新表示権限 配信ルールが設定されるドキュメントに対する表示権限および最新表示権限 パブリケーションのオブジェクトで使用するユニバースに対するデータアクセス権限 使用されるユニバース接続に対するデータアクセス権限 BI 受信ボックスにスケジュールする場合、各受信者の BI 受信ボックスに対する追加権限および表示権限 パブリケーションが保存されるフォルダのオブジェクト権限に対するユーザの権限変更 受信者に対する購読権限 公開者がパブリケーションインスタンスを印刷する場合、Crystal レポートソースドキュメントに対する印刷権限 受信者ごとのデータベースフェッチを選択している場合、Enterprise 受信者に対する他のユーザの代理としてのスケジュール権限

ロール	タスク	必要な権限
公開者	失敗したパブリケーションインスタンスを再試行する。	<ul style="list-style-type: none"> パブリケーションインスタンスに対する編集権限 パブリケーションに対する表示権限、購読権限、追加権限、およびセキュリティの変更権限 パブリケーションに対するインスタンスの削除権限 受信者となるユーザおよびユーザグループに対する表示権限 パーソナライゼーションに使用されるプロファイルに対する表示権限 パブリケーションのドキュメントに対する表示権限およびスケジュール権限 動的受信者ソースに対する表示権限および最新表示権限 配信ルールが設定されるドキュメントに対する表示権限および最新表示権限 パブリケーションのオブジェクトで使用するユニバースに対するデータアクセス権限 使用されるユニバース接続に対するデータアクセス権限 BI 受信ボックスにスケジュールする場合、各受信者の BI 受信ボックスに対する追加権限および表示権限 パブリケーションが保存されるフォルダのオブジェクト権限に対するユーザの権限変更 受信者に対する購読権限 公開者がパブリケーションインスタンスを印刷する場合、Crystal レポートソースドキュメントに対する印刷権限 受信者ごとのデータベースフェッチを選択している場合、Enterprise 受信者に対する他のユーザの代理としてのスケジュール権限

ロール	タスク	必要な権限
公開者	パブリケーションインスタンスを再配布する。	<ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示権限、スケジュール権限、追加権限、およびセキュリティの変更権限 BI 受信ボックスにスケジュールする場合、各受信者の BI 受信ボックスに対する追加権限および表示権限 パブリケーションインスタンスに対するインスタンスの表示権限および編集権限
受信者	パブリケーションを表示する。	BI プラットフォームでのパブリケーションオブジェクトの表示を可能にする権限。 <ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示権限 パブリケーションに対するインスタンスの表示権限 これらの権限は、BI 受信ボックスに送信された内容を表示する場合は必要ありません。
受信者	パブリケーションを購読および購読解除する。	<ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示権限 Enterprise 受信者に対する購読権限

10.1.2.1 公開者と受信者: 表示する内容とアクセス権

公開者（パブリケーションを所有し、スケジュールするユーザ）は、すべての受信者のすべてのパブリケーションインスタンスを表示できます。受信者は、自分用にパーソナライズされたパブリケーションインスタンスのみを表示できます。

これらの表示権限では、公開者のみが、パブリケーションをスケジュールするためのアクセス権と、すべてのパブリケーションインスタンスを表示するアクセス権を持つため、パブリケーションデータのセキュリティを最大にすることができます。

公開者が自身をパブリケーションに受信者として追加する場合は、自分用に、公開者アカウントと受信者アカウントの 2 つのユーザアカウントを作成します。公開者アカウントでは、パブリケーションの作成およびスケジュールに必要なアクセス権が付与され、受信者アカウントでは通常の受信者のアクセス権が付与されます。

10.1.3 公開の概念

10.1.3.1 レポートバースト

公開中、ドキュメント内のデータがデータソースに対して最新表示され、パーソナライズされてから、パブリケーションが受信者に配信されます。この複合処理はレポートバーストと呼ばれます。

パブリケーションのサイズや、対象受信者の数に応じて、以下のレポートバースト方法を使用できます。

- すべての受信者のデータベースフェッチ:** パブリケーション内のすべてのドキュメントが 1 回最新表示され、パーソナライズされ、各受信者に配信されます。このレポートバースト方式では、公開者のデータソースログオン認証情報を使用してデータが最新表示されます。
 これは Web Intelligence ドキュメントパブリケーションのデフォルトオプションで、データベースに対する公開の影響を最小限に抑える必要がある場合に推奨されます。このオプションのパフォーマンスは、受信者数によって異なります。
 このオプションは、ソースドキュメントが静的ドキュメントとして配信される場合にのみ安全です。たとえば、Web Intelligence ドキュメントをその元の形式で受信した受信者は、ドキュメントを変更したり、他の受信者に関連するデータを表示できます。ただし、ドキュメントが PDF ファイルとして配信された場合は、そのデータは安全です。このオプションは、Crystal レポートが元の形式で配信されたかどうかに関係なく、ほとんどの Crystal レポートに対して安全です。
- 受信者のバッチごとのデータベースフェッチ:** パブリケーションを最新表示、パーソナライズし、受信者に対して指定されたパーソナライゼーション値に基づいて受信者のバッチに配信します。バッチサイズは、指定したパーソナライゼーション値に応じて決まり、設定できません。このレポートバースト方式では、公開者のデータソースログオン認証情報を使用してデータが最新表示されます。
 これは、Crystal レポートパブリケーションのデフォルトオプションで、高ボリュームシナリオの場合に推奨されます。このオプションを使用すると、さまざまなサーバでバッチを同時に処理できるので、大量のパブリケーションに必要な処理負荷や時間を大幅に削減できます。
 このオプションは Web Intelligence ドキュメントでは使用できません。
- 受信者ごとのデータベースフェッチ:** ドキュメント内のデータは受信者ごとに最新表示されます。このレポートバースト方式では、受信者のデータソースログオン認証情報を使用してデータが最新表示されます。たとえば、1 つのパブリケーションに受信者が 5 人いる場合、パブリケーションは 5 回最新表示されます。
 このオプションは、パブリケーションをできる限り安全に配信する必要がある場合に推奨されます。
 ユニバースまたはビジネスビューに基づく Crystal レポートをサポートする場合は、セキュリティを最大化するためにこのオプションを選択します。

関連情報

[CMC におけるレポートバースト方法の選択 \[192 ページ\]](#)

10.1.3.2 配信ルール

配信ルールは、パブリケーション内のドキュメントの処理および配布方法に影響します。ドキュメントに配信ルールを設定すると、パブリケーションはドキュメント内の内容が特定の条件と一致する場合にのみ受信者に配信されます。

注記

この機能は Web Intelligence ドキュメントでは使用できません。

配信ルールには次の 2 種類があります。

表 51:

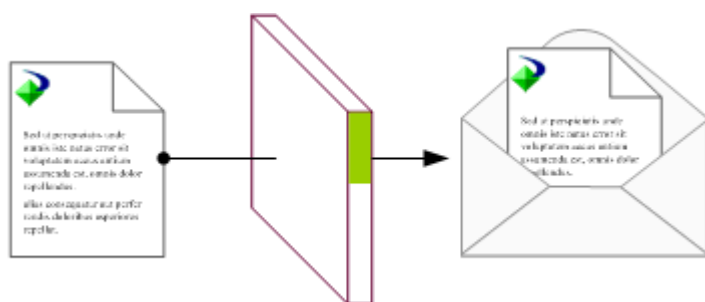
配信ルール	説明
グローバル配信ルール	<p>指定されたドキュメント内のデータが配信ルールに一致すると、パブリケーションはすべての受信者に配信されます。</p> <p>グローバル配信ルールに対して指定されるドキュメントは、パブリケーションで使用されている 1 つまたは複数のドキュメントと異なる場合があります。たとえば、パブリケーション内のドキュメントではなく、動的受信者ソースとして使用されるドキュメントにグローバル配信ルールを設定できます。</p>
受信者配信ルール	<p>受信者のインスタンス内のデータが配信ルールに一致すると、そのインスタンスはすべての受信者に配信されます。</p>

パブリケーションにグローバル配信ルールと受信者配信ルールの両方が設定されている場合、グローバル配信ルールが最初に評価され、パブリケーションが処理されるかどうか決まります。パブリケーションがグローバル配信ルールに一致すると、BI プラットフォームによって受信者配信ルールが評価され、受信者ごとにどのインスタンスを処理および配布するかが決定されます。

配信ルールの設定方法は、公開するドキュメントの種類に応じて異なります。Crystal レポートの場合は、レポート デザイナーが Crystal レポートで作成した名前の付いたアラートに基づいて配信ルールを指定します。配信ルールは、パーソナライズされたパブリケーションにデータが含まれているかどうかに基づいて設定することもできます。

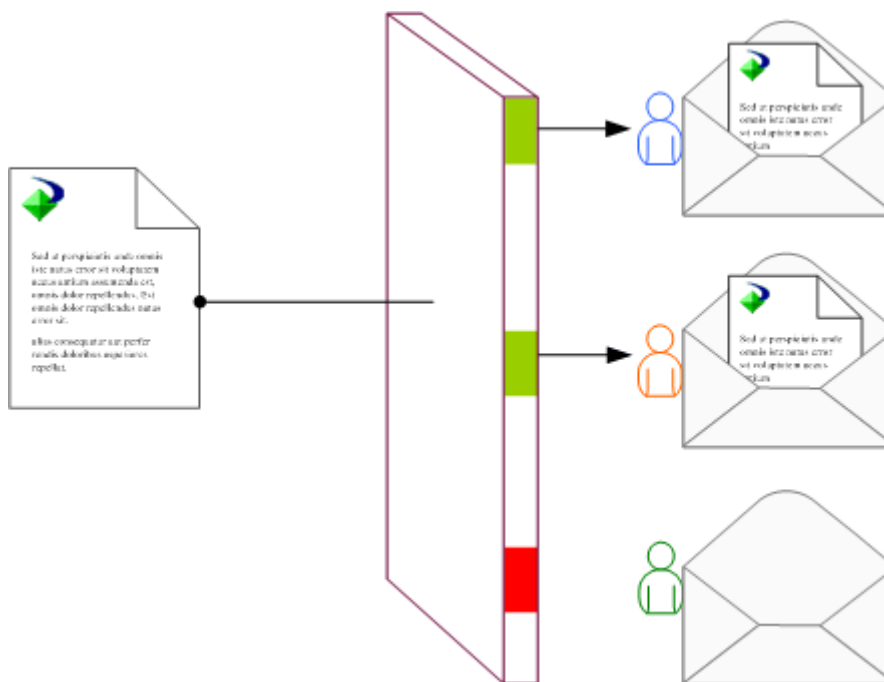
以下の図は、アラートに基づくグローバル配信ルールの動作を示しています。グローバル配信ルールは、パブリケーション内のドキュメントに設定されています。Crystal レポートには、100,000 を超える金額に対する売上げアラートが含まれています。公開者は、売上げアラートに基づいてグローバル配信ルールを作成します。Crystal レポートは、売上げが 100,000 を超える場合にのみ受信者に配信されます。この場合、配信ルールに一致するため、Crystal レポートが配信されます。

図 1:グローバル配信ルールに一致している場合



以下の図は、受信者配信ルールの動作を示しています。公開者は、レポートに特定の受信者向けのデータが含まれている場合に、その受信者にのみ Crystal レポートが配信されるように、受信者配信ルールを作成します。レポートが受信者ごとにパーソナライズされている場合、緑の受信者は、Crystal レポートにデータがないため、パブリケーションを受信しません。青の受信者とオレンジの受信者は、レポートにデータがあるため、パブリケーションを受信します。

図 2:受信者配信ルールに一致していない場合



複数のドキュメントおよびオブジェクトを含むパブリケーションの場合、ドキュメントごとに独自の受信者配信ルールを設定できます。処理および配信に関する、以下のオプションがあります。

- パブリケーション内のあるドキュメントが、ある受信者の受信者配信ルールに一致しない場合、パブリケーション全体がその受信者に対して配信されません。
- パブリケーション内のあるドキュメントが、ある受信者の受信者配信ルールに一致しない場合、そのドキュメントは配信されませんが、パブリケーション内の他のドキュメントはすべてその受信者に配信されます。

配信ルールは、多数の受信者を対象としたパブリケーションをより効率的に処理および配信できるため便利です。たとえば、保険会社の公開者が、次のオブジェクトを含む顧客向けのパブリケーションを作成するとします。

保険請求書 (パーソナライズされた Crystal レポート)
 月間ステートメント (パーソナライズされた Crystal レポート)
 支払方法に関するパンフレット (PDF ファイル)

保険請求書には、0 を超える金額に対して "支払額" アラートが存在します。公開者は、保険請求書に対して "支払額" 受信者配信ルールを作成して、顧客が支払を行う必要がある場合にのみ保険請求書が発行および配布されるようにします。また、公開者は、顧客が保険料を支払う必要がない場合に月間ステートメントやパンフレットを顧客が受信しないようにする必要があります。そのため、保険請求書が配信ルールに一致しない場合、パブリケーション全体が公開されないように指定します。パブリケーションを実行すると、パブリケーションが処理されて、支払義務のある顧客にのみ配信されます。

パブリケーションの実行時に Crystal レポートパブリケーションの印刷がスケジュールされている場合、パブリケーション内のドキュメントが配信ルールに一致せず、受信者に配信されない場合でも、印刷ジョブは実行されます。これは、印刷ジョブがパーソナライゼーションのときに処理され、配信ルールはパーソナライズ後のパブリケーションに適用されるからです。

関連情報

(オプション) Crystal レポートのグローバル配信ルールの選択 [184 ページ]

(オプション) Crystal レポートの受信者配信ルールの選択 [183 ページ]

10.1.3.3 動的受信者

動的受信者は、BI プラットフォームのユーザアカウントは持たないが、データベース、LDAP、または AD ディレクトリなどの外部データソースのユーザ情報を持つパブリケーション受信者です。

パブリケーションを動的受信者に配布するには、動的受信者ソースを使用します。これは、プラットフォーム外のパブリケーション受信者に関する情報を提供するドキュメントまたはカスタムデータプロバイダです。パブリケーションにつき 1 つの動的受信者ソースを使用して、外部データソースに直接リンクし、動的受信者用の最新データを取得することができます。動的受信者ソースを使用すると、パブリケーションを動的受信者に配布する前に動的受信者の BI プラットフォームユーザアカウントを作成する必要がないため、管理コストが削減されます。

たとえば、請求会社が BI プラットフォームユーザ以外の顧客に請求書を配信する場合、顧客情報は外部データベースに存在します。公開者は、外部データベースに基づいてドキュメントを作成し、パブリケーションの動的受信者ソースとしてドキュメントを使用します。顧客は請求パブリケーションを受信し、公開者とシステム管理者は動的受信者ソースを使用して最新の連絡先情報を管理できます。

動的受信者ソースを使用して、次のアクションを実行できます。

- 1 つのパブリケーションを、動的受信者と BI プラットフォームユーザに同時に配布する
動的受信者はパブリケーションから自身を自動的に購読解除できません。
- パブリケーションを作成するときに動的受信者の一覧をプレビューする
- パブリケーションをすべての動的受信者に配布するか、特定の動的受信者を除外するかを指定する
- パブリケーションを電子メールや FTP サーバなどの外部出力先に配布する
動的受信者は BI プラットフォームのユーザアカウントを持たないため、BI 受信ボックスは動的受信者には無効な宛先です。

動的受信者ソースを使用するには、次の値ごとに 1 つの列を指定します。

- 受信者 ID(必須)
- 受信者のフルネーム
- 電子メールアドレス

[[受信者 ID](#)] 列によって、パブリケーションを受信する動的受信者の数が決まります。動的受信者ソースは受信者 ID によって並べ替えます。

レポートの作成についての概要は、*SAP Crystal Reports ユーザガイド*を参照してください。カスタムコーディングされた動的受信者ソースの作成については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド*を参照してください。

10.1.3.4 パブリケーション配信出力先

出力先とは、パブリケーションの配信先の場所のことです。パブリケーションは複数の出力先に配信することができます。

出力先には、パブリケーションが格納される BI プラットフォーム内の場所、BI 受信ボックス、電子メールアドレス、FTP サーバ、またはファイルシステム内のディレクトリを指定できます。1 つのパブリケーションに複数の出力先を指定できます。複数の Crystal レポートを公開する場合は、それらを出力先ごとに 1 つの PDF ファイルにマージすることができます。パブリケーションを圧縮 (.zip) ファイルとして公開する場合は、出力先ごとにインスタンスを圧縮または抽出できます。たとえば、電子メール受信者向けにインスタンスを圧縮したり、BI 受信ボックス向けにインスタンスを抽出したりすることができます。

10.1.3.4.1 パブリケーション出力先

スケジュールされたパブリケーションには、次の出力先が使用できます。

- デフォルトの *Enterprise* の場所
- BI 受信ボックス
- 電子メール
- FTP サーバ
- ファイルシステム
- *SAP StreamWork* (有効化かつ設定されている場合)

デフォルトでは、すべての出力先に対して [各ユーザにオブジェクトを配信] チェックボックスがオンになっています。ただし、場合によっては、各ユーザにオブジェクトを配信しないようにする場合もあります。たとえば、3 人の受信者が同一のパーソナライゼーション値を持っていると、パブリケーションインスタンスの同じデータが受信されます。[各ユーザにオブジェクトを配信] チェックボックスをオフにした場合は、1 つのパブリケーションインスタンスが生成され、それが 3 人の受信者すべてに配信されます。[各ユーザにオブジェクトを配信] チェックボックスをオンにした場合は、同じパブリケーションインスタンスが 3 回 (受信者ごとに 1 回ずつ) 配信されます。

デフォルトの *Enterprise* の場所

この場所にパブリケーションを送信する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。

表 52:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
それを作成したフォルダ	<ul style="list-style-type: none">• すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ)• パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) ファイルとしてパッケージ化する	Output File Repository Server 履歴のインスタンスはデフォルトの Enterprise サーバに保存されますが、他の出力先には保存されません。

BI 受信ボックス

表 53:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
各受信者の BI 受信ボックス	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する 個別のユーザにオブジェクトを配信するユーザをすばやく見つけるには、[タイトルの検索] ボックスで受信者のユーザ名、フルネーム、または電子メールアドレスを検索できます。 デフォルトのファイル名を使用するか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。 パブリケーションをショートカットまたはコピーとして送信する パブリケーションを受信者の BI 受信ボックスにショートカットとして送信する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。パブリケーションのショートカットを BI 受信ボックスに送信するには、出力先として、[BI 受信ボックス] および [デフォルトの Enterprise の場所] の両方を選択します。 すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 指定された BI 受信ボックス

電子メール

レポートインスタンスをスケジュールするかこの出力先に送信するには、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) の出力先を有効にして設定する必要があります。

表 54:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
電子メールで各受信者に	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する 個別のユーザにオブジェクトを配信する (必須) 差出人 ボックスに自分の電子メールアドレスを入力する。 電子メールアドレスを入力しない場合、BI プラットフォームでは、公開者のアカウントに関連付けられている電子メールアドレスが使用されます。公開者のアカウントに電子メールアドレスがない場合、プラットフォームでは、Adaptive Job Server の電子メールアドレスが使用されます。[差出人] ボックス、公開者のアカウント、または Adaptive Job Server のいずれにも電子メールアドレスがない場合、パブリケーションは失敗します。 宛先 ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレス のプレースホルダを追加する CC ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレス のプレースホルダを追加する BCC ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレス のプレースホルダを追加する [件名] ボックスに件名を入力するか、プレースホルダを追加する [メッセージ] ボックスに、パブリケーションと一緒に配信する情報を入力するか、プレースホルダを追加して電子メール本文に動的コンテンツドキュメントを埋め込む ソースドキュメントのインスタンスを電子メールに添付する デフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用する を選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子 のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 指定された電子メール受信者

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
	<p>ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	

FTP サーバ

パブリケーションを **FTP サーバ** 出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、**各ユーザーにオブジェクトを配信** チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。[各ユーザーにオブジェクトを配信] をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するプレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

表 55:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
<p>FTP サーバ</p> <p>(ホストボックスに、FTP サーバの場所を入力する必要があります。入力しないと、プラットフォームは、Adaptive Job Server 用に設定された FTP サーバを使用します)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する ポート番号、ユーザー名とパスワード、およびアカウントを入力する ディレクトリ名を入力する。 デフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。 すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 選択された FTP サーバ

ファイルシステム

パブリケーションをファイルシステム出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、各ユーザにオブジェクトを配信チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。各ユーザにオブジェクトを配信をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するプレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

表 56:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
ファイルシステムのディレクトリ (パブリケーションのディレクトリを入力する必要があります)。	<ul style="list-style-type: none">出力先のデフォルト設定を使用するファイルの場所にアクセスするためのユーザ名とパスワードを入力する個別のユーザにオブジェクトを配信するデフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ)パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する	<ul style="list-style-type: none">Output File Repository Server選択されたファイルの場所

SAP StreamWork

この出力先は、BI プラットフォームでコラボレーションが設定されて有効化されている場合に使用できます。

表 57:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
他のユーザとのコラボレーションのために送信されます。	<ul style="list-style-type: none"> Crystal レポートおよび Web Intelligence ドキュメントのコラボレーションアクティビティへの送信またはスケジュール フィードの監視 コメントおよびディスカッションを追跡するドキュメントおよびインスタンスのフォロー ドキュメントおよびインスタンスへのコメントの投稿、およびパブリックドキュメントに関して他のユーザによって投稿されたコメントの表示 	次のコラボレーションアプリケーションのいずれか: <ul style="list-style-type: none"> SAP StreamWork

10.1.3.5 パブリケーション形式

パブリケーションのドキュメントのファイルタイプは形式によって定義されます。

単一のドキュメントを複数の形式で公開することができます。この場合、選択する形式ごとにドキュメントのインスタンスが作成されます。各インスタンスを複数の出力先に配信できます。複数のドキュメントを含むパブリケーションの場合、それぞれのドキュメントに異なる形式を指定できます。Web Intelligence ドキュメントを含むパブリケーションの場合は、ドキュメント全体またはドキュメント内の 1 つのレポートタブを複数の形式で公開できます。

ドキュメントに対して選択した形式は、パブリケーションのすべての受信者に適用されます。たとえば、1 つのドキュメントを、ある受信者には Microsoft Excel ファイルとして公開し、別の受信者には PDF ファイルとして公開することはできません。一部の受信者が両方の形式でインスタンスを受信する必要がある場合は、すべての受信者が、Microsoft Excel ファイルと PDF ファイルを 1 つずつ受信する必要があります。

関連情報

[Crystal レポートのパブリケーション形式の選択 \[176 ページ\]](#)

[Web Intelligence ドキュメントのパブリケーション形式の選択 \[186 ページ\]](#)

10.1.3.5.1 パブリケーションの書式設定オプション

表 58:

ドキュメントの種類	形式	説明
すべての種類	<i>mHTML</i>	ドキュメントを、電子メールに埋め込むことができる mHTML 形式で公開します。Crystal レポートの場合は、1 つのレポートの内容を電子メールに埋め込むことができます。Web Intelligence ドキュメントの場合は、1 つのレポートタブの内容を電子メールに埋め込むことができます。 ドキュメントは、ソースドキュメントが [新規パブリケーション] ダイアログボックスに一覧表示される順序で出力されます。たとえば、ダイアログボックスの上部のドキュメントは電子メールの上部に表示されます。
	<i>PDF</i>	ドキュメントを静的な PDF ファイルとして公開します。PDF マージと合わせてこのオプションを使用すると、ドキュメントは、ソースドキュメントが [新規パブリケーション] ダイアログボックスに一覧表示される順序で出力されます。たとえば、ダイアログボックスの上部のドキュメントはマージされた PDF ファイルの上部に表示されます。
	<i>Microsoft Excel(97-2003)</i>	ドキュメントを Microsoft Excel (.xls) ファイルとして公開し、元の書式設定をできる限り保持します。
Crystal レポート	<i>Microsoft Excel (97-2003) (データのみ)</i> <i>Microsoft Excel Workbook データのみ</i>	Crystal レポートを、データのみを含む Excel (.xls) ファイルとして公開します。
	<i>XML</i>	Crystal レポートを XML (.xml) 形式で公開します。
	<i>Crystal Reports</i>	Crystal レポートを元の (.rpt) 形式で公開します。
	<i>Crystal レポート (RPTR)</i>	Crystal レポートを読み取り専用 (.rptr) 形式で公開します。
	<i>Microsoft Word(97-2003)</i>	Crystal レポートを Microsoft Word (.doc) ファイルとして公開し、Crystal レポートの元の書式を保持します。受信者が変更を加えずにパブリケーションを表示する場合に、このオプションを使用します。
	<i>Microsoft Word - 編集可能 (RTF)</i>	Crystal レポートを、受信者が編集できる Word (.rtf) ファイルとして公開します。受信者がパブリケーションを表示してその内容を編集する場合に、このオプションを使用します。
	<i>リッチテキスト形式(RTF)</i>	Crystal レポートをリッチテキスト形式 (.rtf) で公開します。
	<i>テキスト</i>	Crystal レポートをテキスト (.txt) 形式で公開します。
	<i>ページ区切り付きテキスト</i>	Crystal レポートをテキスト (.txt) 形式で公開し、パブリケーションの内容をページで区切ります。

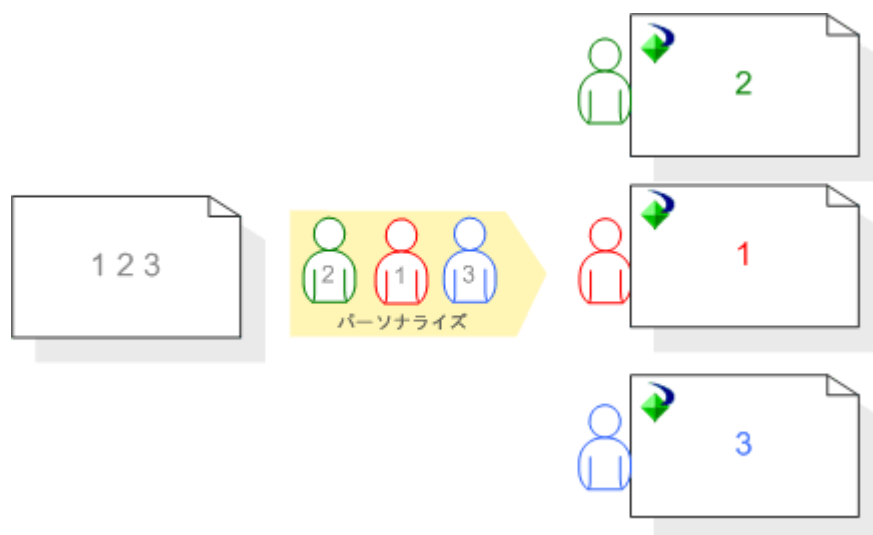
ドキュメントの種類	形式	説明
	タブ区切りテキスト (TTX)	Crystal レポートをテキスト (.txt) 形式で公開し、タブを使用して列の内容を区切ります。
	カンマ区切り値 (CSV)	Crystal レポートを文字区切り値 (.csv) ファイルとして公開します。
Web Intelligence ドキュメント	Web Intelligence	Web Intelligence ドキュメントを元の (.wid) 形式で公開します。

10.1.3.6 パーソナライゼーション

パーソナライゼーションとは、パブリケーションの受信者に対して関連するデータのみが表示されるように、ソースドキュメントのデータをフィルタリングする処理です。

パーソナライゼーションはデータのビューを変更しますが、データソースからクエリされたデータを変更したり保護したりすることはありません。

以下の図では、パーソナライゼーションの動作方法を示します。パーソナライズされていないレポートに、データタイプ 1、2、および 3 が含まれているとします。レポートにパーソナライゼーションが適用されると、ユーザは自分に関係のあるデータのみを受信します。ユーザ 2 はデータタイプ 2 のみ、ユーザ 1 はデータタイプ 1 のみ、ユーザ 3 はデータタイプ 3 のみを受信します。



ソースドキュメントをパーソナライズする

- Enterprise 受信者の場合は、パブリケーションを設計するときにプロファイルを適用する必要があります。Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。
- 動的受信者の場合は、ソースドキュメントのデータフィールドまたは列を動的受信者ソースのデータにマップできます。たとえば、ソースドキュメントの "顧客 ID" フィールドを動的受信者ソースの "受信者 ID" フィールドにマップできます。

パーソナライゼーションの完了後、パーソナライズされていないパブリケーションインスタンスを受信する受信者の一覧を表示するには、[新規パブリケーション] ダイアログボックスで、**追加オプション** > **詳細** を選択して、[パーソナライゼーションが適用されないユーザを表示] チェックボックスを選択します。

関連情報

[パラメータ値を使用した Crystal レポートのパーソナライズ \[174 ページ\]](#)

[フィールドのフィルタリングによる Crystal レポートのパーソナライズ \[175 ページ\]](#)

[グローバルプロファイルターゲットを使用する Web Intelligence ドキュメントのパーソナライゼーション \[187 ページ\]](#)

[フィールドのフィルタリングによる Web Intelligence ドキュメントのパーソナライズ \[187 ページ\]](#)

[パブリケーションソースドキュメント名のパーソナライズされたプレースホルダ \[153 ページ\]](#)

10.1.3.6.1 パブリケーションソースドキュメント名のパーソナライズされたプレースホルダ

プレースホルダは、変数データのコンテナです。パーソナライズされたプレースホルダをソースファイル名に追加すると、受信者はフィルタリングされたデータを識別しやすくなります。

パーソナライゼーション値が異なる複数のユーザグループに属している受信者は、同じソースドキュメントの複数のバージョンの違いをそのコンテンツを表示することなく区別できます。パブリケーションに複数のソースドキュメントが含まれている場合、すべてのソースドキュメントが同じフィールドでフィルタリングされていなければ **[指定の名前を使用する]** の **[プレースホルダの追加]** 一覧にパーソナライズされたプレースホルダは含まれません。

レポートで利用できるパーソナライズされたプレースホルダは、次のとおりです。

- **%fieldname_VALUE%**
たとえば、**電子メールアドレス**プレースホルダを選択すると、**指定の名前を使用する**ボックスに **%SI_EMAIL_ADDRESS%** と表示されます。実行時に、プレースホルダはレポートをフィルタリングするために使用されるフィールドの値に置換されます。このプレースホルダは受信者ごとに固有です。
- **%fieldname_NAME%**
たとえば、**タイトル**プレースホルダを選択すると、**指定の名前を使用する**ボックスに **%SI_Name%** と表示されます。実行時に、プレースホルダはフィールドの実際の名前に置換されます。このプレースホルダはすべての受信者で同じです。

関連情報

[パブリケーションソースドキュメントのパーソナライズされたプレースホルダの選択 \[172 ページ\]](#)

10.1.3.6.2 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダ

プレースホルダは、変数データのコンテナです。パブリケーションの電子メール送信時に**件名**ボックスおよび**メッセージ**ボックスでパーソナライズされたプレースホルダを使用できます。

パーソナライゼーション時にレポートで使用されるフィルタごとに、以下のプレースホルダが**プレースホルダの追加一覧**に表示されます。

- **%Field - Query 1-VALUE%**
実行時に、プレースホルダはレポートをフィルタリングするために使用されるパーソナライズされた値に置換されます。このプレースホルダは受信者ごとに固有です。
- **%Field - Query 1-NAME%**
実行時に、プレースホルダはフィールドの名前に置換されます。このプレースホルダはすべての受信者で同じです。

パブリケーションの電子メール送信時にボックスおよび**件名**または**メッセージ**ボックスでパーソナライズされたプレースホルダを使用するには、パブリケーションのすべてのソースドキュメントが同じフィールドでパーソナライズされている必要があります。パブリケーションに複数のソースドキュメントが含まれている場合、すべてのソースドキュメントが同じフィールドでフィルタされていると、**件名**および**メッセージ**ボックスの**プレースホルダの追加一覧**にパーソナライゼーションパラメータが表示されます。

10.1.3.7 パブリケーション拡張

パブリケーション拡張とは、ビジネスロジックをパブリケーションに適用するコードのライブラリです。

パブリケーション拡張を使用して処理または配信後にパブリケーションを自動的にカスタマイズします。パブリケーション拡張を使用して、以下のタスクを行うことができます。

- 同じタイプのドキュメントをマージする。たとえば、複数の Excel スプレッドシートを 1 つの Excel ワークブックにマージできます。
- ドキュメントにパスワード保護を追加する、またはドキュメントを暗号化する。
- ドキュメントを別の形式に変換する。
- パブリケーションジョブ用のカスタムログファイルを作成する。

パブリケーション拡張を BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) 内のパブリケーションに追加します (BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時にはパブリケーション拡張は使用できません)。ただし、パブリケーション拡張を追加する前に、拡張機能が、Adaptive Processing Server が動作するコンピュータにデプロイされている必要があります。サーバの場所は、オペレーティングシステムによって変わります。

- Windows の場合、サーバの場所は `<InstallDir>\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\java\lib\` です。
- Unix の場合、サーバの場所は `<InstallDir>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/` です。

拡張機能が配布されたら、Adaptive Processing Server と、公開サービスをホストするその他のサーバを再起動する必要があります。パブリケーション拡張の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド*を参照してください。

関連情報

[CMC におけるパブリケーション拡張の追加 \[189 ページ\]](#)

10.1.3.8 購読

購読では、パブリケーションの受信者ではないユーザが、最新インスタンスを表示できます。

Enterprise 受信者は、いつでもパブリケーションの購読解除を行うことができます。動的受信者はパブリケーションの購読および購読解除のいずれも行うことはできません。

適切な権限を持っているユーザは、他のユーザの購読および購読解除を行うことができます。パブリケーションを購読する、または購読を解除するには、以下の項目が必須です。

- BI プラットフォームのアカウント
- プラットフォームの BI ラウンチパッドまたはセントラル管理コンソール (CMC) へのアクセス
- パブリケーションの表示権限
- ユーザアカウントの購読者権限 (Enterprise 受信者)

関連情報

[パブリケーションの購読および購読解除 \[193 ページ\]](#)

10.1.3.9 Crystal レポートの場合の PDF ファイルのマージ

Crystal レポートの PDF インスタンスと静的 PDF ドキュメントを 1 つの PDF ファイルにマージして、マージされた PDF に対して以下のタスクを実行することができます。

- 目次の追加および書式設定
- 連続したページ番号の挿入
- PDF ファイルの表示および編集に必要なユーザパスワードと所有者パスワードの追加
- 受信者が PDF ファイルで実行できる処理に対する制限の設定

すべての静的 PDF ソースドキュメントは、マージされた PDF ファイルに格納されます。PDF ファイル以外の静的ソースドキュメントは、除外されます。

10.1.4 パブリケーション結果: 表示方法

パブリケーション結果は、公開者、受信者、またはパブリケーションジョブ用のログファイルによる表示が可能です。

公開者による結果の表示

パブリケーションの結果はさまざまな方法で表示できます。パブリケーション実行後、パブリケーション履歴が表示され、パブリケーションインスタンス、パブリケーションの実行日時、およびパブリケーションが成功したか失敗したかが一覧表示されます。[\[インスタンスの日時\]](#) 列で、パブリケーションインスタンスへのリンクをクリックし、パブリケーション実行時にすべての受信者に対して生成されたインスタンスを表示できます。

パブリケーションジョブ用のログファイルの表示

ログファイルは、パブリケーションの問題解決や、パブリケーションインスタンスを受信しなかった受信者を識別するのに役立ちます。BI プラットフォームでは、パーソナライズされたパブリケーションインスタンスの各パッチが処理されると、パブリケーションジョブの情報をログに記録し、詳細を 1 つまたは複数のログファイルにまとめます。ログファイルの最大サイズは 10 MB で、この値は変更できません。多数の詳細を含む大容量のパブリケーションを実行している場合、パブリケーションインスタンスのログファイルが複数になる場合があります。

パブリケーションインスタンスのログファイルは、[\[履歴\]](#) ダイアログボックスで以下の手順に従って表示できます。

- 一連の中で最後のログファイルを表示するには、[\[ステータス\]](#) 列で、ステータス ([成功]、[失敗]、[実行中]) をクリックし、[\[インスタンスの詳細\]](#) ダイアログボックスの下にある [\[ログファイルの表示\]](#) をクリックします。パブリケーション実行中に、最後のログファイルを表示できます。
- すべてのログファイルを表示するには、[\[インスタンスの日時\]](#) 列で、パブリケーションインスタンスに対するリンクをクリックします。パーソナライズされたインスタンスの後にログファイルがリストされます。

ログファイルは、2 分おきに新しい情報で更新されます。パブリケーションジョブが 2 分未満しか実行されなかった場合、ログファイルのステータスは [待機] になります。

受信者による結果の表示

以下の表は、パブリケーションの表示方法をまとめたものです。

表 59:

出力先	パブリケーション結果の表示方法
デフォルトの <i>Enterprise</i> の場所	<p>動的受信者が BI プラットフォームにログインしてパブリケーション結果を表示することはできません。</p> <p>受信者は、自身のパーソナライズ済みパブリケーションインスタンスのみをプラットフォームで表示できます。他の受信者向けにパーソナライズされたパブリケーションインスタンスは表示できません。</p>
BI 受信ボックス	動的受信者が BI ラUNCHパッドにログインしてパブリケーション結果を表示することはできません。
電子メール	電子メールにログインし、埋め込まれたパブリケーションコンテンツを表示するか、添付ファイルをダウンロードします。
FTP サーバ	FTP ホストにログインします。
SFTP サーバ	SFTP ホストにログインします。
ローカルディスク	パブリケーションのデザイン時に指定された場所に移動します。

11 パブリケーションの使用

11.1 パブリケーションの使用

11.1.1 BI ラウンチパッドでのパブリケーションの作成

1. ドキュメントタブで、フォルダドロウを展開し、パブリケーションを作成するフォルダを探します。
2. フォルダを右クリックし、**新規** > **パブリケーション** を選択します。
[新規パブリケーション] ダイアログボックスが開き、一般プロパティのオプションが表示されます。
3. (必須) **タイトル**ボックスに、パブリケーションのタイトルを入力します。
4. (必須) **説明**ボックスに、パブリケーションの説明を入力します。
5. (オプション) **キーワード**ボックスに、パブリケーションの内容に関連するキーワードを入力します。
6. ナビゲーション一覧の **[ソースドキュメント]** をクリックしてから、**[追加]** ボタンをクリックします。
7. **[ソースドキュメントの選択]** ダイアログボックスで、パブリケーションに追加するソースドキュメントを 1 つまたは複数選択し、**[OK]** をクリックします。
各ソースドキュメントでは、**[実行時に最新表示]** チェックボックスがデフォルトで選択されています。これにより、パブリケーションの実行時に、ドキュメントがデータソースに合わせて最新表示されます。
8. 実行時にソースドキュメントを最新表示しない場合は、**[実行時に最新表示]** チェックボックスをオフにします。
9. **保存して閉じる** をクリックします。

パブリケーションに必要なその他の情報 (受信者、配信形式、出力先、およびドキュメントのパーソナライズ方法) を指定する必要があります。

11.1.2 CMC でのパブリケーションの作成

1. BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) の **フォルダ** で、**グループツリー** をクリックしてパブリケーションを作成するフォルダを探します。
2. フォルダを右クリックし、**新規** > **パブリケーション** を選択します。
[新規パブリケーション] ダイアログボックスが開き、一般プロパティのオプションが表示されます。
3. (必須) **タイトル**ボックスに、パブリケーションのタイトルを入力します。
4. (必須) **説明**ボックスに、パブリケーションの説明を入力します。
5. (オプション) **キーワード**ボックスに、パブリケーションの内容に関連するキーワードを入力します。
6. ナビゲーション一覧の **[ソースドキュメント]** をクリックしてから、**[追加]** ボタンをクリックします。
7. **[ソースドキュメントの選択]** ダイアログボックスで、パブリケーションに追加するソースドキュメントを 1 つまたは複数選択し、**[OK]** をクリックします。
各ソースドキュメントでは、**[実行時に最新表示]** チェックボックスがデフォルトで選択されています。これにより、パブリケーションの実行時に、ドキュメントがデータソースに合わせて最新表示されます。

8. パブリケーションの実行時にソースドキュメントを最新表示しない場合は、ドキュメントの **[実行時に最新表示]** チェックボックスをオフにします。
9. **保存して閉じる** をクリックします。

11.1.3 Enterprise パブリケーションまたは動的受信者

パブリケーションは、Enterprise 受信者には BI 受信ボックス、電子メール、FTP、ファイルシステムまたはコラボレーション経由で送信できます。また、動的受信者には電子メールで送信できます。

Enterprise 受信者は、BI プラットフォームシステムに含まれるユーザです。このようなユーザ向けレポートは、その BI 受信ボックス宛てか、電子メール、FTP、ファイルシステム、またはコラボレーション経由で送信することができます。

動的受信者は非 Enterprise ユーザであり、ネットワーク外のユーザか、ユーザ、グループ、プロファイル、セキュリティなどが設定されていないユーザです。たとえば、会社の毎月の事務用品や仕入のサプライヤが動的受信者になる場合があります。動的受信者は BusinessObjects Enterprise のユーザアカウントを持たないため、BI 受信ボックスは動的受信者には無効な宛先です。

動的受信者は、次の点で Enterprise 受信者と異なります。

- 動的受信者には、パブリケーションを電子メール経由でのみ送信できる。
- 動的受信者は、ローカルプロファイルでのみ使用できる。

パブリケーションを作成するには、ソースファイルと受信者ファイルを作成して、BI ラウンチパッドでパブリケーションを設定してから、パブリケーションをスケジュールします。

ソースファイルにはパブリケーションの未処理データが含まれます。パブリケーションには複数のソースファイルを含めることができます。たとえば、サプライヤの月次レポートでは、ソースファイルに仕入の SKU 番号が一覧表示され、"サプライヤ ID" フィールドで定義した一意の ID やサプライヤが分類して含まれます。受信者ファイルには、ソースファイルと同じ一意の ID とサプライヤ、およびソースファイルにマップするための受信者の電子メールアドレスを含める必要があります。例では、受信者ファイルに "サプライヤ ID" と同じ ID、サプライヤ名、およびサプライヤの電子メールアドレスを含める必要があります。

11.1.3.1 Enterprise 受信者向けのパブリケーションの作成

Enterprise 受信者は、BI プラットフォームシステムに含まれるユーザです。Enterprise 受信者のために、ソースファイルでのフィルタ処理を定義するプロンプトを作成する必要があります。

1. BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) で、**プロファイル** をクリックします。
2. ユーザを作成し、必要に応じてユーザグループに追加します。
3. **管理 > 新規 > 新しいプロファイル** の順に選択します。
4. **新規プロファイルの作成** ダイアログボックスで、プロファイルのタイトルと説明を入力し、**OK** をクリックします。
5. 作成したプロファイルをダブルクリックして、そのプロパティを設定します。
6. ナビゲーション一覧の **ユーザセキュリティ** をクリックして、ユーザまたはユーザグループにアクセス権を割り当てます。
7. ナビゲーション一覧の **プロファイルターゲット** をクリックして、ソースファイルをフィルタ処理するターゲットを定義します。
 - a. 使用するプロファイルターゲットを **オブジェクト** 列で見つけ、横にあるチェックボックスを選択して、**編集** をクリックします。

ローカルプロファイルはソースファイルから派生し、グローバルプロファイルはユニバースをベースとします。

- b. **フィルタ式**を選択して、**編集**をクリックします。
ダイアログボックスが開き、プロファイルオプションが表示されます。
 - c. **ユーザ/グループ**列で、プロファイルターゲットを定義するユーザまたはユーザグループを見つけ、横にあるチェックボックスを選択します。
プロンプトが定義されます。BI ラウンチパッドでパブリケーションを作成できます。
8. BI ラウンチパッドの**ドキュメント**タブで、**フォルダ**ドロワを展開し、パブリケーションを作成するフォルダを探します。
- a. フォルダを右クリックし、**新規作成** > **パブリケーション** を選択します。
 - b. **新規パブリケーション**ダイアログボックスで、**タイトル**ボックスにパブリケーションのタイトルを入力します。
 - c. ナビゲーション一覧の**ソースドキュメント**をクリックして、**追加**ボタンをクリックします。
 - d. **ソースドキュメントの選択**ダイアログボックスで、パブリケーションのソースファイルを選択して、**OK** をクリックします。
9. ナビゲーション一覧の **Enterprise 受信者** をクリックします。
10. パブリケーションを受信する必要がある各ユーザまたはグループについて、**利用可能**で、そのユーザまたはユーザグループを選択し、**>** をクリックして、そのユーザまたはユーザグループを**選択領域**に移動します。
11. ナビゲーション一覧の**パーソナライゼーション**をクリックします。
12. パブリケーションの各ソースドキュメントについて、**グローバルプロファイル**で、**Enterprise 受信者のマッピング**列の一覧から、作成したプロファイルを選択します。
13. ナビゲーション一覧の**形式**をクリックして、次のアクションを実行します。
- a. **ドキュメント**で、レポートを選択します。
 - b. **選択したドキュメントの形式オプション**で、パブリケーションに必要な配信形式の横にあるチェックボックスを選択します。
 - c. **出力形式の詳細**で、**すべてのレポート**を選択してパブリケーションのすべてのレポートで同じ形式を使用するか、**1つのレポートを選択**を選択して一覧からレポートを選択します。
14. ナビゲーション一覧の**出力先**をクリックし、以下のようにして出力先を選択します。
- a. **送信先の選択**で、**電子メール**チェックボックスを選択します。
 - b. (オプション) **ZIP ファイルとしてパッケージ化する**チェックボックスを選択します。
 - c. **各ユーザにオブジェクトを配信**チェックボックスを選択します。
 - d. **差出人**ボックスに、送信者の電子メールアドレスを入力するか、一覧からプレースホルダを選択します。
 - e. **宛先**ボックスで、一覧から **%SL_EMAIL_ADDRESS%** を選択します。
 - f. **件名**ボックスで、件名を入力するか、プレースホルダを選択します。
 - g. (オプション) **メッセージ**ボックスで、受信者に対するパブリケーションに関するメッセージを入力するか、プレースホルダを選択します。
15. ナビゲーション一覧の**プロンプト**をクリックして、**変更**をクリックします。
定義したユーザまたはユーザグループが**ユーザ/グループ**列に一覧表示され、ステップ 1 ~ 6 で定義したプロンプト値が**プロファイル値**列に一覧表示されます。
16. パブリケーションを受信する必要がある各ユーザまたはグループの横にあるチェックボックスを選択します。
17. **保存して閉じる**をクリックします。
- パブリケーションの実行をスケジュールします。

11.1.3.2 動的受信者向けのパブリケーションの作成

動的受信者は非 Enterprise ユーザであり、ネットワーク外のユーザか、ユーザ、グループ、プロファイル、セキュリティなどが設定されていないユーザです。

ソースファイルと動的受信者ファイルを作成する必要があります。

1. BI ラウンチパッドのドキュメントタブで、フォルダドロワを展開し、パブリケーションを作成するフォルダを探します。
2. フォルダを右クリックし、**新規作成** > **パブリケーション** を選択します。
3. **新規パブリケーション** ダイアログボックスで、**タイトル** ボックスにパブリケーションのタイトルを入力します。
4. ナビゲーション一覧の**ソースドキュメント**をクリックして、**追加** ボタンをクリックします。
5. **ソースドキュメントの選択** ダイアログボックスで、パブリケーションのソースファイルを選択して、**OK** をクリックします。
6. ナビゲーション一覧の**動的受信者**をクリックします。
7. **動的受信者のソースの選択** 一覧で、*Web Intelligence レポート* 動的受信者プロバイダまたは *Crystal Reports* 動的受信者データプロバイダを選択します。
8. **動的受信者のソースの選択** の下で、**参照** をクリックし、受信者ファイルを探して選択します。
9. 受信者ファイル (ソースドキュメント) からパブリケーションにフィールドをマップします。
 - a. **受信者の識別子 (必須)** 一覧で、受信者ファイルからフィールドを選択してパブリケーションにマップします。
 - b. **フルネーム** 一覧で、受信者ファイルからフィールドを選択して受信者にマップします。
 - c. **電子メール** 一覧で、**電子メール ID** を選択して、受信者ファイルの電子メールアドレスをパブリケーションにマップします。

動的受信者ファイルに定義されているすべての受信者にパブリケーションを送信するには、**完全リストの使用** チェックボックスを選択できます。
10. ナビゲーション一覧の**パーソナライゼーション**をクリックし、以下のようにして受信者のパーソナライゼーションを設定します。
 - a. **パラメータ** で、パーソナライズするレポートフィールドを選択します。
 - b. **動的受信者のマッピング** 列で、受信者ファイルのフィールドを選択し、選択したレポートフィールドにマップします。
 - c. 特定の受信者に送信する必要がある各フィールドに対して、ステップ 10a と 10b を繰り返します。
11. ナビゲーション一覧の**形式**をクリックし、パブリケーションの配信形式を選択します。
12. ナビゲーション一覧の**出力先**をクリックし、以下のようにして出力先を選択します。
 - a. **送信先の選択** で、**電子メール** チェックボックスを選択します。
 - b. (オプション) **ZIP ファイルとしてパッケージ化する** チェックボックスを選択します。
 - c. **各ユーザにオブジェクトを配信** チェックボックスを選択します。
 - d. **差出人** ボックスに、送信者の電子メールアドレスを入力するか、一覧からプレースホルダを選択します。
 - e. **宛先** ボックスで、一覧から **%SI_EMAIL_ADDRESS%** を選択します。
 - f. **件名** ボックスで、件名を入力するか、プレースホルダを選択します。
 - g. (オプション) **メッセージ** ボックスで、受信者に対するパブリケーションに関するメッセージを入力するか、プレースホルダを選択します。
13. **保存して閉じる** をクリックします。

パブリケーションの実行をスケジュールします。

11.1.4 SAP 受信者用のパブリケーション

SAP 受信者用パブリケーションは、Enterprise または動的受信者用のパブリケーションと同じ方法で動作します。

ただし、SAP 受信者の場合、公開ワークフローにおいて以下の違いがあります。

- SAP 受信者用にソースドキュメントをデザインする場合、パーソナライゼーションは使用しません。各 SAP 受信者には、BI プラットフォーム以外のユーザアカウントにマップされているプロファイル値があり、このプロファイル値が組み込みのパーソナライゼーションの機能を果たします。プラットフォームで SAP 受信者のプロファイルおよびプロファイル値を作成したり、ソースドキュメントフィールドにプロファイルをマップしたりする必要はありません。
- SAP 受信者用のパブリケーションに関して機能するレポートバースト方法は、[受信者ごとのデータベースフェッチ] のみです。この方法はセキュリティを最大化し、各パブリケーション受信者のデータベースログオン認証情報を個別に処理します。

シングルサインオン設定および認証の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

11.1.5 Live Office 向けパブリケーション

SAP BusinessObjects Live Office で使用するためのパブリケーションをデザインする場合は、次の情報について考慮してください。

- 動的なコンテンツのドキュメントは、元の形式の Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントでのみ構成できます。
- 動的受信者はサポートされません。
- 使用できる出力先オプションは、[デフォルトの Enterprise の場所] のみです。
- 受信者がパーソナライゼーションの後に複数のパブリケーションインスタンスを受信した場合、最初のパブリケーションインスタンスのみを、Live Office クライアントで表示できます。グループメンバーシップから複数のプロファイル値を継承している受信者は、複数のインスタンスを受信する可能性があります。複数のインスタンスが送信されることを回避するため、必要なプロファイル値のみを受信者に割り当ててください。

関連情報

[パーソナライゼーション \[152 ページ\]](#)

11.1.6 パブリケーションのデザイン

新しいパブリケーションをデザインするには、BI プラットフォーム内の公開機能を使用します。

公開機能には、所有している権限と BI プラットフォームの Web ベースアプリケーションへのアクセス権に応じて、プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) または BI ラウンチパッドでアクセスできます。

パブリケーションデザイン時には、任意の時点でパブリケーションの変更の保存、終了、リオープン、および追加変更ができます。

11.1.6.1 パブリケーションを開く

1. パブリケーションを見つけるには、以下の操作を行います。
 - BI ラウンチパッドで、**ドキュメント**タブの**フォルダ**ドロワを展開します。
 - BI プラットフォームのセントラル管理コンソール (CMC) で、**フォルダ**管理エリアに移動します。
2. パブリケーションを右クリックし、**[表示]**を選択します。

パブリケーションが新しいウィンドウで開きます。

11.1.6.2 パブリケーションでの一般プロパティの定義

プロパティダイアログボックスで、パブリケーションのプロパティを定義します。

1. 一般プロパティを入力するパブリケーションを右クリックして、**プロパティ**を選択します。
[**プロパティ**] ダイアログボックスが表示され、パブリケーションの一般プロパティとタイトルが表示されます。
2. (必須) **説明**ボックスに、パブリケーションの説明を入力します。
3. (オプション) **キーワード**ボックスに、パブリケーションの内容に関連するキーワードを入力します。
4. **保存して閉じる**をクリックします。

11.1.6.3 ソースドキュメントの追加

新規パブリケーションダイアログボックスで、パブリケーションにソースドキュメントを追加します。

ソースドキュメントは、パブリケーションの作成時にパブリケーションに追加できます。その後に追加することはできません。ソースドキュメントの選択時に、動的コンテンツドキュメントタイプに基づき、利用可能なオプションが決定されます。

ソースドキュメントを添付ファイルまたは結合された PDF ファイルとして送信する場合、表示するドキュメントの順番を設定できます。[**新規パブリケーション**] ダイアログボックスの [**ソースドキュメント**] 領域で、**[選択]** リストからドキュメントを選択し、**[上へ移動]** または **[下へ移動]** をクリックしてドキュメントを順序内の別の位置に移動します。

1. [**新規パブリケーション**] ダイアログボックスで、**[ソースドキュメント]** をクリックします。
2. **追加**をクリックします。
3. **ソースドキュメントの選択**ダイアログボックスで、パブリケーションに含める同じタイプのドキュメントの動的コンテンツドキュメントを見つけて選択し、**OK** をクリックします。

ソースドキュメントをダブルクリックしてドキュメントを開きます。複数のソースドキュメントを同時に選択するには、**[SHIFT]** または **[CTRL]** キーを押しながら各フォルダをクリックします。

選択したソースドキュメントが、[**新規パブリケーション**] ダイアログボックスの **[選択]** リストに表示されます。ソースドキュメントでは、**[実行時に最新表示]** 列内のチェックボックスはデフォルトで選択されています。チェックボックスが選択されている場合、パブリケーションの実行時にデータソースに対してドキュメントは最新表示されます。

4. パブリケーションの実行時にデータソースに対してソースドキュメントの最新表示を行わない場合、[実行時に最新表示] 列内のドキュメントのチェックボックスの選択を解除します。
システムのパフォーマンスを向上させるために、最新表示が必要ないドキュメントごとに、[実行時に最新表示] 列内のチェックボックスの選択を解除してください。
5. **保存して閉じる**をクリックします。

11.1.6.4 パブリケーションの出力先の選択

スケジュールダイアログボックスで、パブリケーションの出力先を選択します。

1. 出力先を選択するパブリケーションを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスで、**出力先**をクリックします。
3. (オプション) 使用しているシステムにパブリケーションインスタンスを保存しないようにするには、[送信先の選択] の下にある [デフォルトの Enterprise の場所] チェックボックスの選択を解除します。
4. パブリケーションオブジェクトのインスタンスの制限を低く設定します。
手順については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームユーザガイドを参照してください。
5. [送信先の選択] で、パブリケーションを送信する各出力先の隣にあるチェックボックスを選択します。
パブリケーションのショートカットを作成する場合、出力先として [BI 受信ボックス] および [デフォルトの Enterprise の場所] を選択します。
パブリケーションが電子メール受信者に送信され、電子メール本文に Enterprise の場所へのリンクを埋め込む場合、出力先として [電子メール] および [デフォルトの Enterprise の場所] を選択します。
選択した出力先が、[選択した出力先のオプションを表示] リストに表示されます。複数の出力先を選択した場合、最後に選択したチェックボックスに対するオプションが表示されます。
6. 必要に応じて、[選択した出力先のオプションを表示] リストで設定を行うには、出力先を選択します。
その出力先に対するオプションが表示されます。
7. (オプション) パブリケーションの名前を選択するには、**指定の名前を使用する 28** を選択し、名前を入力するか **プレースホルダの追加** リストにあるプレースホルダを選択します。
名前を選択しないと、システムで生成された名前がパブリケーションに割り当てられます。パブリケーションの実行時、各プレースホルダに値が挿入されます。
8. (オプション) **指定の名前を使用する** を選択し、パブリケーションに個別の名前を割り当てる複数のドキュメントが含まれている場合、**ドキュメントごとの指定の名前** チェックボックスを選択し、各ドキュメントの名前を入力するか、**プレースホルダの追加** リストにあるプレースホルダを選択します。
名前を選択しないと、システムで生成された同じ名前が各ドキュメントに割り当てられます。
9. (電子メールのみ) 電子メール本文に Enterprise の場所へのリンクを埋め込むには、**メッセージ** ボックスにカーソルを置き、ボックスの下にある **プレースホルダの追加** リストにある **ビューア** を選択します。
プレースホルダ **%SI_VIEWER_URL%** が電子メール本文に挿入されます。これは、パブリケーションの実行時にリンクに置換されます。リンクを埋め込むことができない場合、出力先として [電子メール] および [デフォルトの Enterprise の場所] の両方が選択されていることを確認してください。
10. ((BI 受信ボックスのみ) **送信者の名前** の下で、**ショートカット** をクリックしてパブリケーションへのショートカットを作成するか、**コピー** をクリックしてパブリケーションのコピーを作成します。
ショートカットを作成できない場合、出力先として [BI 受信ボックス] および [デフォルトの Enterprise の場所] の両方が選択されていることを確認してください。

11. 複数の出力先を選択している場合、出力先の選択および設定のために、手順 5 ～ 10 を出力先ごとに繰り返します。
12. **OK** をクリックします。

11.1.6.4.1 パブリケーション出力先

スケジュールされたパブリケーションには、次の出力先が使用できます。

- デフォルトの *Enterprise* の場所
- BI 受信ボックス
- 電子メール
- FTP サーバ
- ファイルシステム
- *SAP StreamWork* (有効化かつ設定されている場合)

デフォルトでは、すべての出力先に対して **[各ユーザにオブジェクトを配信]** チェックボックスがオンになっています。ただし、場合によっては、各ユーザにオブジェクトを配信しないようにする場合もあります。たとえば、3 人の受信者が同一のパーソナライゼーション値を持っていると、パブリケーションインスタンスの同じデータが受信されます。**[各ユーザにオブジェクトを配信]** チェックボックスをオフにした場合は、1 つのパブリケーションインスタンスが生成され、それが 3 人の受信者すべてに配信されます。**[各ユーザにオブジェクトを配信]** チェックボックスをオンにした場合は、同じパブリケーションインスタンスが 3 回 (受信者ごとに 1 回ずつ) 配信されます。

デフォルトの *Enterprise* の場所

この場所にパブリケーションを送信する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。

表 60:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
それを作成したフォルダ	<ul style="list-style-type: none">• すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ)• パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) ファイルとしてパッケージ化する	Output File Repository Server 履歴のインスタンスはデフォルトの Enterprise サーバに保存されますが、他の出力先には保存されません。

BI 受信ボックス

表 61:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
各受信者の BI 受信ボックス	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する 個別のユーザにオブジェクトを配信するユーザをすばやく見つけるには、[タイトル]の検索] ボックスで受信者のユーザ名、フルネーム、または電子メールアドレスを検索できます。 デフォルトのファイル名を使用するか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。 パブリケーションをショートカットまたはコピーとして送信する パブリケーションを受信者の BI 受信ボックスにショートカットとして送信する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。パブリケーションのショートカットを BI 受信ボックスに送信するには、出力先として、[BI 受信ボックス] および [デフォルトの Enterprise の場所] の両方を選択します。 すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 指定された BI 受信ボックス

電子メール

レポートインスタンスをスケジュールするかこの出力先に送信するには、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) の出力先を有効にして設定する必要があります。

表 62:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
電子メールで各受信者に	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する 個別のユーザにオブジェクトを配信する (必須) 差出人 ボックスに自分の電子メールアドレスを入力する。 電子メールアドレスを入力しない場合、BI プラットフォームでは、公開者のアカウントに関連付けられている電子メールアドレスが使用されます。公開者のアカウントに電子メールアドレスがない場合、プラットフォームでは、Adaptive Job Server の電子メールアドレスが使用されます。[差出人] ボックス、公開者のアカウント、または Adaptive Job Server のいずれにも電子メールアドレスがない場合、パブリケーションは失敗します。 宛先 ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレス のプレースホルダを追加する CC ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレス のプレースホルダを追加する BCC ボックスに、受信者の電子メールアドレスを入力するか、電子メールアドレス のプレースホルダを追加する [件名] ボックスに件名を入力するか、プレースホルダを追加する [メッセージ] ボックスに、パブリケーションと一緒に配信する情報を入力するか、プレースホルダを追加して電子メール本文に動的コンテンツドキュメントを埋め込む ソースドキュメントのインスタンスを電子メールに添付する デフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用する を選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子 のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 指定された電子メール受信者

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
	<p>ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	

FTP サーバ

パブリケーションを **FTP サーバ** 出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、**各ユーザーにオブジェクトを配信** チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。[各ユーザーにオブジェクトを配信] をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するプレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

表 63:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
<p>FTP サーバ</p> <p>(ホストボックスに、FTP サーバの場所を入力する必要があります。入力しないと、プラットフォームは、Adaptive Job Server 用に設定された FTP サーバを使用します)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 出力先のデフォルト設定を使用する ポート番号、ユーザー名とパスワード、およびアカウントを入力する ディレクトリ名を入力する。 デフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。 ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。 すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ) パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する 	<ul style="list-style-type: none"> Output File Repository Server 選択された FTP サーバ

ファイルシステム

パブリケーションをファイルシステム出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、各ユーザにオブジェクトを配信チェックボックスをオフにすると、処理時間全体を短縮できます。各ユーザにオブジェクトを配信をオフにする場合は、出力先の設定時に使用するプレースホルダには、受信者ではなく公開者の情報が入力されます。

表 64:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
ファイルシステムのディレクトリ (パブリケーションのディレクトリを入力する必要があります)。	<ul style="list-style-type: none">出力先のデフォルト設定を使用するファイルの場所にアクセスするためのユーザ名とパスワードを入力する個別のユーザにオブジェクトを配信するデフォルトのファイル名を受け入れるか、ファイル名を入力するか、プレースホルダを追加する 指定の名前を使用するを選択する場合は、ファイル拡張子を入力するか、ボックスにファイル拡張子のプレースホルダを追加します。ファイル名に自動的に拡張子を追加する ファイル名にファイル拡張子を追加しないと、ドキュメントを開けない場合があります。すべてのエクスポートされた PDF ドキュメントを結合する (Crystal レポートのみ)パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する	<ul style="list-style-type: none">Output File Repository Server選択されたファイルの場所

SAP StreamWork

この出力先は、BI プラットフォームでコラボレーションが設定されて有効化されている場合に使用できます。

表 65:

パブリケーション出力先	パブリケーションで実行可能なアクション	インスタンスの保存先
他のユーザとのコラボレーションのために送信されます。	<ul style="list-style-type: none"> Crystal レポートおよび Web Intelligence ドキュメントのコラボレーションアクティビティへの送信またはスケジュール フィードの監視 コメントおよびディスカッションを追跡するドキュメントおよびインスタンスのフォロー ドキュメントおよびインスタンスへのコメントの投稿、およびパブリックドキュメントに関して他のユーザによって投稿されたコメントの表示 	次のコラボレーションアプリケーションのいずれか: <ul style="list-style-type: none"> SAP StreamWork

11.1.6.5 定期的なパターンの選択

定期的なスケジュールパターンでは、パブリケーションの実行頻度を決定します。[スケジュール](#)ダイアログボックスで、パブリケーションの定期的なパターンを選択します。

1. 定期的なパターンを設定するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [\[スケジュール\]](#) ダイアログボックスで[\[定期\]](#)をクリックします。
3. [\[オブジェクトの実行\]](#) リストで、定期的なスケジュールパターンを選択します。
4. [可能な再試行回数](#)ボックスに、失敗したジョブをサーバが再実行する回数を入力します。
5. [再試行間隔 \(秒単位\)](#)ボックスに、サーバがジョブを再実行する前に待機する秒数を設定します
6. [スケジュール](#)をクリックします。

パブリケーションは、スケジュールされた時刻に実行されます。

11.1.6.5.1 定期パターンオプション

表 66:

オプション	説明
今すぐ	オブジェクトを 1 回実行します。すぐに開始されます。

オプション	説明
1 回	<p>指定された開始時間に、オブジェクトを 1 回だけ実行します。イベントを使用してオブジェクトをスケジュールする場合、開始時間と終了時間の間にイベントが発生すると、オブジェクトは 1 度だけ実行されます。</p> <p>開始日時リストおよび終了日時リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
時間単位	<p>指定された時間に、毎時間インスタンスを作成します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎時間指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>時間 (N) リストおよび分 (X) リストでオブジェクトの実行時間を選択し、開始日時リストおよび終了日時リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
日単位	<p>指定された開始時間に、オブジェクトを 1 日に 1 回だけ実行します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎日指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>日数 (N) ボックスでオブジェクトを実行する曜日を選択し、開始日時リストおよび終了日時リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
週単位	<p>毎週指定された曜日の指定された開始時間に、オブジェクトを実行します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎週指定された曜日の指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>オブジェクトを実行する各曜日のチェックボックスを選択し、開始日時リストおよび終了日時リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>
月単位	<p>指定された月間隔で、指定された日の指定された開始時間に、オブジェクトを実行します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、指定された月間隔の指定された時間にインスタンスが作成されます。</p> <p>月 (N) ボックスでオブジェクトを実行する月を選択し、開始日時リストおよび終了日時リストで、オブジェクトの開始日時および終了日時を選択し、開始日時および終了日時を入力します。</p>

オプション	説明
N 日	毎月指定された日の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。指定された開始日時に最初のインスタンスが作成されると、指定された終了時間にオブジェクトの実行が終了するまで、毎月指定された日の指定された時間にインスタンスが作成されます。 オブジェクトの実行開始日時および終了日時、オブジェクトを実行する月の日を入力します。
第 1 月曜日	毎月第 1 月曜日の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。 オブジェクトの実行開始時間および実行停止時間を入力します。
月末日	毎月月末の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。 オブジェクトの実行開始時間および実行停止時間を入力します。
第 N 週の X 日	毎月指定された週の日の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。 オブジェクトの実行開始日時および終了日時、オブジェクトを実行する月の週と週の日を入力します。
カレンダー	指定されたカレンダーの日付の指定された開始時間に、インスタンスを作成します。 オブジェクトの実行開始時間および終了時間を入力し、オブジェクトを実行するカレンダーの日付を選択します。

11.1.6.6 パブリケーションソースドキュメントのパーソナライズされたプレースホルダの選択

スケジュールダイアログボックスで、パブリケーションのパーソナライズされたプレースホルダを選択します。

パーソナライズされたプレースホルダをパブリケーションインスタンス名に使用する前に、パブリケーションのソースドキュメントで、データをフィルタリングするためのパーソナライゼーションを使用している必要があります。

パブリケーションインスタンスのスケジュール時に、ソースドキュメントの**指定の名前を使用する**フィールドでプレースホルダを使用し、パブリケーション名でテキストとプレースホルダを組み合わせることができます。また、複数のプレースホルダを使用することもできます。

1. プレースホルダを選択するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[出力先](#)をクリックします。
3. [\[選択した出力先のオプションを表示\]](#)の下で [\[指定の名前を使用する\]](#)を選択し、[\[プレースホルダの追加\]](#)リストからパブリケーション名に対するプレースホルダを選択します。
選択したプレースホルダは、ドキュメントタイトルの [\[指定の名前\]](#) ボックスに表示されます。
4. 個々のドキュメントを追加するには、以下の手順に従います。
 - a. [\[ターゲット名\]](#)の下で、[\[ドキュメントごとの指定の名前\]](#)を選択します。

b. ドキュメントタイトルごとに、[[プレースホルダの追加](#)] リストからプレースホルダを選択します。

選択したプレースホルダは、各ドキュメントタイトルの [[指定の名前](#)] ボックスに表示されます。

5. [OK](#) をクリックします。

パブリケーションに対するパーソナライズの設定が終了したら、パーソナライズされたプレースホルダは [[出力先](#)] ダイアログボックスの [[プレースホルダの追加](#)] リストに表示されます。

11.1.6.7 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダの選択

[スケジュール](#) ダイアログボックスで、パブリケーションのパーソナライズされたプレースホルダを選択します。

すべての電子メールフィールドで、テキストとプレースホルダを組み合わせ使用できるほか、複数のプレースホルダを使用できます。電子メール出力先へのパブリケーションをスケジュールする場合、[[差出人](#)]、[[宛先](#)]、[[CC](#)]、[[BCC](#)]、[[件名](#)]、[[メッセージ](#)]、および [[指定の名前を使用する](#)] フィールドにプレースホルダを使用できます。

1. プレースホルダを選択するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#) を選択します。
2. [スケジュール](#) ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[出力先](#) をクリックします。
3. [[出力先](#)] リストで、[[電子メール](#)] を選択します。
4. 必要に応じて、プレースホルダを含めて出力先オプションを設定します。
5. [OK](#) をクリックします。

11.1.6.8 電子メールへの動的ソースドキュメントのコンテンツの埋め込み

[スケジュール](#) ダイアログボックスで、パブリケーションのソースドキュメントのコンテンツを埋め込みます。

動的コンテンツドキュメントから、電子メールの本文にコンテンツを埋め込むことができます。Crystal レポートの場合は、レポートのコンテンツを埋め込むことができます。Web Intelligence ドキュメントの場合は、ドキュメント全体または 1 つのレポートタブを埋め込むことができます。

1. コンテンツを取得するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#) を選択します。
2. [スケジュール](#) ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[形式](#) をクリックします。
3. (Crystal レポートのみ) [選択したドキュメントの形式オプション](#) で [mHTML](#) チェックボックスを選択します。
4. (Web Intelligence ドキュメントのみ) ドキュメント全体を公開するか、レポートタブの 1 つを公開するかを選択します。
 - a. [[出力形式](#)] で、[[mHTML](#)] チェックボックスを選択します。
 - b. [[出力形式の詳細](#)] で、[[すべてのレポート](#)] を選択してドキュメント全体を公開するか、[[1 つのレポートを選択](#)] を選択してリスト内のレポートタブを選択します。
5. ナビゲーション一覧で [[出力先](#)] をクリックします。
6. [[出力先](#)] ダイアログボックスの [[送信先の選択](#)] で、[[電子メール](#)] チェックボックスを選択します。

電子メールの設定オプションが表示されます。
7. [差出人](#) ボックスで、名前または電子メールアドレスを入力するか、[プレースホルダの追加](#) リストで [電子メール](#) を選択します。

たとえば、**Robert**、**公開者**、**publisher@sap.com** などを入力できます。名前を入力すると、**Publisher@<EmailServer>** のように、その名前が電子メールサーバに追加されます。

8. **件名**ボックスで、件名を入力するか、プレースホルダを選択します。
レポートをパーソナライズした場合、パーソナライズされたプレースホルダは **[プレースホルダの追加]** リストで使用できるようになります。
9. **メッセージ**ボックスに、電子メールの本文に表示するメッセージを入力します。
10. **メッセージ**ボックスに動的コンテンツを埋め込むには、コンテンツを埋め込む**メッセージ**ボックスにカーソルを置いて、**プレースホルダの追加**リストから**レポート HTML コンテンツ**を選択します。
メッセージボックスに、**%SL_DOCUMENT_HTML_CONTENT%** と表示されます。パブリケーションの実行時、動的コンテンツドキュメントのパーソナライズされたコンテンツにプレースホルダが置き換えられます。
11. パブリケーションにその他のソースドキュメントが含まれている場合、**[添付ファイルの追加]** チェックボックスを選択します。
パブリケーションの実行時、パブリケーション内のその他のソースドキュメントは、添付ファイルとして電子メールに追加されます。
12. **OK** をクリックします。

11.1.6.9 Crystal レポートのデザイン

11.1.6.9.1 Crystal レポートでのパーソナライゼーション

パラメータまたはフィールドのフィルタリングによって受信者の Crystal レポートをパーソナライズできます。

可能な場合は、Crystal レポートをローカルプロファイルターゲットでパーソナライズしてください。パラメータがレコード選択式、コマンド、テーブル、またはストアドプロシージャで使用される場合、パラメータベースのパーソナライゼーションでは受信者ごとにデータベースフェッチを 1 回行う必要があり、パブリケーションの処理に時間がかかる場合があります。

たとえば、プロファイルがパラメータにマップされ、Enterprise 受信者のプロファイル値がパラメータ値と競合する場合は、パブリケーションが実行されると、プロファイル値によってパラメータ値が上書きされます。同様に、動的受信者ソースの値が動的受信者のパラメータ値と競合する場合、パブリケーションが実行されるとパラメータ値は上書きされます。

パラメータに基づくパーソナライゼーションは、他のパーソナライゼーション方法で上書きされます。

11.1.6.9.1.1 パラメータ値を使用した Crystal レポートのパーソナライズ

スケジュールダイアログボックスで、Crystal レポートをパーソナライズできます。

- Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。
 - このタスクを実行するには、Crystal レポートにパラメータが含まれている必要があります。
1. パーソナライズする Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
 2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**パーソナライゼーション**をクリックします。
 3. **[パラメータ]** でパラメータ値を検討し、変更が必要な値がないか確認します。

4. デフォルト値を変更する場合は、デフォルトパラメータ値の横にある値の編集ボタンをクリックし、パラメータ値を選択または入力して OK をクリックします。
 5. 次の操作のいずれかを実行します。
 - デフォルトパラメータのパーソナライゼーション値を Enterprise 受信者のプロファイル値で上書きする場合は、[\[Enterprise 受信者のマッピング\]](#) 列で、一覧からプロファイルを選択します。
このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。
 - デフォルトパラメータ値のみを使用してレポートをパーソナライズする場合は、[\[Enterprise 受信者のマッピング\]](#) 列で [\[すべての受信者のデフォルト値\]](#) を選択します。
- [\[Enterprise 受信者のマッピング\]](#) 列は、Enterprise 受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。
6. デフォルトパラメータのパーソナライゼーション値を動的受信者のパーソナライゼーション値で上書きする場合は、[\[動的受信者のマッピング\]](#) 列で、一覧から動的受信者ソースを選択します。
- [\[動的受信者のマッピング\]](#) 列は、動的受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。
- デフォルトパラメータ値を使用してレポートをパーソナライズする場合は、[\[動的受信者のマッピング\]](#) 列で [\[指定なし\]](#) を選択します。
7. OK をクリックします。

11.1.6.9.1.2 フィールドのフィルタリングによる Crystal レポートのパーソナライズ

[スケジュール](#)ダイアログボックスで、Crystal レポートをパーソナライズします。

Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。

フィルタを使用すると、ViewTime 選択式がレポートに追加され、データがフィルタリングされます。この式は、パブリケーションが実行され、レポートに保存されていない場合に適用されます。Crystal レポートでは、複数のフィールドをフィルタリングできます。静的値のプロファイルでは、Crystal レポートの文字列フィールドのみをフィルタリングできます。他の種類のフィールドをフィルタ処理する場合は、式のプロファイル値を使用します。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。

この機能は、.rptx 形式の Crystal レポートでは使用できません。

1. パーソナライズする Crystal レポートを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[パーソナライゼーション](#)をクリックします。
3. [\[ローカルプロファイル\]](#) の [\[レポートフィールド\]](#) 列で、一覧から Crystal レポートフィールドを選択します。
使用可能なフィールドの一覧には、メインレポートおよび非オンデマンド型サブレポートのすべてのデータベースフィールドおよび繰り返し式が含まれています。
4. [\[Enterprise 受信者のマッピング\]](#) 列で、一覧からプロファイルを選択します。
このプロファイルは、Enterprise 受信者に対して定義されたレポートをプロファイル値にマップします。このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。プロファイルの追加が必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

[\[Enterprise 受信者のマッピング\]](#) 列は、Enterprise 受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。

5. [動的受信者のマッピング] 列で、一覧から動的受信者のソースを選択します。
レポートフィールドは、対応する値を含む動的受信者ソースの列にマッピングされます。

[動的受信者のマッピング] 列は、動的受信者向けのパブリケーションにのみ表示されます。

6. フィルタリング対象の各レポートフィールドに対し、手順 2 ～ 5 を繰り返します。
7. **OK** をクリックします。

11.1.6.9.2 Crystal レポートのパブリケーション形式の選択

スケジュールダイアログボックスで、Crystal レポートのパブリケーション形式を選択します。

1 つの Crystal レポートに対して複数のパブリケーション形式を選択して設定することができます。形式を選択すると、使用可能な形式オプションが表示されます。[Crystal Reports] および [Crystal Reports (RPTR)] などの一部のオプションでは、形式オプションが表示されず、デフォルトのソースドキュメント形式が適用されます。

1. パブリケーション形式を選択する Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**形式**をクリックします。
3. [選択したドキュメントの形式オプション] で、Crystal レポートを公開する形式を選択します。
選択した形式のオプションが表示されます。
4. 必要に応じて書式オプションを設定します。
5. [レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスが使用可能な場合は、以下のいずれかを行います。
 - ソースドキュメントで定義されているデフォルトのエクスポートオプションを使用する場合は、チェックボックスをオンにします。
 - 選択した形式でのエクスポートオプションを設定する場合は、チェックボックスをオフにして、表示されるオプションを設定します。
6. Crystal レポートを公開する各形式に対し、手順 3 ～ 5 を繰り返します。
7. **OK** をクリックします。

パブリケーションの Crystal レポートごとに、このタスクを繰り返します。

11.1.6.9.2.1 Crystal レポートの書式設定オプション

書式設定オプションとして [\[タブ区切りテキスト \(TTX\)\]](#) を選択する場合は、追加のオプションは表示されません。[PDF](#) オプションは、PDF ファイルとして公開されるソースドキュメントに適用されます。

Microsoft Excel(97-2003)

表 67:

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を Excel ファイルとして公開する場合は、すべてを選択します。特定のレポートページを公開するには、ページを選択し、開始ボックスに最初のページ番号を入力してから、終了ボックスに最後のページ番号を入力します。
[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none">レポートのオブジェクトを基準にして列幅を定義するには、列幅を次のオブジェクトに合わせるを選択して、一覧からオプションを選択します: レポート全体、レポートヘッダ、ページヘッダ、グループヘッダ #、詳細、グループフッタ #、ページフッタ、あるいは レポートフッタ。すべてのレポート列に対して一定の幅を定義する場合は、列幅を一定にする (ポイント単位)を選択して、ボックスに数値を入力します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	Excel ファイルでヘッダとフッタを表示する頻度を選択する場合は、このチェックボックスを選択して、一覧からオプションを選択します: なし 、 レポートごとに 1 回 、または 各ページ 。
ページごとにページ区切りを作成	このチェックボックスを選択すると、レポートのページ区切りを反映するページ区切りを作成できます。
日付の値を文字列に変換する	このチェックボックスを選択すると、データ値をテキスト文字列に変換できます。
グリッドラインの表示	このチェックボックスを選択すると、Excel ファイルにグリッドラインを表示できます。

Microsoft Excel (97-2003) (データのみ)

表 68:

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none"> レポートのオブジェクトを基準にして列幅を定義するには、列幅を次のオブジェクトに合わせるを選択して、一覧からオプションを選択します: レポート全体、レポートヘッダ、ページヘッダ、グループヘッダ #、詳細、グループフッタ #、ページフッタ、あるいはレポートフッタ。 すべてのレポート列に対して一定の幅を定義する場合は、列幅を一定にする (ポイント単位)を選択して、ボックスに数値を入力します。
オブジェクトの書式設定をエクスポートする	レポートのオブジェクトの書式設定を維持するには、このチェックボックスを選択します。
画像をエクスポートする	Excel ファイルでレポート画像を公開するには、このチェックボックスを選択します。
集計にワークシートの関数を使用する	レポートの集計を使用して Excel ファイルのワークシート関数を作成するには、このチェックボックスを選択します。
オブジェクトの相対位置を維持する	レポートオブジェクトの相対位置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
列の配置を維持する	レポートの列の配置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	Excel ファイルでヘッダとフッタを表示する頻度を選択する場合は、このチェックボックスを選択して、一覧からオプションを選択します: なし 、 レポートごとに 1 回 、または 各ページ 。
ページヘッダを簡略化する	レポートのページヘッダを簡略化する場合は、このチェックボックスを選択します。
グループのアウトラインを表示する	レポートのグループアウトラインを表示するには、このチェックボックスを選択します。

Microsoft Excel ワークブックデータのみ

表 69:

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
列幅の設定	<ul style="list-style-type: none"> レポートのオブジェクトを基準にして列幅を定義するには、列幅を次のオブジェクトに合わせるを選択して、一覧からオプションを選択します: レポート全体、レポートヘッダ、ページヘッダ、グループヘッダ #、詳細、グループフッタ #、ページフッタ、あるいはレポートフッタ。 すべてのレポート列に対して一定の幅を定義する場合は、列幅を一定にする (ポイント単位)を選択して、ボックスに数値を入力します。
オブジェクトの書式設定をエクスポートする	レポートのオブジェクトの書式設定を維持するには、このチェックボックスを選択します。
画像をエクスポートする	Excel ファイルでレポート画像を公開するには、このチェックボックスを選択します。
集計にワークシートの関数を使用する	レポートの集計を使用して Excel ファイルのワークシート関数を作成するには、このチェックボックスを選択します。
オブジェクトの相対位置を維持する	レポートオブジェクトの相対位置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
列の配置を維持する	レポートの列の配置を維持するには、このチェックボックスを選択します。
ページヘッダとページフッタをエクスポートする	Excel ファイルでヘッダとフッタを表示する頻度を選択する場合は、このチェックボックスを選択して、一覧からオプションを選択します: なし、レポートごとに 1 回、または各ページ 。
ページヘッダを簡略化する	レポートのページヘッダを簡略化する場合は、このチェックボックスを選択します。
グループのアウトラインを表示する	レポートのグループアウトラインを表示するには、このチェックボックスを選択します。

Microsoft Word(97-2003)

表 70:

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を Word ファイルとして公開する場合は、すべてを選択します。特定のレポートページを公開するには、ページを選択し、開始ボックスに最初のページ番号を入力してから、終了ボックスに最後のページ番号を入力します。

PDF

表 71:

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を PDF ファイルとして公開する場合は、すべてを選択します。特定のレポートページを公開するには、ページを選択し、開始ボックスに最初のページ番号を入力してから、終了ボックスに最後のページ番号を入力します。
[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
グループツリーからブックマークを作成	Crystal レポートのパブリケーションを目次付きの結合 PDF ファイルとして公開する場合は、このチェックボックスを選択します。

リッチテキスト形式(RTF)

表 72:

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を RTF ファイルとして公開する場合は、すべてを選択します。特定のレポートページを公開するには、ページを選択し、開始ボックスに最初のページ番号を入力してから、終了ボックスに最後のページ番号を入力します。

Microsoft Word - 編集可能 (RTF)

表 73:

オプション	説明
ページ範囲	<ul style="list-style-type: none">レポート全体を Word ファイルとして公開する場合は、すべてを選択します。特定のレポートページを公開するには、ページを選択し、開始ボックスに最初のページ番号を入力してから、終了ボックスに最後のページ番号を入力します。
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
レポートのページごとに改ページする	このチェックボックスを選択すると、レポートのページ区切りを反映するページ区切りを作成できます。

テキスト

表 74:

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
インチあたりの文字数	テキストファイルで 1 インチあたりに表示する文字数を入力します。推奨される範囲は 8 ～ 16 です。

ページ区切り付きテキスト

表 75:

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
1 ページあたりの行数	ページ区切り付きテキストファイルで 1 ページあたりに表示する行数を入力します。
インチあたりの文字数	ページ区切り付きテキストファイルで 1 インチあたりに表示する文字数を入力します。推奨される範囲は 8 ～ 16 です。

カンマ区切り値(CSV)

表 76:

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
区切り文字	区切り文字として使用する文字を入力します。
区切り文字	値の区切り文字として使用する文字を入力するか、 タブ チェックボックスを選択してタブで値を区切ります。
モード	[標準モード] (デフォルト) または [レガシーモード] を選択します。 標準モードでは、CSV 出力にレポートのページ、グループヘッダ、およびグループフッタを表示する方法を制御できます。
レポートセクションとページセクション	<ul style="list-style-type: none">レポートセクションとページセクションをエクスポートする場合は、エクスポートを選択します。レポートセクションとページセクションをエクスポートしない場合は、エクスポートしないを選択します。レポートセクションとページセクションを切り離す場合は、レポート/ページセクションを切り離すチェックボックスを選択します。
グループセクション	<ul style="list-style-type: none">グループセクションをエクスポートする場合は、エクスポートを選択します。グループセクションをエクスポートしない場合は、エクスポートしないを選択します。グループセクションを切り離す場合は、レポート/ページセクションを切り離すチェックボックスを選択します。

XML

表 77:

オプション	説明
レポートで指定されたエクスポートオプションを使用チェックボックスをオフにすると、次のオプションを使用できます。	
XML エクスポート形式	XML 形式を指定するには、一覧からオプションを選択します。

11.1.6.9.3 (オプション) パブリケーションの Crystal レポートでの印刷オプションの選択

スケジュールダイアログボックスで、Crystal レポートの印刷オプションを選択します。

デフォルトプリンタの印刷オプションを設定する前に、以下の条件が満たされている必要があります。

- プリンタを適切に設置および設定されている。
- Crystal Reports Job Server が、指定したプリンタにアクセスする権限を持つアカウントによって実行されている。
詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

Crystal Reports Job Server のデフォルトプリンタまたはその他のプリンタを使用して、パブリケーションを実行するたびに Crystal レポート形式のインスタンスを印刷できます。BI プラットフォームは、パブリケーションがパーソナライズされた後、それが配信される前にインスタンスを印刷します。

1. 印刷オプションを設定する Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**印刷設定**をクリックします。
3. **[ドキュメント]** で、パブリケーションの実行時に印刷する Crystal レポートを選択します。
4. **[スケジュール時に Crystal レポートを印刷する]** チェックボックスを選択します。
Crystal レポートの印刷オプションが表示されます。
5. **[通常使用するプリンタ]** を選択して Job Server のデフォルトプリンタを使用するか、**[プリンタの指定]** を選択して、プリンタのパスおよび名前を選択します。
 - Job Server が Windows で実行されている場合には、**プリンタを指定する**ボックスに `\\<PrintServer>\<PrinterName>` と入力します。
`<PrintServer>` には使用しているプリンタサーバの名前を入力し、`<PrinterName>` には使用しているプリンタの名前を入力してください。
 - Job Server が Unix で実行されている場合は、Unix が表示されている (非表示でない) ことを確認し、通常使用する印刷コマンドを**プリンタを指定**ボックスに入力します。
たとえば、`lp -d <PrinterName>` と入力します。
6. **部数**ボックスに、印刷する部数を入力します。
7. **[ページ範囲]** で、**[すべて]** を選択してパブリケーションのすべてのページを印刷するか、**[ページ]** を選択して、印刷するページ範囲を入力します。
8. (オプション) **[部単位で印刷するオプションを設定]** リストで、**[部単位で印刷]**、**[ページ単位で印刷]**、または **[プリンタのデフォルト値を使用]** を選択します。
9. (オプション) **[ページの拡大縮小]** リストで、**[拡大して合わせる]**、**[縮小のみで合わせる]**、または **[縮小拡大しない]** を選択します。
10. (オプション) レポートコンテンツをページ上で中央揃えにするには、**[ページの中央揃え]** チェックボックスをオンにします。
11. (オプション) 幅の広い Crystal レポートを 1 ページに印刷するには、**[横方向のページを 1 ページに合わせる]** チェックボックスをオンにします。
12. **スケジュール**をクリックします。

11.1.6.9.4 (オプション) Crystal レポートの受信者配信ルールを選択

スケジュールダイアログボックスで、Crystal レポートの受信者配信ルールを選択します。

受信者配信ルールでは、処理およびパーソナライゼーションの後、各受信者にパブリケーションを配信するかどうかを決定します。パブリケーションの作成後、パブリケーションを開いてその配信ルールを変更できます。

1. 受信者配信ルールを設定する Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスで、**追加オプション**を展開し、ナビゲーションリストで**配信ルール**をクリックします。
3. **[受信者配信ルール]** で、**[条件に一致するときに個々のドキュメントを配信する]** または **[すべての条件が一致する場合のみすべてのドキュメントを配信する]** を選択します。

4. 各ドキュメントの横にある **[条件]** 列で、パブリケーションを配信するために満たす必要がある条件を選択します。
5. **保存して閉じる** をクリックします。

11.1.6.9.5 (オプション) Crystal レポートのグローバル配信ルールを選択

スケジュール ダイアログボックスで、Crystal レポートのグローバル配信ルールを選択します。

グローバル配信ルールを設定するには、Crystal レポートにアラートが含まれている必要があります。

グローバル配信ルールでは、パブリケーションを処理してすべての受信者に配信するかどうかを決定します。グローバル配信ルールは、BI プラットフォームの任意の Crystal レポートで設定できます。

1. グローバル配信ルールを選択する Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール** を選択します。
2. **スケジュール** ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**配信ルール** をクリックします。
3. **[グローバル配信ルール]** で、**[参照]** をクリックします。
グローバル配信ルールを設定する Crystal レポートを選択することができる **[アラートを含むレポートを選択します]** ウィンドウが表示されます。
4. Crystal レポートを見つけて選択し、**[OK]** をクリックします。
5. **[条件]** リストで、グローバル配信ルールを満たすためにレポートに必要なアラート値を選択します。
6. **スケジュール** をクリックします。

11.1.6.9.6 (オプション) Crystal レポートからの結合 PDF ファイルの書式設定

スケジュール ダイアログボックスで、Crystal レポートからの結合 PDF ファイルの書式設定を行います。

結合 PDF ファイルを書式設定する前に

- Crystal レポートを結合 PDF ファイルに含めるには、レポートにタイトルが必要です。レポートのタイトルを設定するには、レポートを SAP Crystal Reports で開き、**ファイル > プロパティ** を選択し、**概要** タブの **タイトル** ボックスにレポートのタイトルを入力します。レポートを保存し、リポジトリに再エクスポートします。
- BI ラウンチパッドでは、**スケジュール** ダイアログボックスの **ソースドキュメント** に、結合する Crystal レポートおよび PDF ファイルが正しい順序で表示されている必要があります。
- BI ラウンチパッドでは、**スケジュール** ダイアログボックスの **書式設定** で、結合 PDF ファイルに含める Crystal レポートの形式として、各レポートに対し **PDF** チェックボックスが選択されている必要があります。
- BI ラウンチパッドでは、**スケジュール** ダイアログボックスの **出力先** で、結合 PDF ファイルを送信する各出力先に対し、**エクスポートされた PDF をマージ** チェックボックスが選択されている必要があります。

結合 PDF ファイルの目次に Crystal レポートが確実に表示されるようにするには、リストされている各 Crystal レポートについて、**書式設定** 領域の **ドキュメント** リストでレポートを選択し、**レポートで指定されたエクスポートオプション** を使用チェックボックスを選択解除し、**グループツリー** から **ブックマークを作成** チェックボックスを選択します。

1. 結合 PDF ファイルの書式設定を行う Crystal レポートを右クリックして、**スケジュール** を選択します。

2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[結合 PDF オプション](#)をクリックします。
3. 結合 PDF ファイルの目次を作成します。
 - a. [\[目次の作成\]](#) チェックボックスをオンにします。
目次の書式設定オプションが表示されます。
 - b. [タイトル](#)ボックスに、目次のタイトルを入力します。
 - c. [\[タイトルのフォント\]](#) 一覧で、目次のタイトルのフォント、フォントサイズ (ポイント単位)、およびフォントの色を選択します。
 - d. [\[アイテムのフォント\]](#) 一覧で、目次のアイテムのフォント、フォントサイズ (ポイント単位)、およびフォントの色を選択します。
4. 結合 PDF ファイルのページ番号の書式設定を行います。
 - a. [\[連続したページ番号を適用\]](#) チェックボックスをオンにします。
ページ番号の書式設定オプションが表示されます。
 - b. [数値の書式設定](#)ボックスにページ番号の書式を入力します。
デフォルトでは、Page &p of &P が設定されています。この書式は変更できます。ただし、現在のページ番号のプレースホルダには &p、ページ総数のプレースホルダには &P を使用する必要があります。
 - c. [\[数値の場所\]](#) 一覧で、結合 PDF ファイルのページ番号の向きを選択します。
 - d. [\[数値のフォント\]](#) 一覧で、ページ番号のフォント、フォントサイズ (ポイント単位)、フォントの色を選択します。
 - e. 目次にページ番号を含める場合は、[\[目次ページにページ番号を適用\]](#) チェックボックスをオンにします。
5. 受信者のログオン認証情報と受信者アクションに関する許可を設定します。
 - a. [\[制限の設定\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - b. [ユーザパスワード](#)ボックスに、結合 PDF ファイルを受信者が表示する場合に必要なパスワードを入力します。
 - c. [所有者パスワード](#)ボックスに、結合 PDF ファイルを受信者が編集する場合に必要なパスワードを入力します。
 - d. 受信者が PDF ファイルを印刷できるようにするには、[\[印刷を許可\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - e. 受信者が PDF ファイルを変更できるようにするには、[\[コンテンツの変更を許可\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - f. 受信者が PDF のコンテンツをコピーおよび貼り付けできるようにするには、[\[コピーと貼り付けを許可 \(埋め込まれた Flash オブジェクトの実行に必要\)\]](#) チェックボックスをオンにします。
 - g. 受信者が PDF ファイルの注釈を変更できるようにするには、[\[注釈の変更を許可\]](#) チェックボックスをオンにします。
6. [OK](#) をクリックします。

11.1.6.9.7 (オプション) Crystal レポートのデータベースログオン情報の設定

受信者がデータベースにログオンしたり、Crystal レポートのデータを最新表示したりする場合に使用するデータベースログオン情報を設定できます。[スケジュール](#)ダイアログボックスで、データベースログオン情報を設定します。

Crystal レポートのデータベース設定が正しいことを確認してください。CMC の [フォルダ](#) で Crystal レポートを選択し、[管理](#) [> デフォルト設定](#) [> データベース設定](#) を選択し、データベース情報を確認するか、新しい情報を入力します。

場合によっては、Crystal レポートが内部的に参照するデータソース情報を修正する必要があります。SAP Crystal Reports で Crystal レポートを開き、[データベース](#) [> データベースの保存場所の設定](#) の順に選択して、[データベースの保存場所の設定](#)ダイアログボックスで接続を選択するか、新しい接続を作成します。

1. データベースログオン情報を設定する Crystal レポートを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。

2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[データベースログオン](#)をクリックします。
3. [\[タイトル\]](#) 一覧から Crystal レポートを選択します。
Crystal レポートのデータベース情報が [\[タイトル\]](#) 一覧の下に表示されます。
4. [\[データベースサーバ\]](#) ボックスおよび [\[データベース\]](#) ボックスの情報が正しいことを確認します。
5. [ユーザ](#)ボックスに、受信者がログオンに使用するユーザ名を入力します。
6. [パスワード](#)ボックスに、受信者がログオンに使用するパスワードを入力します。
7. [OK](#) をクリックします。

11.1.6.10 Web Intelligence ドキュメントのデザイン

11.1.6.10.1 Web Intelligence ドキュメントのパブリケーション形式の選択

パブリケーションの各動的コンテンツソース Web Intelligence ドキュメントのパブリケーション形式を選択する必要があります。

1. パブリケーション形式を指定する Web Intelligence ドキュメントを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[形式](#)をクリックします。
3. [出力形式](#) で、Web Intelligence ドキュメントを公開する形式の横にあるチェックボックスを選択します。
 - [Web Intelligence](#)
 - [Microsoft Excel](#)
 - [Adobe Acrobat](#)
 - [mHTML](#)
4. [\[カンマ区切り値 \(CSV\)\]](#) を選択した場合、[\[形式オプションと設定\]](#) で以下のアクションを実行します。
 - a. [\[テキスト修飾子\]](#) リストで、テキスト修飾子を選択します。
 - b. [\[列区切り文字\]](#) リストで、列区切り文字を選択します。
 - c. [\[文字セット\]](#) リストで、文字セットを選択します。
 - d. 新しい文字セットを入力する場合、[新しい文字セットの入力](#)チェックボックスを選択し、ボックスに文字セットを入力します。
 - e. 指定した設定をデフォルトとして使用する場合、[\[デフォルト値として設定\]](#) チェックボックスを選択します。
 - f. 各データソースに対してカンマ区切り値を生成する場合、[\[データプロバイダごとに個別の CSV を生成する\]](#) チェックボックスを選択します。
5. ドキュメントを公開する各形式に対し、手順 3 ~ 4 を繰り返します。
6. [OK](#) をクリックします。

11.1.6.10.2 グローバルプロファイルターゲットを使用する Web Intelligence ドキュメントのパーソナライゼーション

グローバルプロファイルターゲットを使用してフィルタ処理することにより、Enterprise 受信者向けの Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズできます。

- Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。プロファイルがプラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。
- Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズする前に、プロファイルにグローバルプロファイルターゲットが含まれることを確認します。

グローバルプロファイルの下でパーソナライゼーションを定義する場合は、フィルタの下でのパーソナライゼーションオプションを設定する必要はありません。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

1. パーソナライズする Web Intelligence ドキュメントを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**パーソナライゼーション**をクリックします。
3. [グローバルプロファイル] の下にある [Enterprise 受信者のマッピング] 列で、リスト内のプロファイルを選択します。
このプロファイルにより、ドキュメントが、Enterprise 受信者でフィルタリングされたユニバースフィールド (グローバルプロファイルターゲット) にマップされます。
4. **OK** をクリックします。

11.1.6.10.3 フィールドのフィルタリングによる Web Intelligence ドキュメントのパーソナライズ

データのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。このプロファイルがプラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。

静的な値のプロファイルは、ソースドキュメントの文字列フィールドのみをフィルタできます。他の種類のフィールドをフィルタ処理する場合は、式のプロファイル値を使用します。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

Web Intelligence ドキュメントを .wid 形式にスケジュールおよび公開すると、.wid ファイルが生成されます。.wid ファイルのフィルタは、適切なセキュリティ権限を持つ受信者であれば削除することができます。.wid ファイルが受信者または出力先に送信される場合は、フィルタは慎重に使用してください。たとえば、Web Intelligence ドキュメントをフィルタして受信者が参照できる情報を制限し、公開された .wid ファイルを受信者に送信した場合、ドキュメントを編集するセキュリティ権限を持つ受信者はフィルタを削除または更新して、表示されていないデータにアクセスすることができます。

1. パーソナライズする Web Intelligence ドキュメントを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **スケジュール**ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**パーソナライゼーション**をクリックします。
3. [ローカルプロファイル] の下で、[タイトル] 列のプロファイルごとに、[レポートフィールド] 列を選択します。
このプロファイルは、Enterprise 受信者向けにレポートフィールドをプロファイル値にマップします。
4. [ローカルプロファイル] の下にある [Enterprise 受信者のマッピング] 列で、リスト内のプロファイルを選択します。
このプロファイルにより、ドキュメントが、Enterprise 受信者でフィルタリングされたユニバースフィールド (グローバルプロファイルターゲット) にマップされます。

5. [動的受信者のマッピング] 列で、リスト内のプロファイルを選択します。

ソースドキュメント内のフィールドは、動的受信者ソース内の対応する値を含む列にマップされます。

6. フィルタする各フィールドに対し、手順 3 ～ 5 を繰り返します。

7. **OK** をクリックします。

11.1.6.11 オプションのパブリケーションタスク

この節のタスクはオプション（パブリケーションのデザインおよびスケジュールの必須設定ではない）ですが、パブリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。

11.1.6.11.1 オブジェクトに対するパラメータ (プロンプト) 値の編集

コンテンツオブジェクトでデフォルトパラメータ (プロンプト) 値を使用しない場合は、値を編集することができます。

パラメータ (プロンプト) 値を編集する前に、コンテンツオブジェクトにパラメータまたはプロンプトが含まれていることを確認します。

パラメータ (プロンプト) では、情報の入力が必要とされます。レポートオブジェクトでは、入力した情報によってレポートに表示されるデータが決まります。たとえば、営業で使用するレポートでは、ユーザに地域の選択を求めるパラメータが示されます。ユーザが地域を選択すると、レポートには、その地域の結果のみが表示されます。

Web Intelligence ドキュメントでは、パラメータはプロンプトと呼ばれます。SAP Business Explorer (SAP BEx) クエリに基づく Web Intelligence ドキュメントでは、プロンプトの値を固定するか、スケジュール済みのドキュメントの実行時に SAP Business Warehouse (SAP BW) データソース変数によって取得することができます。プロンプトには、SAP BW データソースの必須変数を含めることができます。

1. **ドキュメント** タブでパラメータ (プロンプト) 値を編集するオブジェクトを右クリックして、**スケジュール** を選択します。

2. **スケジュール** ダイアログボックスのナビゲーションリストで、**プロンプト** をクリックします。

パラメータ (プロンプト) オプションがどのように表示されるかは、システム管理者がパラメータまたはプロンプトを設定した方法に応じて、オブジェクトごとに異なります。たとえば、プログラムオブジェクトは **引数** ボックスに表示されることがあります。

プロンプト ボタンを使用できない場合、コンテンツオブジェクトにパラメータまたはプロンプトが含まれません。

3. (Crystal レポートのみ) **プロンプト** ダイアログボックスで **値の編集** をクリックし、パラメータ値を編集します。

4. (SAP BEx クエリに基づく Web Intelligence ドキュメントのみ) **プロンプト** ダイアログボックスで **変更** をクリックしてプロンプト値を編集するか、**クリア** をクリックして値を削除します。

SAP BW データソースは、プロンプトに対して入力された値を処理する必要があります。データソースが値を処理できない場合、ドキュメント実行は失敗します。たとえば、SAP BW Exit またはカスタム Exit 変数がプロンプトで動的変数として頻繁に使用されます。

クリア ボタンを使用できない場合、管理者が `<InstallDir>\<WebAppServer>\webapps\boe\web-inf\config\custom\AnalyticalReporting.properties` ファイルで `bex.dynamic_variable.schedule=true` を設定することで、このボタンを有効にできます。手順については、*Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド* を参照してください。

5. [スケジュール](#)をクリックします。

11.1.6.11.2 パブリケーションを起動するイベントの選択

イベントベースのスケジュールでは、パブリケーションを実行するタイミングに対して追加の制御を行うことができます。イベントを使用してパブリケーションをトリガするか、パブリケーションジョブを使用してイベントをトリガします。

イベントの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームユーザガイドを参照してください。

1. イベントを選択するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[イベント](#)をクリックします。
3. パブリケーションにファイルベースのカスタムイベントを指定するには、[\[>\]](#) ボタンをクリックしてイベントを [\[利用可能なイベント\]](#) リストから [\[待機するイベント\]](#) リストに移動します。
イベントにより、パブリケーションジョブが起動されます。
4. パブリケーションにスケジュールイベントを指定するには、[\[>\]](#) ボタンをクリックしてイベントを [\[利用可能なスケジュールイベント\]](#) リストから [\[完了時に発生させるイベント\]](#) リストに移動します。
パブリケーションジョブが実行されるとイベントが発生します。
5. [スケジュール](#)をクリックします。

11.1.6.11.3 パブリケーションでのサーバグループの選択

フェデレーションのサイトをまたいでパブリケーションをスケジュールすることはできません。サーバグループの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

1. サーバグループを選択するパブリケーションを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
2. [スケジュール](#)ダイアログボックスで、[サーバグループのスケジュール](#)をクリックします。
3. 元のサイトでパブリケーションジョブを実行する場合、[元のサイトで実行](#)チェックボックスを選択します。
4. サーバグループオプションを選択し、[スケジュール](#)をクリックします。

11.1.6.11.4 CMC におけるパブリケーション拡張の追加

パブリケーション拡張とは、ビジネスロジックをパブリケーションに適用するコードのライブラリです。パブリケーションで拡張を使用する前に、パブリケーション拡張を追加する必要があります。

パブリケーション拡張を使用する前に、Adaptive Processing Server を実行するすべてのコンピュータで拡張をデプロイしてから、Adaptive Processing Server および公開サービスをホストするその他のサーバ再起動します。サーバの場所は、オペレーティングシステムによって変わります。

- Windows の場合、サーバの場所は `<InstallDir>\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\java\lib\` です。
- Unix の場合、サーバの場所は `<InstallDir>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/` です。

パブリケーション拡張は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで追加できます。(BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時には追加できません)

パブリケーション拡張の実行順序を指定するには、[パブリケーション配信前] リストまたは [パブリケーション配信後] リストの下にある [上へ移動] または [下へ移動] をクリックします。パブリケーション拡張の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイドを参照してください。

1. CMC でフォルダ管理エリアに移動し、パブリケーション拡張を追加するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションを右クリックし、プロパティを選択します。
3. プロパティダイアログボックスのナビゲーションリストで追加オプションを展開し、パブリケーション拡張をクリックします。
4. パブリケーション拡張名ボックスにパブリケーション拡張の名前を入力します。
5. クラス名ボックスに、拡張の完全修飾クラス名を入力します。
6. (オプション) パラメータボックスに、パラメータ名を入力します。
7. 処理後かつ配信前に拡張を使用するには、[パブリケーション配信前] リストの上部にある [追加] ボタンをクリックします。
拡張が [パブリケーション配信前] リストに追加されます。
8. 配信後に拡張を使用するには、[パブリケーション配信後] リストの上部にある [追加] ボタンをクリックします。
拡張が [パブリケーション配信後] リストに追加されます。
9. 保存をクリックします。

11.1.6.11.5 CMC におけるパブリケーションジョブに対する電子メール通知の有効化

パブリケーションジョブの実行後に電子メールのメッセージを受信する必要がある場合は、電子メール通知を有効化します。

電子メール通知を有効化する前に、Adaptive Job Server が適切に設定されていることを確認します。

電子メール通知は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで有効化できます。(BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時には有効化できません)

1. CMC でフォルダ管理エリアに移動し、電子メール通知を有効化するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、スケジュールを選択します。
3. スケジュールダイアログボックスのナビゲーションリストで通知をクリックし、電子メール通知: 無効を展開します。
4. 成功したパブリケーションジョブの場合、デフォルトの受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、ジョブの実行に成功しましたチェックボックスを選択し、Job Server のデフォルト値を使用するを選択して、Adaptive Job Server でデフォルトアドレスを使用します。
5. 成功したパブリケーションジョブの場合、指定した受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、ジョブの実行に成功しましたチェックボックスを選択し、ここで使用する値を設定するを選択して、以下の操作を実行します。
 - a. 差出人ボックスに、通知の送信元の電子メールアドレスまたは名前を入力します。
 - b. 宛先ボックスに、通知を受信する必要がある各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - c. CC ボックスに、通知でコピーされる必要がある追加の各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - d. 件名ボックスに、通知の件名を入力します。
 - e. メッセージボックスに、通知に添付するメッセージを入力します。

6. 失敗したパブリケーションジョブの場合、デフォルトの受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、**ジョブを実行できませんでした**チェックボックスを選択し、**Job Server のデフォルト値を使用する**を選択して、Adaptive Job Server でデフォルトアドレスを使用します。
7. 失敗したパブリケーションジョブの場合、指定した受信者電子メールアドレスで電子メール通知を受信するには、**ジョブを実行できませんでした**チェックボックスを選択し、**ここで使用する値を設定する**を選択して、以下の操作を実行します。
 - a. **差出人**ボックスに、通知の送信元の電子メールアドレスまたは名前を入力します。
 - b. **宛先**ボックスに、通知を受信する必要がある各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - c. **CC** ボックスに、通知でコピーされる必要がある追加の各受信者の電子メールアドレスを入力します。
 - d. **件名**ボックスに、通知の件名を入力します。
 - e. **メッセージ**ボックスに、通知に添付するメッセージを入力します。
8. **スケジュール**をクリックします。

11.1.6.11.6 CMC におけるパブリケーションジョブに対する監査通知の有効化

成功または失敗したパブリケーションジョブを監査する場合に、監査通知を有効化します。

監査通知は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで有効化できます。(BI ラUNCHパッドにおけるパブリケーションの設計時には有効化できません) 監査の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

1. CMC で**フォルダ**管理エリアに移動し、監査通知を有効化するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
3. **スケジュール**ダイアログボックスで、**追加オプション**を展開し、**通知**をクリックし、**監査通知: 無効**を展開します。
4. 成功したパブリケーションジョブを監査する場合は、**ジョブの実行に成功しました**を選択します。
5. 失敗したパブリケーションジョブを監査する場合は、**ジョブを実行できませんでした**を選択します。
6. **スケジュール**をクリックします。

11.1.6.11.7 CMC におけるプロファイルの解決方法の選択

プロファイルの解決方法を選択して、プロファイルの競合が発生した場合に、このプロファイルの解決方法により、パブリケーションでインスタンスを結合するか別々のドキュメントとして配信するかを決定するようにします。

プロファイルの解決方法は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで選択できます。(BI ラUNCHパッドにおけるパブリケーションの設計時には選択できません)

1. CMC で**フォルダ**管理エリアに移動し、プロファイルの解決方法を選択するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
3. **スケジュール**ダイアログボックスで、**追加オプション**を展開し、**詳細**をクリックします。
4. **プロファイルの解決方法**で、次のいずれかのアクションを実行します。
 - 複数のユーザグループのプロファイルを別々のドキュメントに適用する場合、**[マージしない]**を選択します。

- 複数のユーザグループのプロファイルを同じドキュメントに適用する場合、[マージ]を選択します。

5. [スケジュール](#)をクリックします。

11.1.6.11.8 CMC におけるレポートバースト方法の選択

レポートバースト方法を選択して、パブリケーションでのソースドキュメントのパーソナライゼーション、処理、および配信方法を決定します。

レポートバースト方法を選択する前に、パブリケーションに Enterprise 受信者向けの Web Intelligence ドキュメントが含まれることと、パーソナライゼーションに使用されるプロファイルにフィルタ式が含まれることを確認します。

レポートバースト方法には、ドキュメントのパーソナライゼーションと処理の際に異なるフィルタタイプが使用されます。たとえば、[すべての受信者のデータベースフェッチ] オプションではレポートフィルタが使用され、[受信者ごとのデータベースフェッチ] オプションではクエリフィルタが使用されます。各フィルタタイプは、異なる演算子のセットをサポートします。レポートバースト方法でサポートされない演算子をフィルタ式が使用する場合は、パブリケーションに失敗することがあります。

レポートバースト方法は、セントラル管理コンソール (CMC) のみで選択できます。(BI ラウンチパッドにおけるパブリケーションの設計時には選択できません)

1. CMC で[フォルダ](#)管理エリアに移動し、レポートバースト方法を選択するパブリケーションを特定します。
2. パブリケーションジョブを右クリックして、[スケジュール](#)を選択します。
3. [スケジュール](#)ダイアログボックスで、[追加オプション](#)を展開し、[詳細](#)をクリックします。
4. [レポートバースト方法] の下で、レポートバースト方法を選択します。
5. [スケジュール](#)をクリックします。

11.1.7 パブリケーションの実行およびパブリッシュされたインスタンスの使用

パブリケーションデザインの途中または後の任意の時点で、[概要](#)ダイアログボックスでパブリケーションのプロパティを確認できます。プロパティには、パブリケーションのタイトル、場所、説明、ソースドキュメント、そのパブリケーションを受信する受信者数 (受信者タイプ (Enterprise または動的) によって並べ替え)、パブリケーションのパーソナライズ方法、配布形式および出力先などが含まれます。

[概要](#)をクリックして[概要](#)ダイアログボックスを開きます。ナビゲーションパネルの他のオプションを使用して、パブリケーションのプロパティの変更や、パブリケーションの保存やスケジュールを実行できます。

11.1.7.1 パブリケーションのテスト

BI ラウンチパッドのテストモードを使用し、受信者にパブリケーションを送信する前に自分自身に送信することができます。

テストでは、受信者と同じ情報を受信できます。パブリケーション受信者の BI 受信ボックスまたは電子メールアドレスの代わりに、ユーザの BI 受信ボックスまたは電子メールアドレスが使用されるよう、出力先は自動的に更新されます。必要に応じて、テストモードでは、元の受信者グループから選択した受信者を除外できます。

1. テストするパブリケーションを右クリックし、**テストモード**を選択します。
2. (オプション) **[テストモード]** ダイアログボックスで、Enterprise 受信者の一覧を編集します。
 - a. **[Enterprise 受信者]** をクリックします。
 - b. **[利用可能]** の下でユーザまたはユーザグループを選択し、**[>]** ボタンをクリックしてユーザまたはユーザグループを**[選択]** リストまたは **[除外する]** リストに移動します。
3. (オプション) 動的受信者のリストを編集するには以下の手順に従います。
 - a. **[動的受信者]** をクリックします。
 - b. **[動的受信者のソースの選択]** の下で、**[Web Intelligence レポート動的受信者プロバイダ]** または **[Crystal Reports 動的受信者データプロバイダ]** を選択します。
4. **[テスト]** をクリックします。

テストモードでパブリケーションが実行され、完了すると対象の "テスト" 受信者に送信されます。

11.1.7.2 パブリケーションの実行のスケジュール

パブリケーションをスケジュールする場合は、デフォルトの定期的なスケジュールパターンを使用するか、新しい値を入力できます。また、パブリケーションをスケジュールするたびに、受信者を変更することができます。

パブリケーションは、実行がスケジュールされる前に、デザインして保存する必要があります。

1. スケジュールするパブリケーションを右クリックして、**スケジュール**を選択します。
2. **[スケジュール]** ダイアログボックスで、**[定期]** をクリックし、**[オブジェクトの実行]** リスト内で選択されているオプションが正しいことを確認します。
3. **スケジュール** をクリックします。

11.1.7.2.1 パブリケーションジョブの進捗または履歴の表示

1. パブリケーションジョブを右クリックして、**履歴**を選択します。
履歴ダイアログボックスが表示され、**ステータス**列にジョブのステータス (成功、失敗または実行中) が表示されます。
2. ジョブのログファイルを表示するには、ダイアログボックスの下部で**ログファイルの表示**をクリックします。

11.1.7.3 パブリケーションの購読および購読解除

パブリケーションがスケジュールされてからこれを購読するには、パブリケーションの繰り返し発生するインスタンスを購読するか、パブリケーションを再スケジュールします。

パブリケーションを購読するには、パブリケーションに対する適切なアクセス権限が必要です。

Enterprise 受信者のみが、パブリケーションを購読および購読解除することができます。動的受信者は、パブリケーションの購読または購読解除ができません。

1. **ドキュメント**タブの**フォルダ**ドロフで、購読または購読解除するパブリケーションを探して選択します。

2. 次の操作のいずれかを実行します。

- BI ラUNCHパッドでパブリケーションを右クリックし、**購読**または**購読解除**を選択します。
- セントラル管理コンソール (CMC) で、**アクション** > **購読** をクリックするか **[購読解除]** を選択します。

11.1.7.3.1 パブリケーションインスタンスの購読および購読解除

繰り返し発生するパブリケーションがスケジュールされた後にも、Enterprise 受信者はその最初の繰り返し発生するパブリケーションを購読できます。たとえば、パブリケーションが週 2 回実行されるようスケジュールされている場合、最初のパブリケーションインスタンスを購読し、2 回目のインスタンスは購読しないよう指定できます。

パブリケーションインスタンスを購読するには、パブリケーションに対する適切なアクセス権限が必要です。

Enterprise 受信者だけがパブリケーションインスタンスを購読および購読解除することができます。動的受信者は、パブリケーションインスタンスの購読または購読解除ができません。

1. 次の操作のいずれかを実行します。

- BI ラUNCHパッドで、パブリケーションを右クリックし、**履歴**を選択します。
- セントラル管理コンソール (CMC) で、**アクション** > **履歴** を選択します。

2. **[履歴]** ダイアログボックスで、次のいずれかの操作を実行します。

- ラUNCHパッドでインスタンスを右クリックし、**購読**または**購読解除**を選択します。
- CMC でインスタンスを右クリックし、**アクション** > **購読** をクリックするか **[購読解除]** を選択します。

11.1.7.4 デフォルトの Enterprise の場所に送信されたパブリケーションの表示

受信者は、自身のパーソナライズ済みパブリケーションインスタンスのみを BI プラットフォームで表示できます。

1. 以下のアクションのいずれかを実行し、セントラル管理コンソール (CMC) を起動します。

- Windows で、**スタート** > **プログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
- Web ブラウザで、**http://<ServerName>:<ConnectionPort>/CMC** を入力します。<ServerName> は CMS 名、<ConnectionPort> は接続ポート番号 (インストール時に指定) で置き換えます。デフォルトの接続ポート番号は 8080 です。

2. ログオン認証情報を入力します。

- a. **システム**ボックスで、CMS 名と CMS ポートが正しいことを確認します。
- b. ユーザ名とパスワードを入力します。
- c. **認証**一覧から認証タイプを選択します。

3. **ログオン**をクリックします。

4. **フォルダ**の下で、パブリケーションを右クリックし **履歴**を選択します。

5. **履歴**ダイアログボックスで、**インスタンスの日時**列のリンクをクリックします。

6. 表示するインスタンスをダブルクリックします。

11.1.7.5 BI 受信ボックスに送信されたパブリケーションの表示

動的受信者は、BI 受信ボックスに送信されたパブリケーションを表示できます。BI ラウンチパッドにログインしてパブリケーション結果を表示することはできません。

1. 以下のアクションのいずれかを実行し、BI ラウンチパッドを起動します。
 - Windows で、**スタート** > **プログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム Java BI ラウンチパッド** をクリックします。
 - Web ブラウザで、**http://<ServerName>:<ConnectionPort>/BOE/BI** を入力します。<ServerName> は CMS 名、<ConnectionPort> は接続ポート番号 (インストール時に指定) で置き換えます。デフォルトの接続ポート番号は 8080 です。
2. ログイン認証情報を入力します。
 - a. **システム**ボックスで、CMS 名が正しいことを確認します。
 - b. ユーザ名とパスワードを入力します。
 - c. **認証**一覧から認証タイプを選択します。
3. **ログイン**をクリックします。
4. **マイ受信ボックス**をクリックします。
5. 表示するインスタンスをダブルクリックします。

11.1.7.6 パブリケーションインスタンスの再配布

受信者にインスタンスを再送信したいがパブリケーション全体を再実行したくない場合、成功したパブリケーションインスタンスを最初の受信者全員または受信者の一部に再配布できます。

最初のパブリケーション実行時に指定された受信者のみが、再配布されたインスタンスを受信できます。

1. 次の操作のいずれかを実行します。
 - BI ラウンチパッドで、パブリケーションを右クリックし、**履歴**を選択します。
 - セントラル管理コンソール (CMC) でパブリケーションを右クリックして、**アクション** > **履歴** を選択します。
2. **履歴**ダイアログボックスで、成功したパブリケーションインスタンスを選択します。
3. 次の操作のいずれかを実行します。
 - ラウンチパッドで、**その他のアクション** > **再スケジュール** を選択します。
 - CMC で、**アクション** > **再スケジュール** を選択します。
4. 再配布されるインスタンスを受信する受信者を選択します。
 - インスタンスを Enterprise の受信者に再配布するには、**[Enterprise 受信者]** をクリックし、**[>]** ボタンをクリックして受信者を **[利用可能]** リストから **[選択]** リストに移動します。
 - インスタンスを動的受信者に再配布する

- a. [\[動的受信者\]](#)をクリックし、受信者 ID、フルネーム、および電子メールアドレスにマップされている列が正しいことを確認します。
 - b. パブリケーションをすべての動的受信者に再配布するには、[\[完全リストの使用\]](#)を選択します。
 - c. パブリケーションを選択された動的受信者に再配布するには、[\[>\]](#) ボタンをクリックして受信者を[\[利用可能\]](#) リストから[\[選択\]](#) リストに移動します。
5. [\[再配布\]](#) をクリックします。
- パブリケーション履歴が表示され、再配布されたインスタンスのステータスが [\[実行中\]](#) となっています。[\[インスタンスの日時\]](#) 列の日付は、再配布の日時に合わせて更新されます。

11.1.7.7 失敗したパブリケーションの再試行

失敗したパブリケーションを再試行するには、パブリケーションインスタンスのログファイルを表示し、エラーを修正し、パブリケーションを再スケジュールします。

失敗したパブリケーションインスタンスを再試行するオプションを使用すると、次のことが可能です。

- 失敗したインスタンスを上書きします ([\[今すぐ実行\]](#) と [\[再スケジュール\]](#) では新しいインスタンスが作成されますが、[\[再試行\]](#) では失敗したインスタンス自体が使用されます)。
- 一部失敗の場合は、失敗した受信者のみを処理します。
- 全体的な失敗の場合は、新しいインスタンスを作成せずにジョブ全体を実行します。

i 注記

また、パブリケーションの [\[繰り返し\]](#) プロパティの [\[可能な再試行回数\]](#) および [\[再試行間隔 \(秒単位\)\]](#) を指定することによって、自動再試行を実行することもできます。失敗の場合、パブリケーションの再実行が試行されます。

1. 失敗したパブリケーションインスタンスを選択します。
2. 以下のアクションのいずれかを実行します。
 - BI ラウンチパッドで、[\[その他のアクション > 履歴\]](#) を選択します。
 - セントラル管理コンソール (CMC) で、[\[アクション > 履歴\]](#) を選択します。
3. 失敗したインスタンスを右クリックし、[\[再試行\]](#) をクリックします。
インスタンスのステータスが [\[実行中\]](#) になります。ステータスが [\[成功\]](#) になるまで待機します。

パブリケーションが再び失敗した場合は、新しいログファイルを確認し、発生したエラーを修正してください。

11.1.8 パブリケーションパフォーマンス

Adaptive Processing Server、公開サービス、およびパブリッシングポスト処理サービスを変更して、パブリケーションパフォーマンスを向上させることができます。

Adaptive Processing Server

表 78:

領域	考慮点
CPU およびメモリ	使用可能な CPU が多く、BI プラットフォーム Feature Pack 3 以降がインストールされているより高速なマシンに Adaptive Processing Server を移行します。Adaptive Processing Server は使用できる CPU 数に合わせて自動調整されます。
	専用の Adaptive Processing Server で公開サービスおよびパブリケーションポスト処理サービスを分離し、これらのサーバにホストされている使用されていないサービスを削除します。各サービスは、Adaptive Processing Server 上で多くの共有リソース（スレッドプールへのリクエスト、メモリ、および CPU）を消費するため、公開パフォーマンスが改善される場合があります。

公開サービス

公開はハードドライブに負荷をかけるプロセスであるため、公開サービスは入出力性能の高いマシン、または FRS 用に SAN ディスクを使用するマシンにインストールする必要があります。

表 79:

領域	考慮点
同時に実行される多数のパブリケーションインスタンス	<p>基礎をなす CMS、FRS、Adaptive Job Server、およびレポート処理サーバが適切に調整されている場合は、公開サービスを 1 つ以上のマシンの複数の Adaptive Processing Server に水平的に拡張することで、より多くのパブリケーションインスタンスを同時に処理できます。</p> <p>単一のパブリケーションジョブ（たとえば、受信者が 100 万人）は、複数の Adaptive Processing Server でホストされている公開サービス間で共有されません。公開サービスの水平的な拡張では、受信者数にかかわらず、単一のパブリケーションの処理時間は短縮されません。</p>

領域	考慮点
受信者の多いパブリケーション	<p>CPU および RAM がより多いマシン上で Adaptive Processing Server を垂直的に拡張することで、より多くの受信者を同時に処理し、Adaptive Processing Server でより多くのジョブを生成することができます。</p> <p>Adaptive Job Server およびレポート処理サーバも、スループット拡大のために適宜調整が必要になる場合があります。</p> <p>CPU コアが 9 個以上あるマシンで Adaptive Processing Server を実行する場合は、Adaptive Processing Server のヒープサイズを拡大 (-Xmx を 2 GB 以上に設定) にすることが適切です。CPU コア数が増えると、Adaptive Processing Server でより多くのスレッドを生成でき、スループットが増大します。ただし、スレッド数の増加に応じて RAM 容量も増大させる必要があります。</p>
公開クリーンアップオプション	再配信の必要のない大規模なパブリケーションのため、またはレポートでアーティファクトを表示する場合は、デフォルトの出力先を選択しないでください。
Crystal レポートパブリケーション	各受信者に固有のセキュリティを適用する必要がない場合は、[受信者のバッチごとのデータベースフェッチ] を選択します。データベースアクセスが複数の小規模な同時クエリにバッチ化されます。
Web Intelligence パブリケーション	<p>すべての受信者のデータベースフェッチまたは受信者ごとのデータベースフェッチを選択します。</p> <p>大規模なパブリケーションで [すべての受信者のデータベースフェッチ] を選択した場合は、データベースクエリを複数の小規模なクエリに分割するために、公開サービスをホストするすべての Adaptive Processing Server へのディスクデリバリを加速する以下のコマンドラインオプションを追加します。</p> <pre>- Dcom.businessobjects.publisher.scopebatch.max.recipients=<integer></pre>
Windows の単一フォルダへのディスクデリバリに時間がかかる大規模なパブリケーション	Microsoft TechNet (http://technet.microsoft.com ) で、"自動の短いファイル名の生成を無効にする方法" (文書番号: 210638) または "NtfsDisable8dot3NameCreation" を検索して、その説明に従います。
ファイル数が 300,000 を超える Windows の単一フォルダへのディスクデリバリに時間がかかる大規模なパブリケーション	http://technet.microsoft.com  で "how NTFS works" を検索して、その説明に従います。

パブリッシングポスト処理サービス

[ZIP ファイルとしてパッケージ化する] チェックボックス ([スケジュール] ダイアログボックス)、および/または [エクスポートされた PDF をマージ] チェックボックス ([出力先] ダイアログボックス) を選択するか、パブリケーションでカスタムポスト処理プラグインを有効化すると、パブリッシングポスト処理サービスが呼び出されます。

表 80:

領域	考慮点
[ZIP ファイルとしてパッケージ化する] および [エクスポートされた PDF をマージ] の両方が選択されているパブリケーション	パブリッシングポスト処理サービスを水平的に拡張すると、ZIP および PDF をマージするワークロードが、複数の Adaptive Processing Server にホストされる複数のパブリッシングポスト処理サービス全体に分散されます。

11.1.8.1 ソースドキュメントの追加に関する推奨事項

この節では、パブリケーションに動的コンテンツドキュメントを追加する際の推奨事項について説明します。

パブリケーションログファイルを使用して、失敗したパブリケーションをトラブルシューティングする

パブリケーションの実行をスケジュールすると、ログファイルが生成され、パブリケーションの実行時に発生したエラーが記録されます。パブリケーションインスタンスのログファイルをすべて表示するには、▶ **その他のアクション** ▶ **履歴** ▶ を選択します。[履歴] ダイアログボックスで、[インスタンスの日時] 列にあるインスタンスのリンクをクリックします。インスタンスの詳細が新しいウィンドウで開きます。

Crystal レポートでパラメータを使用したパーソナライゼーションを使用する場合は、パラメータをデフォルトに設定する

パラメータベースのパーソナライゼーションを実行すると、パブリケーションのパフォーマンスが低下する場合があります。Enterprise 受信者のプロファイルまたは動的受信者のパーソナライゼーション値にフィールドをマップして、Crystal レポートのパブリケーションをパーソナライズすると、処理速度が大幅に改善します。

パラメータを使用して Crystal レポートをパーソナライズする必要がある場合は、**パーソナライゼーション**セクションのパラメータをデフォルト値に設定します。

i 注記

パブリケーションで Enterprise 受信者のプロファイルを使用するには、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。

個々の動的コンテンツドキュメントをパブリケーションに追加する前に、それらを表示してスケジュールする

動的コンテンツドキュメントを正しく表示およびスケジュールできた場合は、データソース接続が正しく機能し、パブリケーションをスケジュールするときにソースドキュメントデータを最新表示できます。動的コンテンツドキュメントを正しく表示およびスケジュールできない場合は、データソース接続の設定が間違っていないか確認してください。設定の確認方法を次の表に示します。

ドキュメントの種類	データソース接続の設定の確認方法
Crystal レポート	CMC で Crystal レポートを選択し、 管理 > デフォルト設定 を選択します。 デフォルト設定 ダイアログボックスで、ナビゲーションパネルの データベース設定 をクリックします。
Web Intelligence ドキュメント	CMC で Web Intelligence ドキュメントを選択し、 管理 > デフォルト設定 を選択します。 デフォルト設定 ダイアログボックスで、ナビゲーションパネルの レポートユニバース をクリックします。

場合によっては、デザイナーで動的コンテンツドキュメントを開いてデータベースソース接続を設定し、CMS リポジトリにファイルを再エクスポートして、前のコピーを上書きする必要がある場合があります。動的コンテンツドキュメントのデータソース接続の設定については、デザイナーのマニュアルを参照してください。

不必要なデータの最新表示をしない

動的コンテンツドキュメントのデータを最新表示する必要がない場合は、**ソースドキュメント**セクションで、そのドキュメントの**実行時に最新表示**チェックボックスをオフにします。

11.1.8.2 動的受信者ソースの使用に関する推奨事項

動的受信者ソースは受信者 **ID** 列に従って並べ替える。

一般に、動的受信者ソースは [受信者 **ID**] 列に従って並べ替える必要があります。特に、高ボリュームのパブリケーションを実行している場合、または [受信者のパッチごとのデータベースフェッチ] を選択している場合は、複数のパーソナライゼーション値を持つ受信者への配信数を低減できるため、この並べ替えは重要です。

Crystal レポートの動的受信者ソースの場合は、データベースの設定情報が正しいことを確認する。

CMC で動的受信者ソースを選択し、**管理** > **デフォルト設定** を選択し、次の設定を確認します。

- [データベース設定] で、データベースログオン情報が正しく設定されており、[レポート実行時と同じデータベースログオン情報を使用する] が選択されている。
- [パラメータ] で、すべてのパラメータに値が指定されており、パラメータのすべての [表示時にプロンプトを表示] チェックボックスがオフになっている。

Crystal レポートの動的受信者ソースを使用する場合は、**RAS** が正しく設定されていることを管理者に確認する。

RAS (Report Application Server) は、少なくとも動的受信者ソースの受信者と同数のデータベースレコードを読み込むよう設定する必要があります。たとえば、100,000 人の受信者のデータを持つ動的受信者ソースを処理するには、100,000 件以上のデータベースレコードを読み込むよう RAS を設定する必要があります。

11.1.8.3 電子メールのパブリケーションインスタンスの送受信に関する推奨事項

可能であれば、電子メールパブリケーションインスタンスに埋め込まれたコンテンツを **Outlook 2003** で表示する。

可能であれば、電子メールパブリケーションインスタンスに埋め込まれたコンテンツを Outlook 2003 で表示する。電子メールパブリケーションインスタンスに埋め込まれたコンテンツを Outlook 2007 や、Hotmail、Gmail などの Web 電子メールアカウントで表示すると、形式上の問題が発生する場合があります。

Destination Job Server で電子メールが正しく設定されているか管理者に確認する。

Destination Job Server で電子メールが正しく設定されていることを確認する必要があります。電子メールで送信するパブリケーションは、Adaptive Job Server の出力先が正しく設定されていないことが原因で失敗する場合があります。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド*を参照してください。

重要免責事項および法的情報

コードサンプル

この文書に含まれるソフトウェアコード及び / 又はコードライン / 文字列 (「コード」) はすべてサンプルとしてのみ提供されるものであり、本稼働システム環境で使用することが目的ではありません。「コード」は、特定のコードの構文及び表現規則を分かりやすく説明及び視覚化することのみを目的としています。SAP は、この文書に記載される「コード」の正確性及び完全性の保証を行いません。更に、SAP は、「コード」の使用により発生したエラー又は損害が SAP の故意又は重大な過失が原因で発生させたものでない限り、そのエラー又は損害に対して一切責任を負いません。

アクセシビリティ

この SAP 文書に含まれる情報は、公開日現在のアクセシビリティ基準に関する SAP の最新の見解を表明するものであり、ソフトウェア製品のアクセシビリティ機能の確実な提供方法に関する拘束力のあるガイドラインとして意図されるものではありません。SAP は、この文書に関する一切の責任を明確に放棄するものです。ただし、この免責事項は、SAP の意図的な違法行為または重大な過失による場合は、適用されません。さらに、この文書により SAP の直接的または間接的な契約上の義務が発生することは一切ありません。

ジェンダーニュートラルな表現

SAP 文書では、可能な限りジェンダーニュートラルな表現を使用しています。文脈により、文書の読者は「あなた」と直接的な呼ばれ方をされたり、ジェンダーニュートラルな名詞 (例: 「販売員」又は「勤務日数」) で表現されます。ただし、男女両方を指すとき、三人称単数形の使用が避けられない又はジェンダーニュートラルな名詞が存在しない場合、SAP はその名詞又は代名詞の男性形を使用する権利を有します。これは、文書を分かりやすくするためです。

インターネットハイパーリンク

SAP 文書にはインターネットへのハイパーリンクが含まれる場合があります。これらのハイパーリンクは、関連情報を見いだすヒントを提供することが目的です。SAP は、この関連情報の可用性や正確性又はこの情報が特定の目的に役立つことの保証を行いません。SAP は、関連情報の使用により発生した損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、その損害に対して一切責任を負いません。すべてのリンクは、透明性を目的に分類されています (<http://help.sap.com/disclaimer> を参照)。



www.sap.com/contactsap

© 2015 SAP SE or an SAP affiliate company. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、SAP SE 又は SAP の関連会社の明示的な許可なくして、いかなる形式でも、いかなる目的にも複製又は伝送することはできません。本書に記載された情報は、予告なしに変更されることがあります。SAP SE 及びその頒布業者によって販売される一部のソフトウェア製品には、他のソフトウェアベンダーの専有ソフトウェアコンポーネントが含まれています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。

これらの文書は、いかなる種類の表明又は保証もなしで、情報提供のみを目的として、SAP SE 又はその関連会社によって提供され、SAP 又はその関連会社は、これら文書に関する誤記脱落等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP 又はその関連会社の製品及びサービスに対する唯一の保証は、当該製品及びサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

本書に記載される SAP 及びその他の SAP の製品やサービス、並びにそれらの個々のロゴは、ドイツ及びその他の国における SAP SE (又は SAP の関連会社) の商標若しくは登録商標です。本書に記載されたその他すべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。

商標に関する情報および表示の詳細については、<http://www.sap.com/corporate-en/legal/copyright/index.epx> をご覧ください。